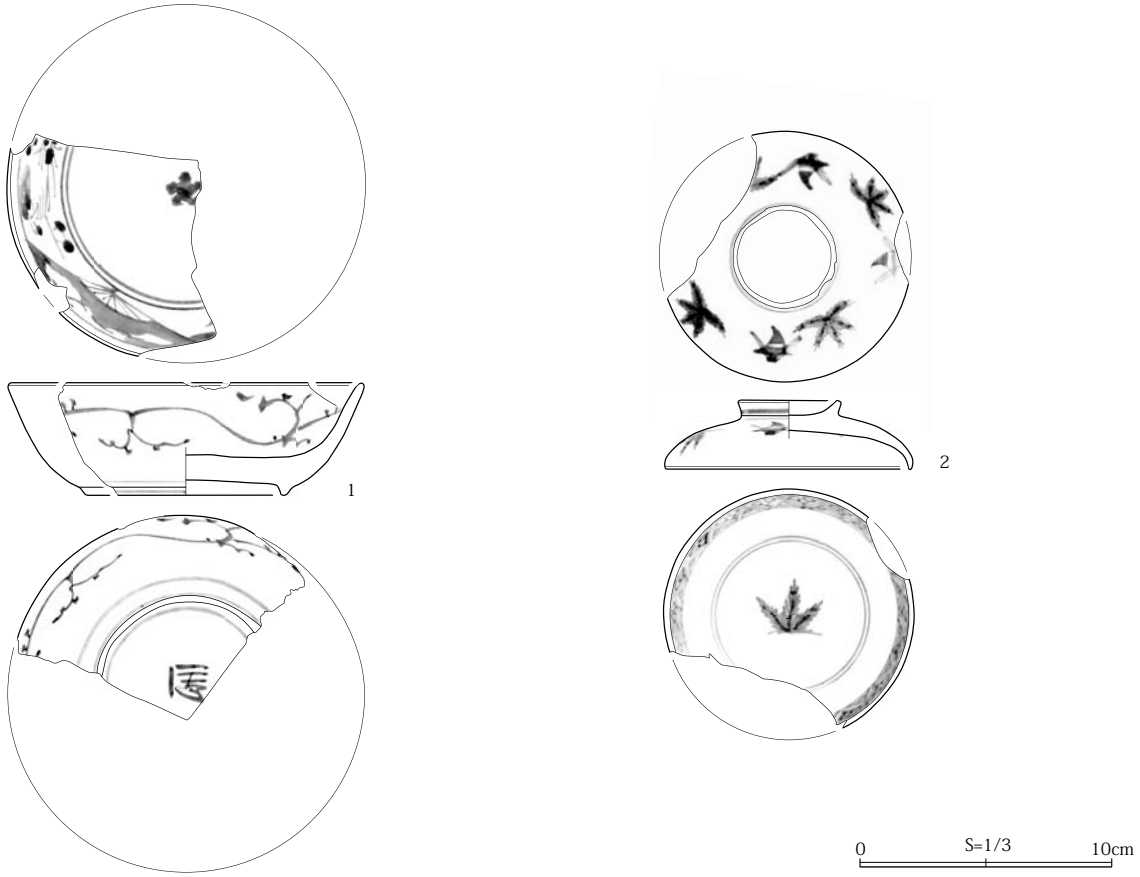


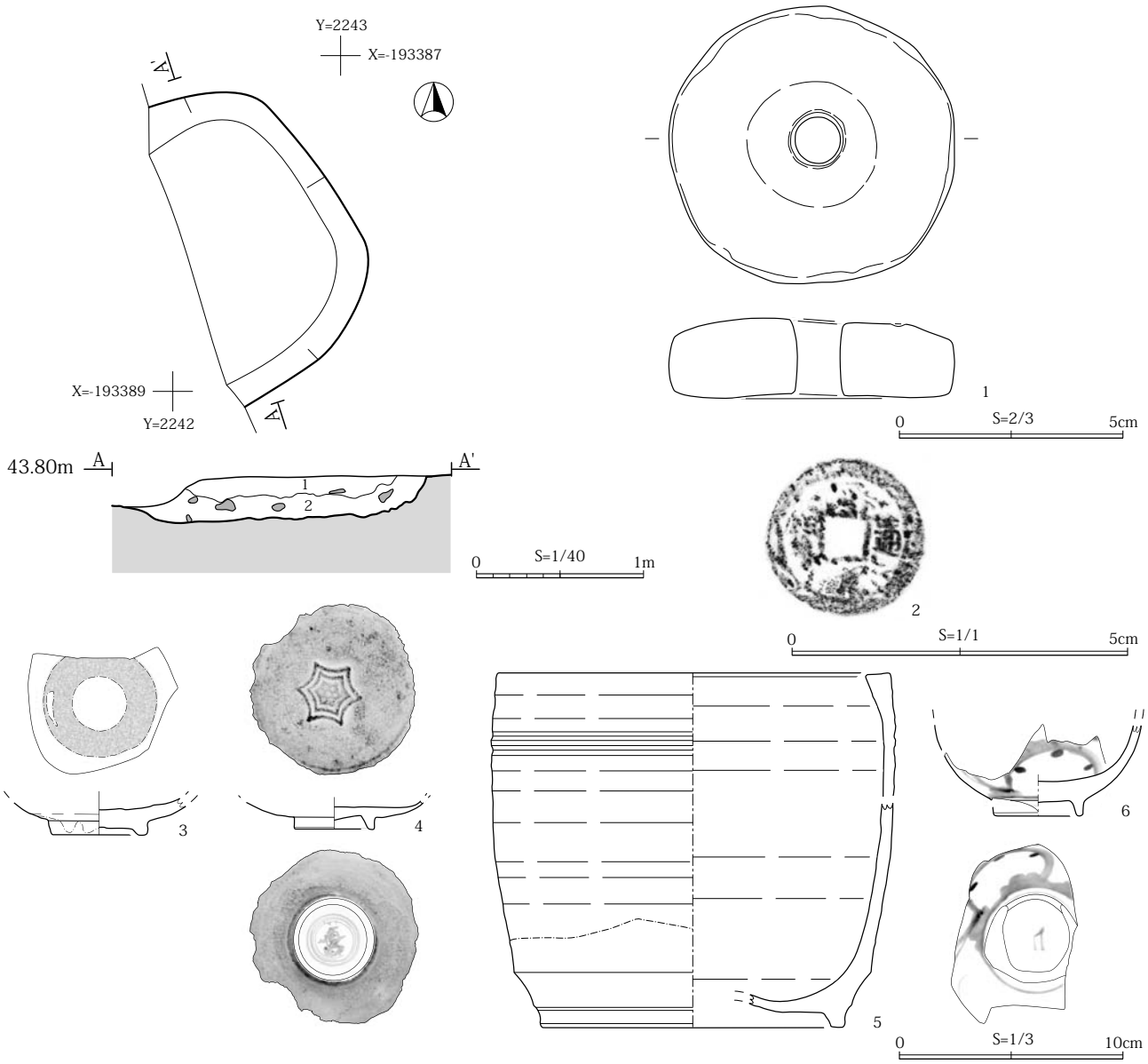
図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法量（cm）			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	129-7	1 層	磁器	皿	口縁～高台	密	（14.2）	（8.1）	（4.45）	波佐見	18 世紀後半	染付唐草文　高台内に銘 内面：染付扇文 草花文 コンニャク印判の五弁花	J-135
2	129-8	1 層	磁器	碗の蓋	口縁～高台	密	9.8	4.1	2.75	肥前	18 世紀後半～19 世紀初頭	染付若松文 内面：四方襷　二重圏線	J-136

第 223 図　SX1 性格不明遺構出土遺物（2）

2）SX7 性格不明遺構（第 224 図、図版 86-1 ～ 3）

N2-W6 グリッドに位置する土坑状の遺構である。西側を撹乱により削平されており、東側半分のみを検出した。確認した規模は、長軸 1.87m、短軸 1.04m、深さ 26cm を測る。平面形は判然としないが、主軸方向は N-18゜-W を示す隅丸方形もしくは隅丸長方形と推定される。堆積土は砂質シルトを主体として 2 層に分けられ、黄褐色シルトブロック及び炭化物を少量含む。底面は平坦で、側面は内湾しながら緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形である。

遺物は 1・2 層から、陶器では大堀相馬産の碗や皿、瀬戸・美濃産の鉢が、磁器では肥前産の碗や皿、波佐見産の碗、瀬戸・美濃産の碗等 17 世紀末葉～ 19 世紀にかけての遺物が出土した。瀬戸・美濃産の鉢（第 223 図 -5）は SX11 南側の堆積土中より出土した破片と接合関係にある。陶磁器以外では、瓦質土器や土師質土器の破片等が出土している他、底面直上で石製の紡錘車が 1 点、寛永通宝が 1 点出土した。そのうち、石製品 1 点、古銭 1 点、陶器で、肥前産、大堀相馬産の皿、瀬戸美濃産の鉢、磁器では波佐見産の碗 1 点を図示した。



層名	土色		土質	粘性	しまり	備　　考
1	10YR5/2	灰黄褐色	砂質シルト	ややあり	あり	径 1 ～ 2cm の 10YR5/4 黄褐色シルトブロック少量　炭化物微量
2	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	あり	径 1 ～ 3cm の 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロック少量　炭化物微量

図版番号	写真図版番　号	層位	種類	法量（cm・g）				備考	登録番号
				長さ	幅	厚さ	重量		
1	130-1	2 層	石製品	6.4	6.4	1.75	63.24	紡錘車　石英安山岩質凝灰岩	K-13

図版番号	写真図版番　号	層位	銭貨名	初鋳年	法量（cm・g）			備考	登録番号
					外径	穿径	重量		
2	130-2	2 層	寛永通宝（新）	1697	2.3	0.6	1.9		N-53

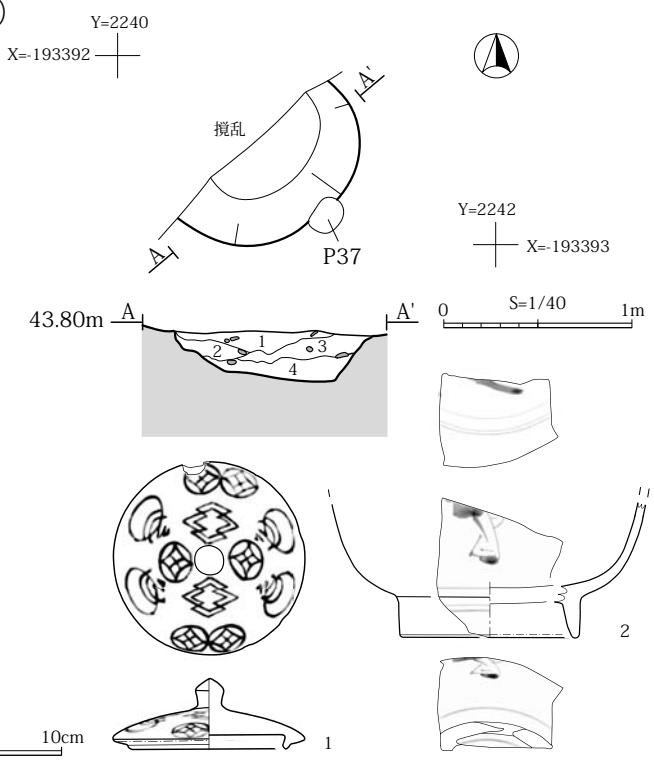
図版番号	写真図版番　号	層位	種別	器種	部位	胎土	法量（cm）			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
3	130-3	1 層	陶器	皿	体部～高台	やや粗	-	4.3	(1.65)	肥前	17 世紀後葉	灰釉 蛇ノ目釉剥ぎ	I-192
4	130-4	2 層	陶器	皿	口縁～体部	やや密	-	3.6	(1.28)	大堀相馬	18 世紀後葉	灰釉 貫入 内面：見込みに印刻 高台内に墨書「善」	I-193
5	130-5	2 層	陶器	鉢	口縁～体部 体部～高台	粗	(17.7)	(13.5)	(15.85)	瀬戸・美濃	18 世紀末葉～19 世紀前葉	鉄釉	I-194
6	130-6	1 層	磁器	碗	体部～高台	密	(9.2)	(3.9)	4.04	波佐見	17 世紀末葉～18 世紀前半	染付草花文	J-137

第 224 図　SX7 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物

3）SX12 性格不明遺構（第 225 図、図版 86-4･5）

N1-W6 グリッドに位置する土坑状の遺構である。北西側は撹乱により削平され、南東端で P37 と重複し、P37 より古い。確認した規模は、長軸 1.08m、短軸 51cm、深さ 26cm を測る。残存部の平面形は半円形である。堆積土は黒褐色砂質シルトを主体とし 4 層に分けられる。底面は東側に僅かに傾斜し、壁面は東側を除いて内湾しながら緩やかに立ち上がり、東側は外傾して直線的に立ち上がる。断面形は逆台形である。

遺物は 1 層から瓦の破片や、瀬戸・美濃産の鉢、肥前産の磁器碗や蓋等 18 世紀後葉～ 19 世紀代の遺物が出土している。そのうち、磁器 2 点、肥前産の蓋と碗を図示した。



層名	土色		土質	粘性	しまり	備　考
1	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり	径 2 ～ 5cm の小礫多量
2	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり	径 5 ～ 10cm の礫多量
3	2.5Y3/2	黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり	径 5 ～ 10cm の礫少量
4	2.5Y3/2	黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり	径 2 ～ 3cm の礫多量

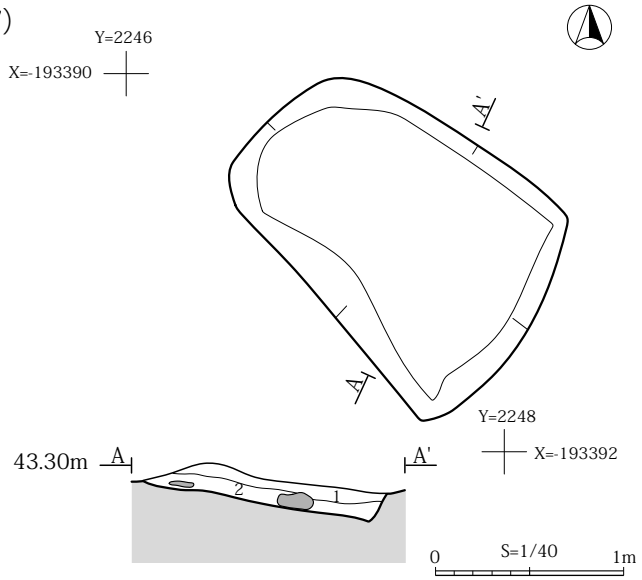
図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法量（cm）			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	130-7	1 層	磁器	蓋	摘み～口縁	密	6.6	5.4	2.3	肥前	18 世紀後葉	染付宝珠文	J-138
2	130-8	1 層	磁器	碗	体部～高台	密	-	(7.15)	(5.4)	肥前	18 世紀後葉～19 世紀前葉	染付人物文 圏線 内面：染付	J-139

第 225 図　SX12 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物

4）SX15 性格不明遺構（第 226 図、図版 86-6・7）

N1-W6 グリッドに位置する浅い土坑状の遺構である。規模は、長軸 1.76m、短軸 1.3m、深さ 21cm を測る。平面形は主軸方向 N-50°-W を示す不整隅丸長方形である。堆積土は 2 層に分けられ、上層は炭化物の堆積で、下層は砂質シルトが堆積する。底面は円礫が並ぶ石列遺構の上面に当たり、東側へ傾斜して東端で急激に立ち上がり、断面形は V 字形である。

遺物は 1 層から漆器椀の破片が出土したが細片のため図示しえなかった。



層名	土色		土質	粘性	しまり	備　考
1	N1.5/	黒色	炭化物	なし	なし	炭化物焼土粒微量
2	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	ややあり	ややあり	径 10 ～ 20cm の円礫多量

第 226 図　SX15 性格不明遺構平面図・断面図

（3）石列遺構（第 227 図、図版 86-8）

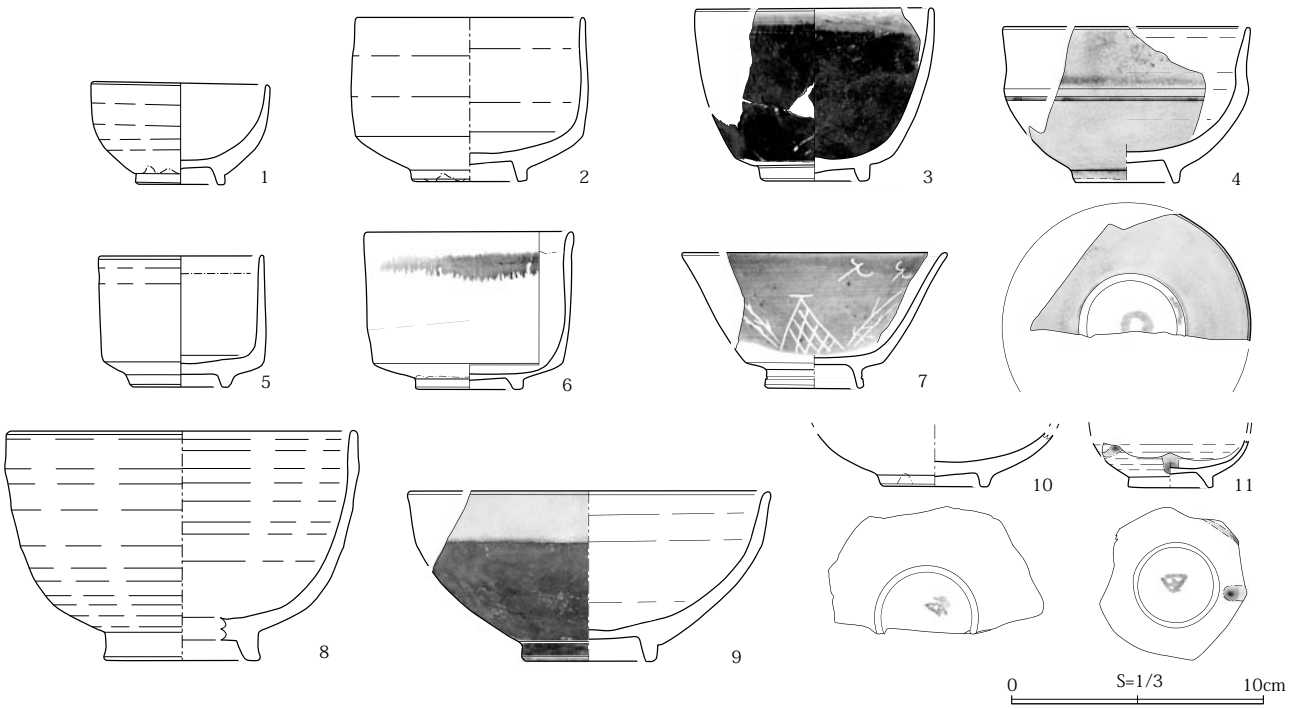
N1・N2-W6 グリッドに位置し、南北に走る 3 条の石列を呈する遺構である。確認した規模は、長さ約 15.5m、幅約 4m を測る。平面形は僅かに蛇行する S 字状であり、主軸方向は N-3°-E を示す。Ⅲ層中、もしくはⅣ層上面近くより出土した。長さ 7 ～ 40cm、幅 4 ～ 25cm、厚さ 3 ～ 20cm の円礫や亜円礫が南東方向へ傾斜しながら雑然と並ぶ。また、ところどころで整然と向きをそろえて直線状に並んでいるものも見られる。石の隙間からは陶磁器や瓦質土器等が多量に出土した。検出状況から、この石列は南東側へ傾斜するⅣ層上にⅢ層を盛土する際の土留めの役割を有するものと推測される。

遺物は 17 世紀～ 19 世紀中葉までの陶磁器や、蚊遣り、火鉢等の瓦質土器、灯明皿や焼塩壺、火入れ等の土師質土器等多量に出土した。遺物はⅢ層出土遺物として他の遺物とともに図示した。当遺構の時期はⅢ層が盛土された時期と考えられ 19 世紀中葉以降、幕末～明治時代初頭と推測される。

第 227 図　石列遺構平面図・断面図

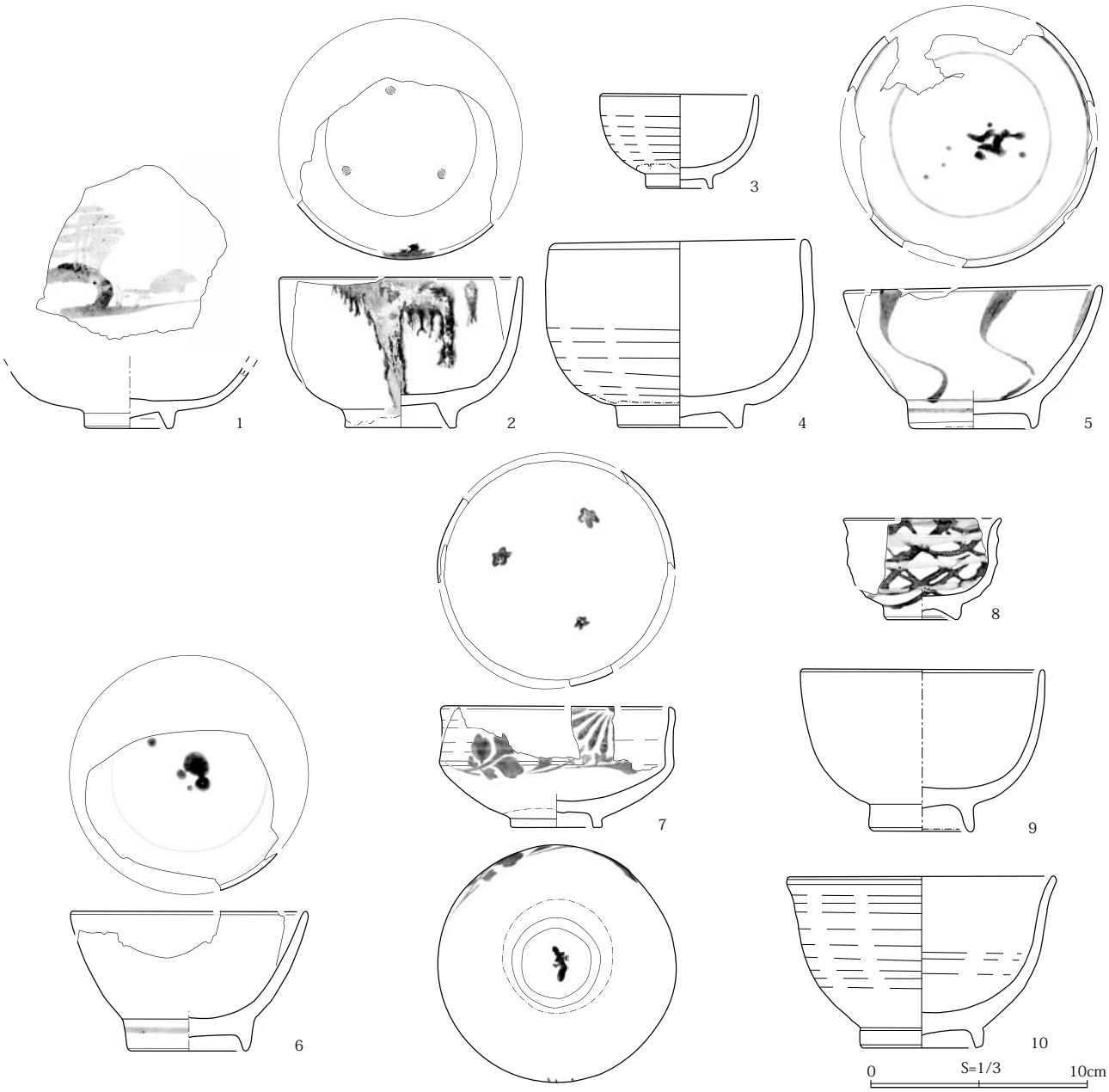
(3) Ⅲ層出土遺物（第 228 ～ 250 図、図版 130-9 ～ 150-2）

Ⅲ層からの出土遺物は破片数で 7,151 点である。内訳は陶器 3,371 点、磁器 2,565 点、瓦質土器 329 点、土師質土器 324 点、瓦 398 点、金属製品 85 点、石製品 15 点、木製品 4 点、土製品 26 点、その他 34 点である。ここでは 176 点を図示した。陶器は 18 世紀中葉～ 19 世紀中葉の大堀相馬産の碗や皿、土瓶等が多く、次いで堤産や在地産の擂鉢や甕、小野相馬産の皿や鉢等が出土している。磁器では 18 世紀中葉～ 19 世紀代の肥前産のものが多く、次いで 19 世紀になって生産が始められた瀬戸・美濃産の碗や皿が多く見られる。その他少量であるが、切込産の磁器皿等が出土した。17 世紀～ 18 世紀前半の肥前産や瀬戸・美濃産の陶器、肥前産や波佐見産の磁器も比較的少量であるが出土している。Ⅲ層からは銅版転写の染付け碗等、明治以降の磁器や堤焼きの陶管等も出土した。その他の遺物では、瓦質土器は蚊遣りと火鉢が大半を占め、土師質土器は皿や煤の付着した灯明皿が多いが、その他に焼塩壺やミニチュアの釜や碗、壺等が見られる。また人形や犬、猪等の土製品、碁石や硯等が出土した。



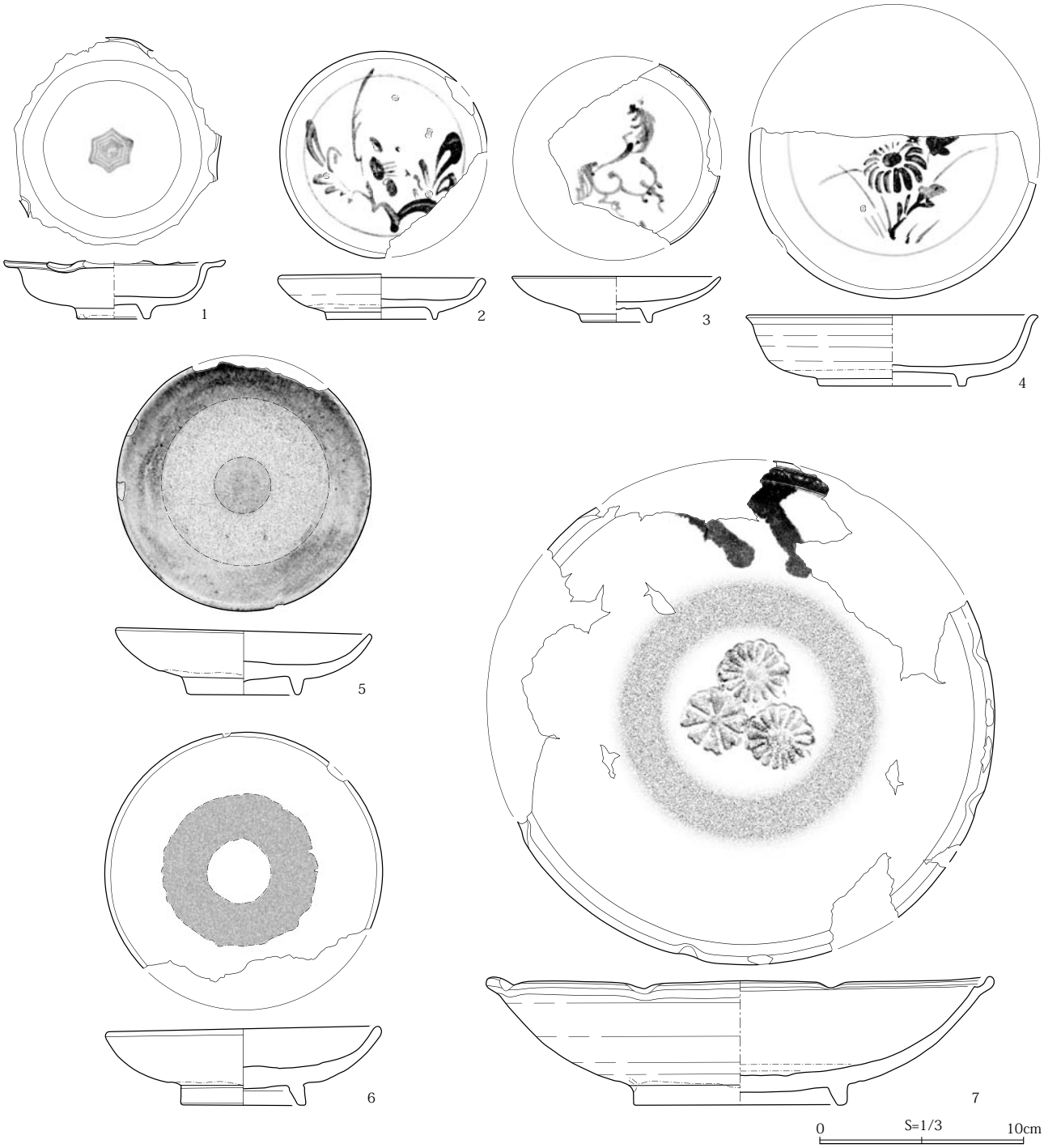
図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量（cm）			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	130-9	N1-W6	陶器	碗	口縁～高台	密	7.1	3.4	4.1	大堀相馬	18 世紀後葉	灰釉	I-195
2	131-1	N2-W6	陶器	碗	口縁～高台	やや密	(9.1)	4.6	6.52	大堀相馬	18 世紀後半～19 世紀初頭	灰釉 貫入	I-196
3	131-2	N2-W6	陶器	碗	口縁～高台	やや密	9.5	4.3	6.9	大堀相馬	18 世紀～19 世紀前葉	鉄釉	I-197
4	131-3	N1-W6	陶器	碗	口縁～高台	やや粗	(9.8)	(4.2)	6.2	大堀相馬	18 世紀中葉～後葉	灰釉 貫入 高台内に墨書「○」	I-198
5	131-4	N1-W6	陶器	碗	口縁～高台	やや密	6.6	4.0	5.2	大堀相馬	18 世紀後葉	灰釉　貫入	I-199
6	131-5	N1-W6	陶器	碗	口縁～高台	やや密	8.3	4.3	6.3	大堀相馬	19 世紀前葉～中葉	灰釉 貫入 飴釉掛け流し	I-200
7	131-6	N1-W6	陶器	碗	口縁～底部	密	(10.5)	3.6	5.4	大堀相馬	19 世紀前半	灰釉　陰刻	I-201
8	131-9	N1-W7	陶器	碗	口縁～高台	やや粗	(14.0)	(6.1)	9.1	大堀相馬	18 世紀末～19 世紀初頭	灰釉	I-202
9	131-7	N1-W6	陶器	掛分け碗	口縁～高台	やや密	(14.2)	5.1	6.8	大堀相馬	18 世紀後葉	鉄釉　灰釉	I-203
10	131-10	N1-W6	陶器	碗	体部～高台	やや密	-	(4.35)	(2.15)	大堀相馬	18 世紀代	灰釉 貫入 高台内に墨書「岡」	I-204
11	131-8	N1-W5	陶器	碗	体部～高台	密	-	3.0	2.85	大堀相馬	19 世紀代	灰釉 緑釉 高台内に墨書「田」 最大径 6.1cm	I-205

第 228 図　Ⅲ層出土遺物（1）



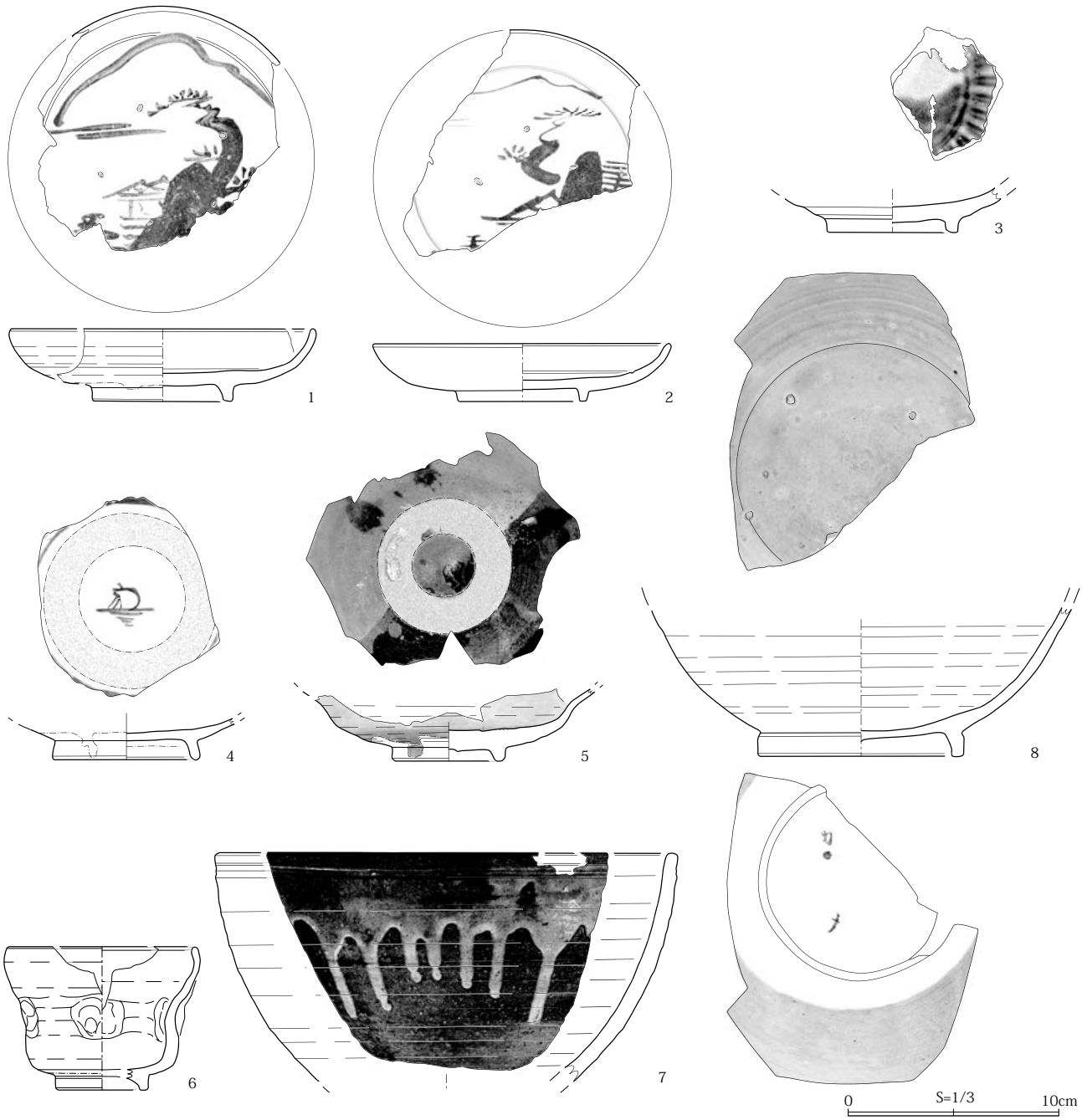
図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量（cm）			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	132-1	N1-W5	陶器	碗	体部～高台	やや密	-	4.12	(3.8)	大堀相馬	18 世紀後半	灰釉　内面：鉄絵　貫入	I-206
2	132-2	N1-W6	陶器	碗	口縁～底部	やや密	11.3	5.2	7.0	小野相馬	18 世紀前葉～中葉	灰釉飴釉掛け流し　内面：灰釉　見込みに目跡３ヶ	I-207
3	132-3	N2-W6	陶器	碗	口縁～高台	やや粗	7.3	3.05	4.4	瀬戸・美濃	18 世紀後半～19 世紀初頭	灰釉　貫入あり	I-208
4	132-4	N1-W7	陶器	碗	口縁～高台	粗	12.1	5.75	6.75	瀬戸・美濃	18 世紀中葉	灰釉　見込みに目跡３ヶ	I-209
5	132-6	N1-W6	陶器	広東碗	口縁～高台	やや粗	12.0	5.35	6.7	瀬戸・美濃	18 世紀末葉～19 世紀前葉	染付ねじ花文 内面：圏線　陶胎染付	I-210
6	132-7	N1-W5	陶器	広東碗	口縁～高台	やや密	(11.0)	5.6	6.5	瀬戸・美濃	18 世紀末葉～19 世紀前葉	灰釉　圏線 陶体染付	I-211
7	132-5	N1-W6	陶器	碗	口縁～高台	やや粗	(10.6)	(4.1)	5.6	京都	18 世紀後半	透明釉　上絵付け（赤絵、緑釉、呉須）	I-212
8	132-8	N2-W6	陶器	端反碗	口縁～高台	やや密	(7.3)	(3.5)	4.7	萩	18 世紀後半	ピラ掛け（鉄釉　白濁釉）	I-213
9	132-9	N1・N2-W6	陶器	碗	口縁～高台	やや粗	(11.3)	(4.8)	7.5	肥前	17 世紀後半	灰釉　貫入あり	I-214
10	132-10	N2-W6	陶器	井戸茶碗	口縁～高台	やや粗	12.45	5.7	7.9	唐津	17 世紀前半	長石釉　端反り気味	I-215

第 229 図　Ⅲ層出土遺物（2）



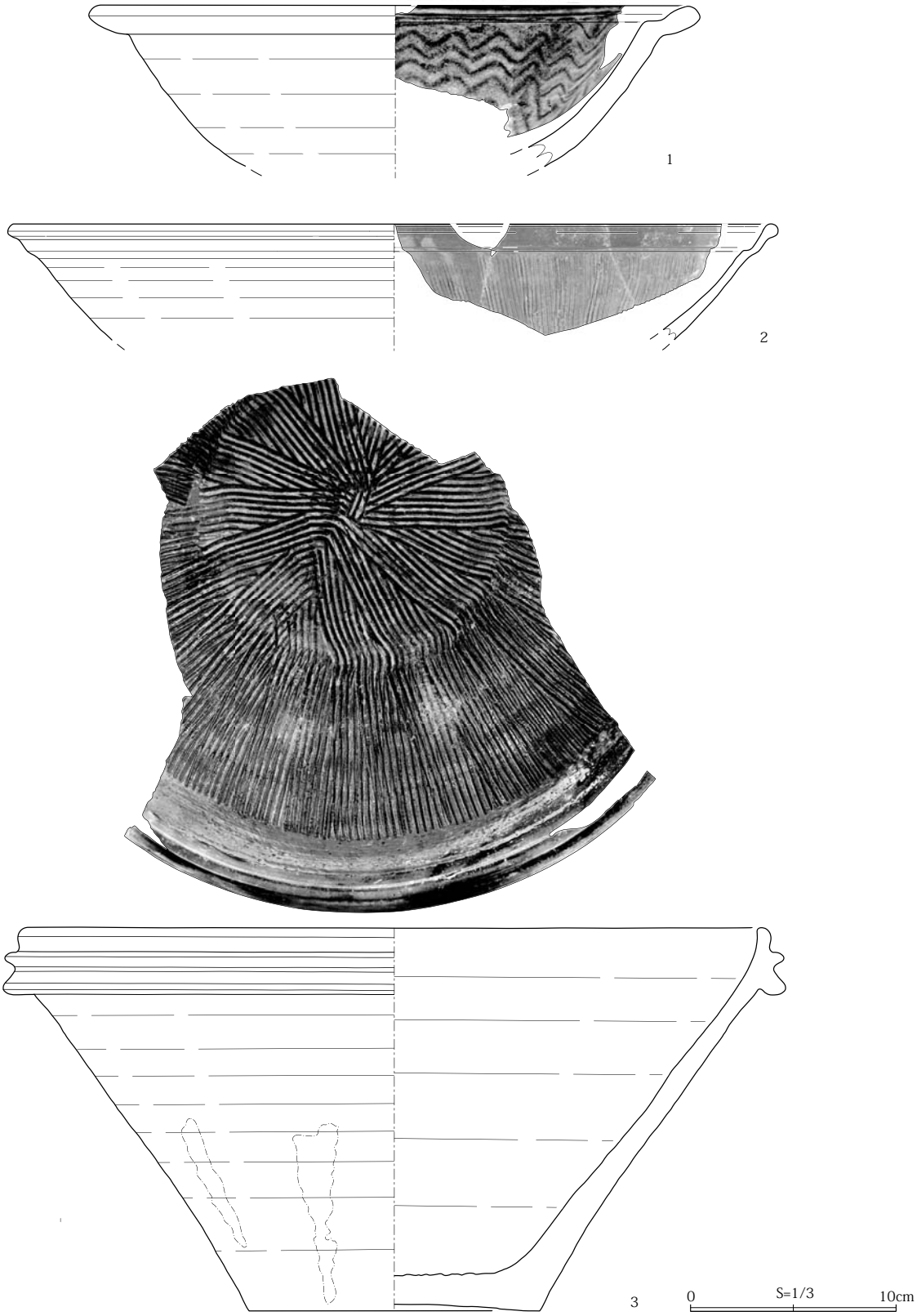
図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量（cm）			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	133-1	N1-W6	陶器	輪花皿	口縁～高台	密	10.4	3.5	2.8	大堀相馬	18 世紀後半	灰釉　内面：陰刻	I-216
2	133-2	N1-W5	陶器	皿	口縁～高台	やや密	10.2	5.35	2.2	大堀相馬	19 世紀前半	灰釉　貫入あり　内面：鉄絵草花文　見込みに目痕４ヶ	I-217
3	133-3	N2-W6	陶器	皿	口縁～高台	やや密	(10.25)	3.45	2.25	大堀相馬	19 世紀前葉	灰釉　貫入　内面：鉄絵（馬）高台内に刻印（渦巻き）	I-218
4	133-4	N1-W6	陶器	皿	口縁～高台	密	14.2	7.2	3.5	大堀相馬	18 世紀末～19 世紀前半	灰釉　内面：鉄絵草花文	I-219
5	133-5	N1-W6	陶器	皿	口縁～高台	密	12.6	5.60	3.0	小野相馬	18 世紀後半	灰釉　蛇の目釉剥ぎ	I-220
6	133-6	N1-W5	陶器	皿	口縁～高台	やや粗	13.6	6.15	3.9	小野相馬	18 世紀中葉～後葉	灰釉　蛇ノ目釉剥ぎ	I-221
7	133-7	N2-W6	陶器	輪花皿	口縁～高台	粗	(25.0)	10.1	6.3	小野相馬	18 世紀後葉	灰釉　貫入　内面：見込みに陰刻	I-222

第 230 図　Ⅲ層出土遺物（3）



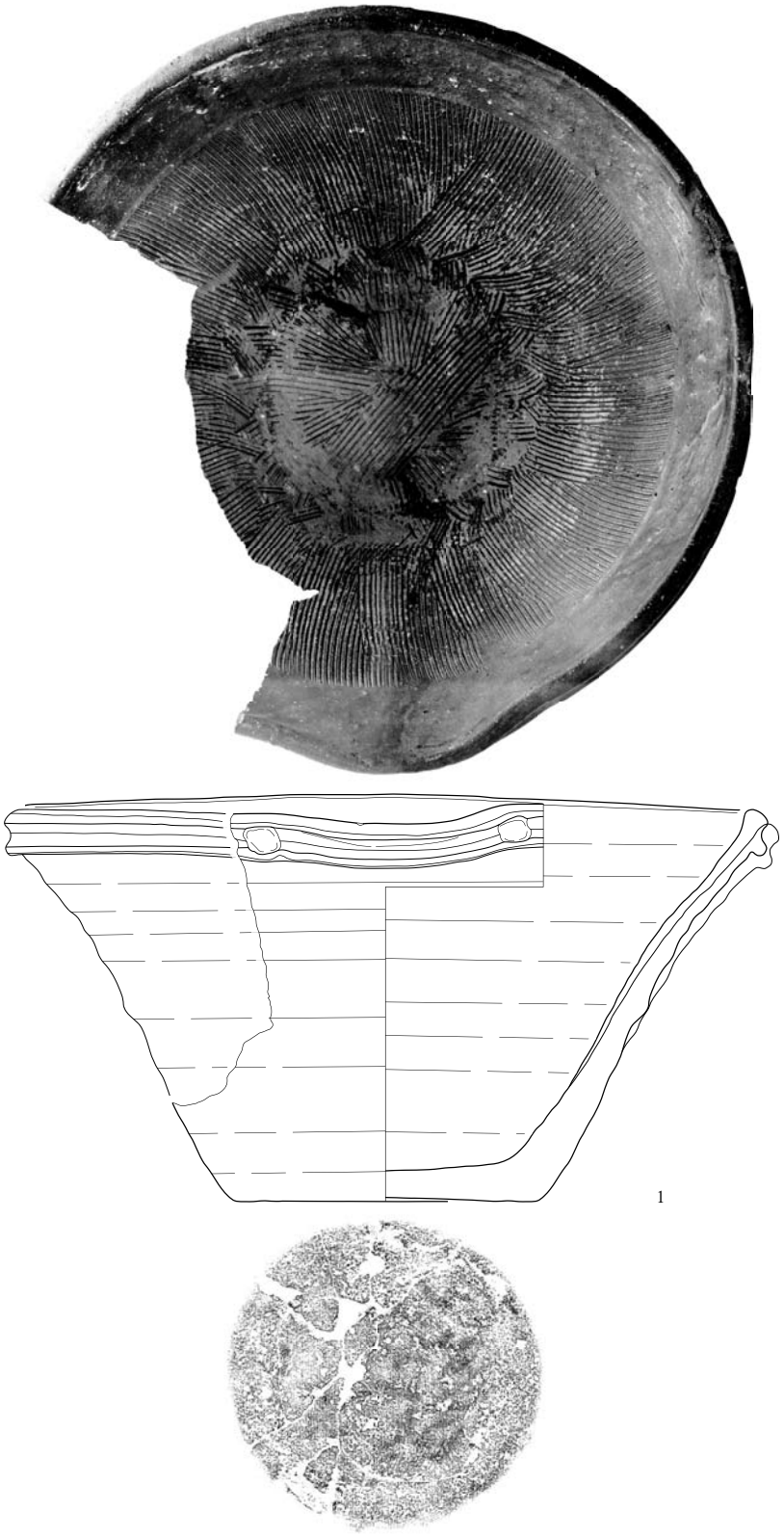
図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量（cm）			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	133-8	N1-W5	陶器	皿	口縁～高台	やや粗	(14.30)	6.7	3.4	瀬戸・美濃	18 世紀後半	灰釉 内面：鉄絵山水楼閣文 見込みに沈線	I-223
2	133-9	N1-W6	陶器	皿	口縁～高台	やや密	14.2	6.2	2.75	瀬戸・美濃	19 世紀初頭	灰釉 内面：鉄絵山水楼閣文	I-224
3	134-1	S1-W6	陶器	輪花皿	体部～高台	やや粗	-	(6.2)	(2.1)	瀬戸・美濃	17 世紀前半	無釉 内面：緑釉 透明釉 見込みに目痕あり	I-225
4	134-3	S1-W8	陶器	皿	体部～高台	やや密	-	(7.0)	(1.95)	在地	19 世紀代	透明釉 内面：染付帆掛舟文 蛇ノ目釉剥ぎ	I-226
5	134-2	N2-W4	陶器	皿	体部～高台	やや密	-	5.4	(3.4)	肥前	17 世紀後半？	鉄釉灰釉掛け分け 蛇の目釉剥ぎ　見込みに重ねた痕あり	I-227
6	134-5	N1-W6	陶器	向付	口縁～高台	密	(9.1)	(4.4)	(6.82)	京都？	不明	白化粧　貫入	I-228
7	134-4	N2-W6	陶器	鉢	口縁～体部	やや密	(22.0)	-	(10.5)	堤	19 世紀代	鉄釉・灰釉、白濁釉掛け流し	I-229
8	134-6	N1-W6	陶器	鉢	体部～高台	やや密	-	9.80	6.95	大堀相馬	18 世紀後葉～19 世紀	灰釉　ヘラ削り 見込みに目跡あり 高台内に墨書「カ・メ」	I-230

第 231 図　Ⅲ層出土遺物（4）



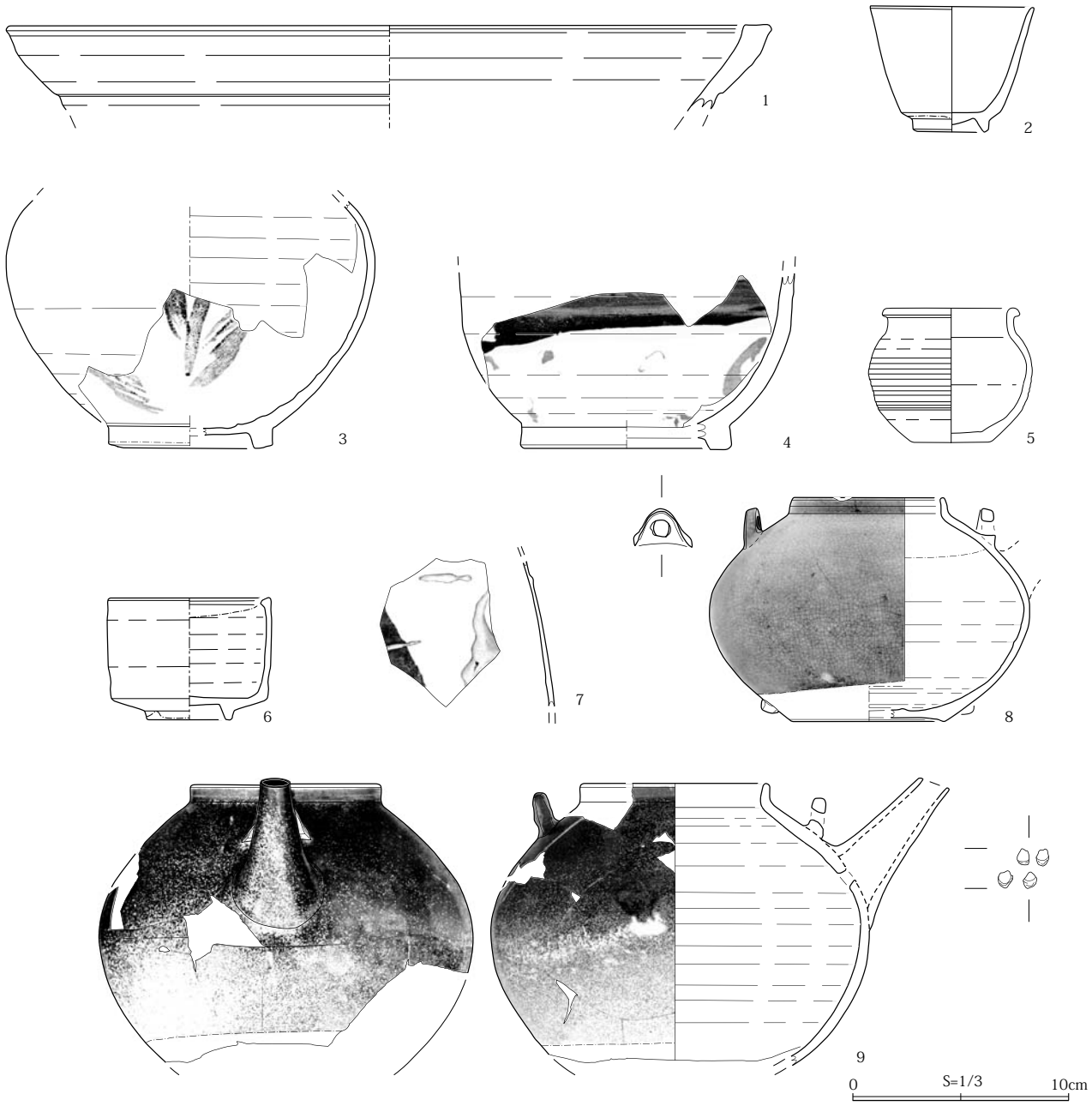
図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量（cm）			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	134-7	N1-W6	陶器	鉢	口縁～体部	やや密	(29.8)	(14.6)	(7.8)	唐津	18 世紀前葉～中葉	灰釉　ヘラケズリ 内面：白化粧　ハケメ　ロクロ回転右	I-231
2	134-8	N2-W6	陶器	鉢	口縁～高台	やや粗	(37.6)	-	5.65	在地	19 世紀	鉄釉　内面：櫛目 12 本 1 単位	I-232
3	135-1	N2-W6	陶器	擂鉢	口縁～底部	やや密	(34.7)	14.2	18.65	在地	18 世紀末葉～ 19 世紀	鉄釉　内面：櫛目 9 本 1 単位 回転糸切痕　ロクロ右回転	I-233

第 232 図　Ⅲ層出土遺物（5）



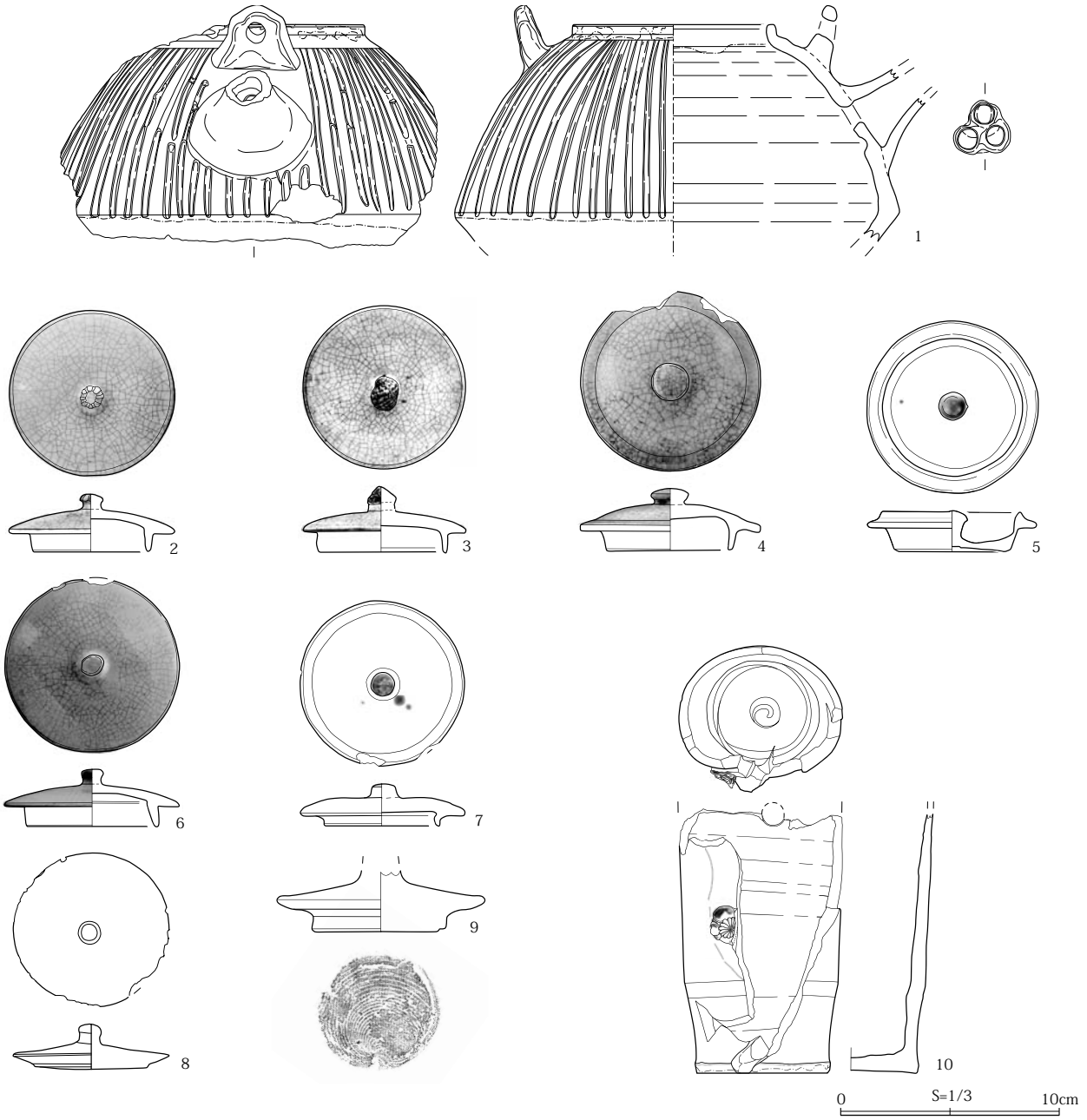
図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量（cm）			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	135-2	N1-W6	陶器	擂鉢	口縁～底部	やや密	31.5	12.7	16.8	在地	18 世紀	鉄釉 内面：櫛目 12 本 1 単位 ロクロ回転右	I-234

第 233 図　Ⅲ層出土遺物（6）



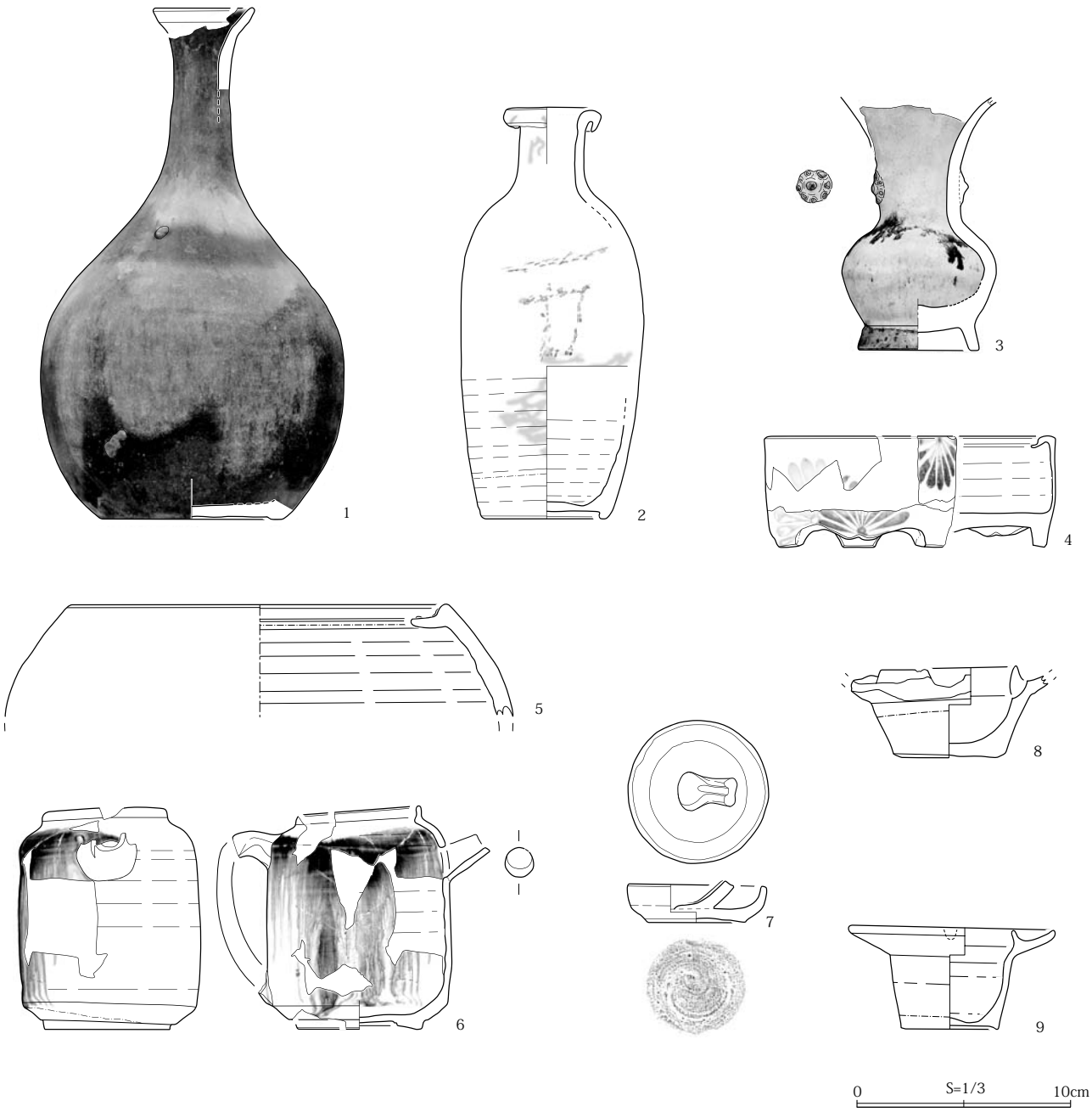
図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量（cm）			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	135-3	N1-W6	陶器	擂鉢	口縁～体部	やや密	(35.6)	(29.2)	(4.0)	岸窯	17 世紀中葉～後葉	鉄釉　ヘラケズリ	I-235
2	135-4	N1・N2-W6	陶器	猪口	口縁～高台	密	7.6	3.5	5.85	大堀相馬	18 世紀後葉	灰釉	I-236
3	135-7	N1-W6	陶器	壺	体部～高台	やや密	-	(7.1)	(11.5)	大堀相馬	19 世紀前半	鉄絵草花文　灰釉	I-237
4	135-6	N2-W6	陶器	壺	体部～高台	やや密	(15.56)	(9.7)	(8.2)	唐津	17 世紀中葉	灰釉　刷毛目　下半部は無釉 内面：ロクロナデ　回転糸切痕 ロクロ右回転	I-238
5	135-5	N2-W4	陶器	甕	口縁～底部	やや密	(6.3)	3.7	6.2	大堀相馬	19 世紀前葉～中葉	鉄釉　沈線文　底面に籾圧痕	I-239
6	135-8	N1-W6	陶器	香炉	口縁～高台	やや密	(7.55)	3.95	5.65	大堀相馬	18 世紀中葉～後葉	灰釉　貫入　内面：口縁部のみ灰釉 他無釉	I-240
7	135-9	N1-W5	陶器	徳利	体部	やや密	-	-	(6.7)	不明	近代	イッチン	I-241
8	136-1	N1-W6	陶器	土瓶	口縁～底部	やや密	6.8	7.0	10.4	大堀相馬	18 世紀末葉～19 世紀初頭	白濁釉　貫入　注ぎ口欠損	I-242
9	136-2	N1-W5	陶器	土瓶	口縁～体部	やや密	8.46	-	(13.9)	大堀相馬	19 世紀中葉以降	緑釉　内面：無釉	I-243

第 234 図　Ⅲ層出土遺物（7）



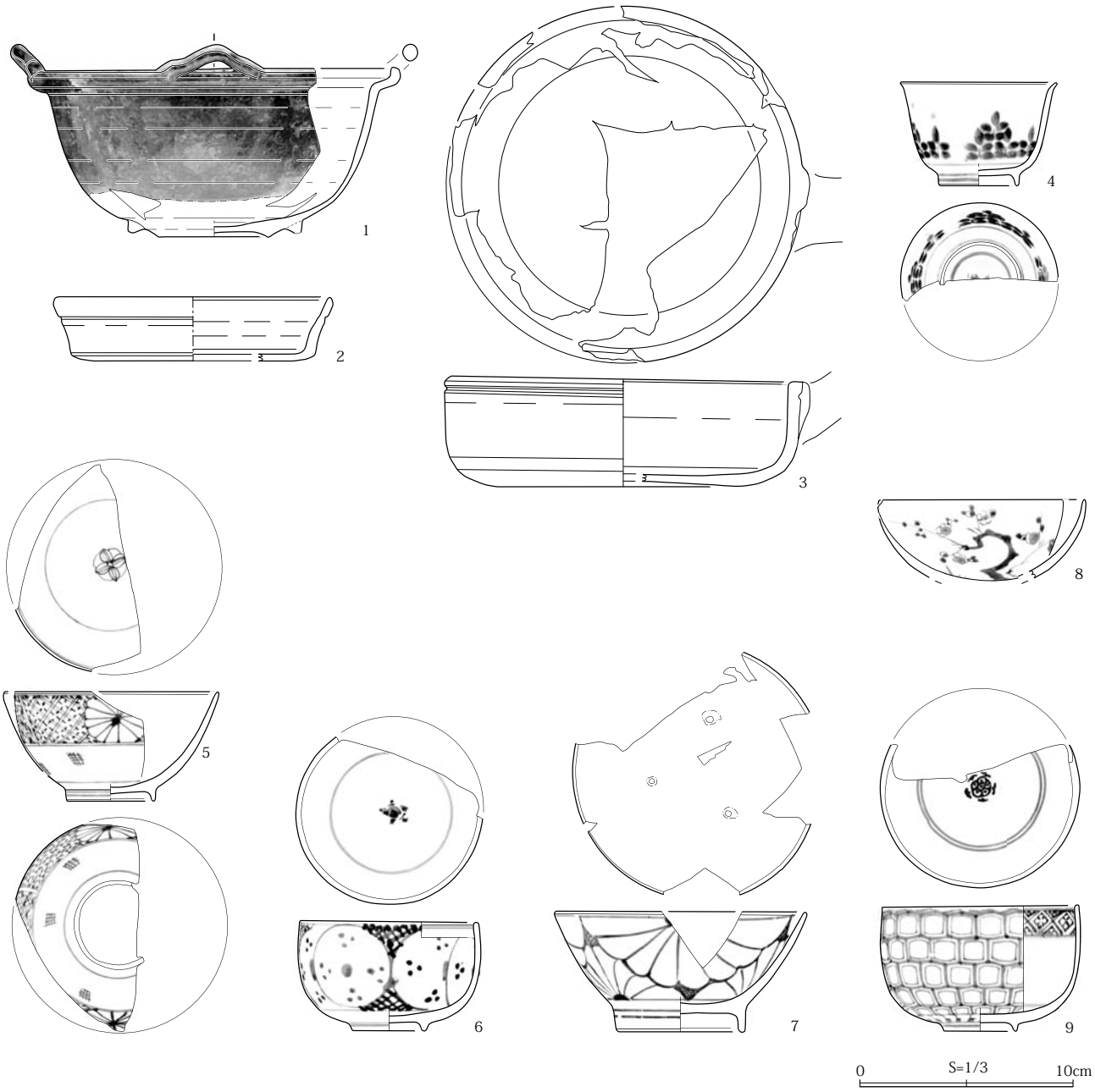
図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量（cm）			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	136-3	N1-W6	陶器	土瓶	口縁～体部	粗	(9.3)	-	(11.1)	堤	19 世紀代	灰釉　シノギ成形　内面：鉄釉 最大径 21.5cm	I-244
2	136-4	N1-W6	陶器	土瓶蓋	摘み～口縁	密	7.65	5.4	2.7	大堀相馬	18 世紀末葉～19 世紀中葉	白濁釉　貫入　内面：無釉 つまみ菊花	I-245
3	136-5	S1-W7	陶器	土瓶蓋	口縁～底部	密	5.65	7.5	3	大堀相馬	18 世紀後半～19 世紀初頭	白濁釉　内面：無釉 つまみ部に貝貫入	I-246
4	136-6	N1-W5	陶器	土瓶蓋	摘み～口縁	やや密	8.2	5.2	2.8	大堀相馬	18 世紀後半～19 世紀前葉	灰釉	I-247
5	136-7	N1-W6	陶器	土瓶蓋	摘み～口縁	やや密	6.35	4.9	1.8	大堀相馬	18 世紀末～ 19 世紀中葉	白濁釉　内面：緑釉	I-248
6	136-8	N1-W6	陶器	土瓶蓋	摘み～口縁	密	8.0	6.0	2.65	大堀相馬	18 世紀後葉～19 世紀前半	白濁釉　貫入　内面：無釉	I-249
7	136-9	N2-W5	陶器	土瓶蓋	摘み～口縁	やや密	7.5	5.2	1.9	大堀相馬	19 世紀前半	白濁釉　緑釉　内面：無釉	I-250
8	136-10	N1-W6	陶器	土瓶蓋	摘み～口縁	やや粗	5.1	-	2.05	大堀相馬	19 世紀前半～中葉	飴釉　内面：無釉	I-251
9	137-1	N1-W6	陶器	蓋	摘み～口縁	やや粗	5.2	-	2.8	堤	19 世紀	灰釉　内面：無釉	I-252
10	137-3	N1-W6	陶器	花活け	体部～高台	やや密	-	6.0	(11.85)	肥前	17 世紀後半～18 世紀代	灰釉　底部回転糸切り痕	I-253

第 235 図　Ⅲ層出土遺物（8）



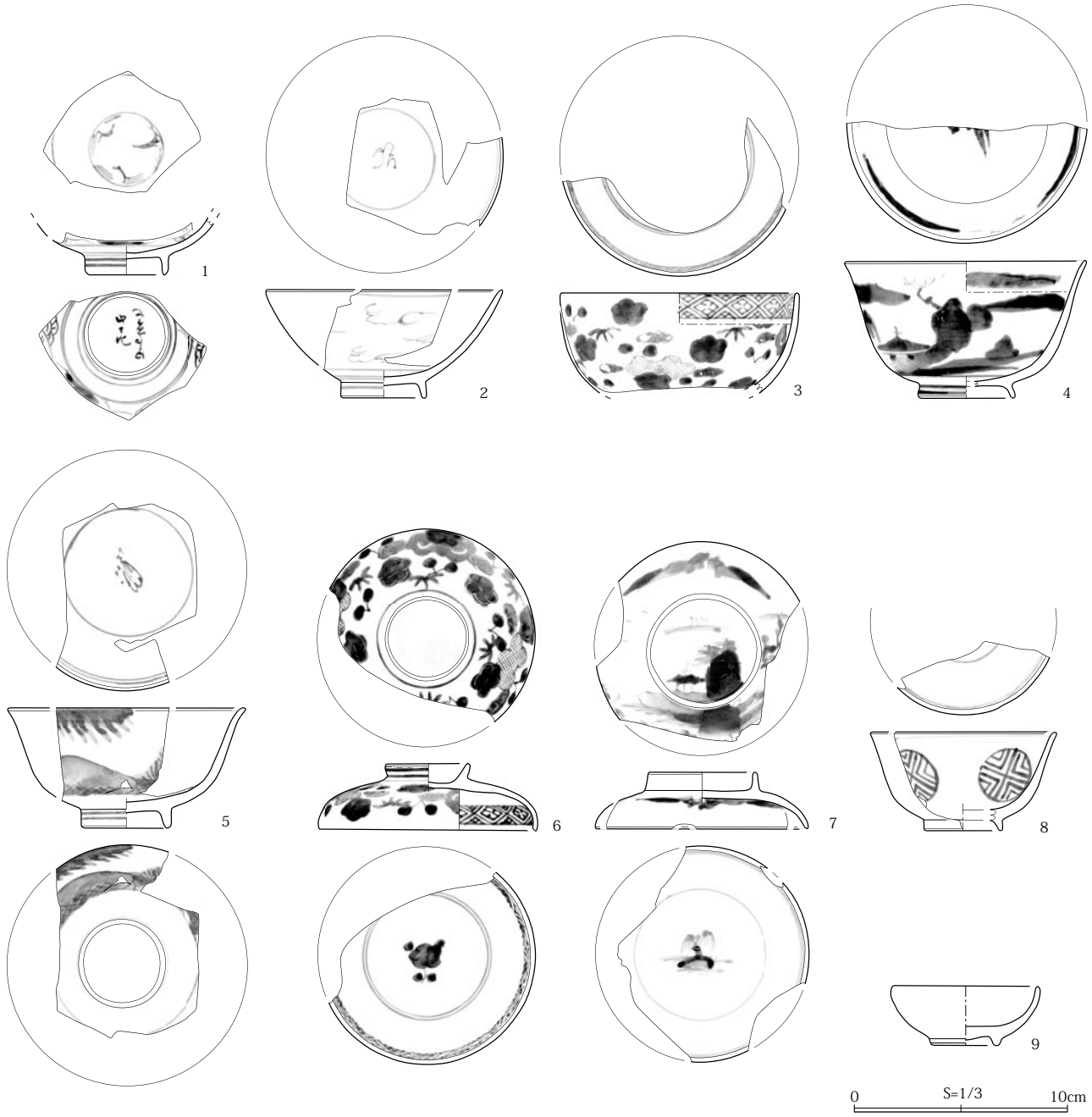
図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量（cm）			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	137-4	N1-W6	陶器	瓶	口縁～高台	粗	(4.7)	8.6	23.9	堤	19c 代	鉄釉後肩から胴部に灰釉 内面：鉄釉後灰釉	I-254
2	137-5	N1-W6	陶器	貧乏徳利	口縁～底部	やや密	4.55	6.1	19.25	瀬戸・美濃	18 世紀後葉～19 世紀前葉	灰釉 釘書「五」 内面：無釉	I-255
3	137-2	N1-W6	陶器	仏花器	体部～高台	粗	-	5.7	10.3	小野相馬	18 世紀代	灰釉	I-256
4	137-6	N2-W7	陶器	蓋もの	口縁～体部 体部～高台	やや密	(10.3)	(8.1)	(7.2)	京都	18 世後半	透明釉　上絵付け　菊花文	I-257
5	137-8	N1-W6	陶器	水指し	口縁～体部	やや粗	(17.8)	-	(5.2)	瀬戸・美濃	17 世紀初頭	志野釉　貫入	I-258
6	137-9	N1-W5	陶器	水注	口縁～高台	やや密	5.75	5.85	10.5	大堀相馬	19 世紀前半	白濁釉　飴釉掛け流し	I-259
7	137-7	N2-W6	陶器	灯明皿	口縁～底部	やや密	6.6	4.6	1.8	在地	近世	鉄釉 回転糸切痕	I-260
8	138-1	N2-W5	陶器	油受皿	口縁～底部	やや密	6.2	4.55	(4.3)	堤	19 世紀代	鉄釉	I-261
9	138-4	N1-W6	陶器	油受皿	口縁～高台	やや粗	(9.65)	4.25	4.65	大堀相馬	19 世紀前葉	鉄釉	I-262

第 236 図　Ⅲ層出土遺物（9）



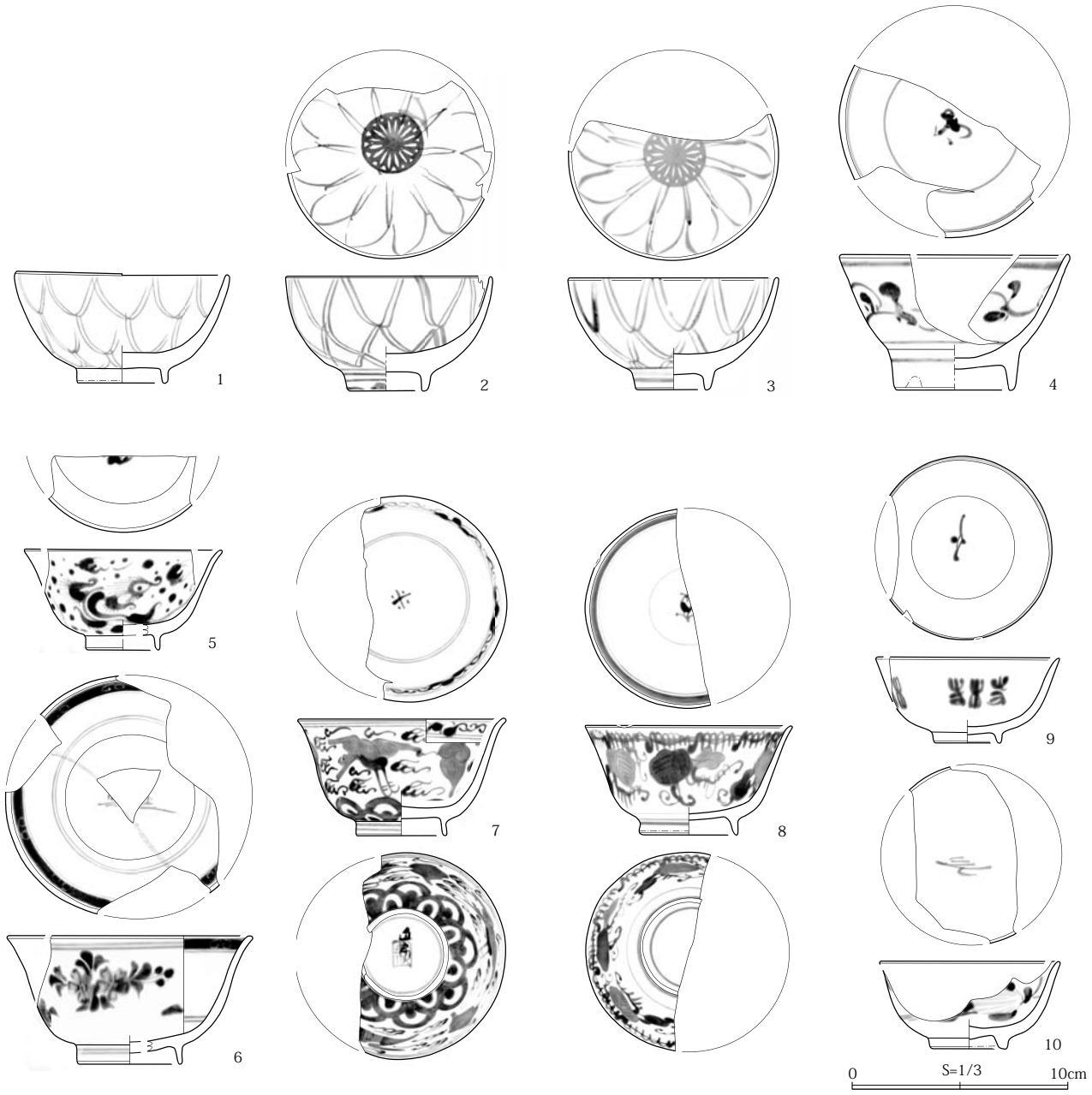
図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量（cm）			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	138-2	N2-W6	陶器	土鍋	口縁～底部	やや密	(17.5)	5.15	9.0	大堀相馬	19 世紀前葉～中葉	鉄釉 三足 ロクロ右回転	I-263
2	138-3	N2-W7	軟質施釉陶器	焙烙	口縁～底部	やや粗	(13.2)	(11.5)	3.0	堤	19 世紀代	透明釉	I-264
3	138-5	N1-W6	軟質施釉陶器	焙烙	口縁～底部	やや粗	16.8	10.8	5.2	堤	19 世紀	透明釉　ロクロナデ ロクロ右回転	I-265
4	138-6	N1-W6	磁器	碗	口縁～高台	密	(7.38)	3.75	4.89	肥前	17 世紀後半	染付草文　高台内に銘「□□年製」	J-140
5	138-7	N1-W6	磁器	碗	口縁～高台	密	(10.1)	4.15	5.15	肥前	18 世紀後半	染付四方襷に菊花文 格子文 内面：見込みに花文	J-141
6	138-8	N1-W5	磁器	碗	口縁～高台	密	8.4	3.4	5.15	肥前	18 世紀後半	染付斜め格子文 鼓文 焼継ぎ痕あり 内面：圏線 五弁花	J-142
7	138-9	N2-W6	磁器	広東碗	口縁～高台	密	11.85	6.0	5.65	肥前	18 世紀後葉～19 世紀前葉	染付菊花文　焼継ぎ痕	J-143
8	138-10	N2-W7	磁器	碗	口縁～体部	密	9.8	-	(3.7)	肥前	18 世紀中葉	染付梅樹文	J-144
9	138-11	N1-W6	磁器	碗	口縁～高台	密	9.25	3.4	5.9	肥前	18 世紀中葉～後葉	染付亀甲文 二重圏線 内面：四方襷　見込みに五弁花	J-145

第 237 図　Ⅲ層出土遺物（10）



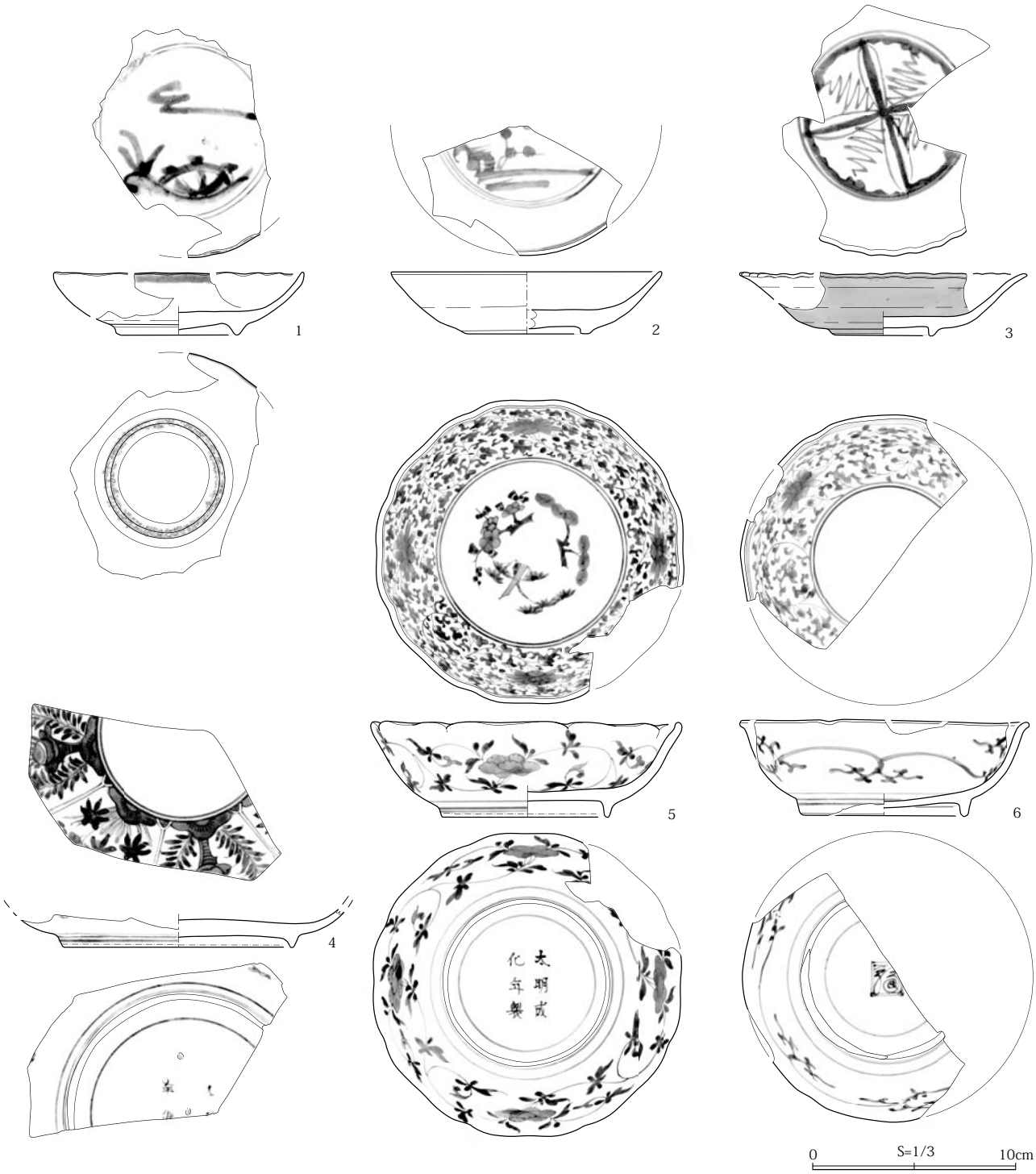
図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量（cm）			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	139-1	N1-W7	磁器	碗	体部～高台	密	-	3.55	2.7	肥前	18 世紀末～19 世紀前半	染付松竹梅文　焼継ぎ痕 高台内に文字「四百六十七　　ロ十四」	J-146
2	139-2	N1-W6	磁器	碗	口縁～高台	密	11.06	3.94	5.1	肥前	18 世紀末葉～19 世紀前葉	染付雲竜文　圏線　内面：圏線	J-147
3	139-3	N1-W5	磁器	碗	口縁～体部	密	(11.2)	-	(4.7)	肥前	18 世後半～19 世紀初頭	染付色絵草花文　松竹梅文 内面：四方襷　二重圏線	J-148
4	139-4	N2-W6	磁器	端反碗	口縁～高台	密	11.25	(4.6)	6.84	肥前	19 世紀前葉～中葉	染付山水文 圏線　二重圏線　内面：文様有	J-149
5	139-5	N1-W6	磁器	端反碗	口縁～高台	密	(11.15)	4.15	5.68	肥前	19 世紀前葉～中葉	染付風景文　内面：圏線	J-150
6	139-6	N2-W6	磁器	蓋	口縁～高台	密	10.15	3.98	3.15	肥前	18 世後半～19 世紀初頭	上絵染付（金襴・緑釉・赤絵）松竹梅文 内面：四方襷　梅文	J-151
7	139-7	N1-W6	磁器	蓋	口縁～高台	密	10.1	-	2.68	肥前	18 世紀末葉～19 世紀前葉	染付山水文　内面：岩に柳文　二重圏線	J-152
8	139-8	N2-W4	磁器	端反碗	口縁～高台	密	(8.7)	(3.6)	4.65	肥前	19 世紀代	染付丸文　圏線	J-153
9	139-9	N1-W5	磁器	碗	口縁～高台	密	(6.9)	3.3	2.8	波佐見	17 世紀前半	透明釉	J-154

第 238 図　Ⅲ層出土遺物（11）



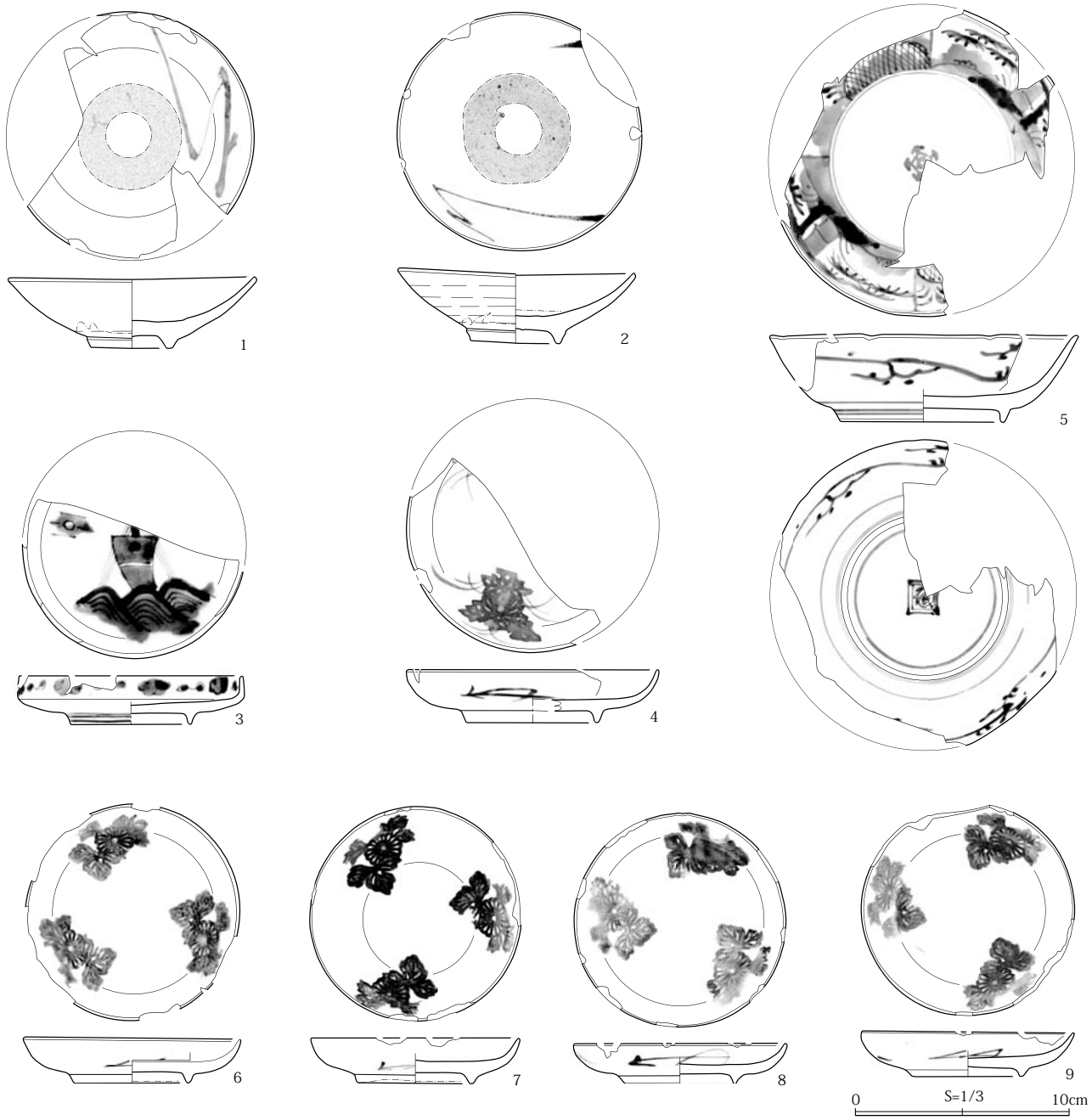
図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量（cm）			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	139-10	N2-W7	磁器	碗	口縁～高台	密	9.85	4.1	5.15	波佐見	18 世紀前葉～中葉	染付二重網目文	J-155
2	140-1	N1-W6	磁器	碗	口縁～高台	密	9.5	3.65	5.3	波佐見	18 世紀前葉～後葉	二重網目文 内面：網目文 見込みに菊花文（コンニャク印判）	J-156
3	140-2	N1-W6	磁器	碗	口縁～高台	密	9.8	3.55	5.2	波佐見	18 世紀中葉～後葉	二重網目文 内面：網目文 見込みに菊花文（コンニャク印判）	J-157
4	140-3	N2-W7c	磁器	広東碗	口縁～高台	密	（10.7）	（5.55）	6.3	瀬戸・美濃	18 世紀末～19 世紀前葉	染付草花文 内面：文様有	J-158
5	140-4	N1-W6	磁器	端反碗	口縁～高台	密	（9.2）	（3.4）	4.68	瀬戸・美濃	19 世紀前葉	染付龍文 内面：文様有	J-159
6	140-5	N1-W6	磁器	端反碗	口縁～高台	密	11.45	4.90	5.98	瀬戸・美濃	19 世紀	染付草花文 内面：文様有 焼継ぎ痕	J-160
7	140-6	N1-W6	磁器	端反碗	口縁～高台	密	9.65	4.25	5.95	瀬戸・美濃	19 世紀	染付連弁文・鷺文 内面：文様有 焼継ぎ痕　高台内に朱墨書「近衛？」	J-161
8	140-7	N1-W5	磁器	端反碗	口縁～高台	密	（9.6）	（4.4）	5.1	瀬戸・美濃	19 世紀前半	染付草花文（瓢箪）内面：圏線	J-162
9	140-9	N1-W5	磁器	端反碗	口縁～高台	やや密	8.5	3.0	4.0	瀬戸・美濃	19 世紀前葉～中葉	染付源氏香文 内面：見込みに文様あり　口錆	J-163
10	140-8	N1-W5	磁器	端反碗	口縁～高台	密	8.35	3.6	4.1	瀬戸・美濃	19 世紀代	染付 内面：見込みに寿	J-164

第 239 図　Ⅲ層出土遺物（12）



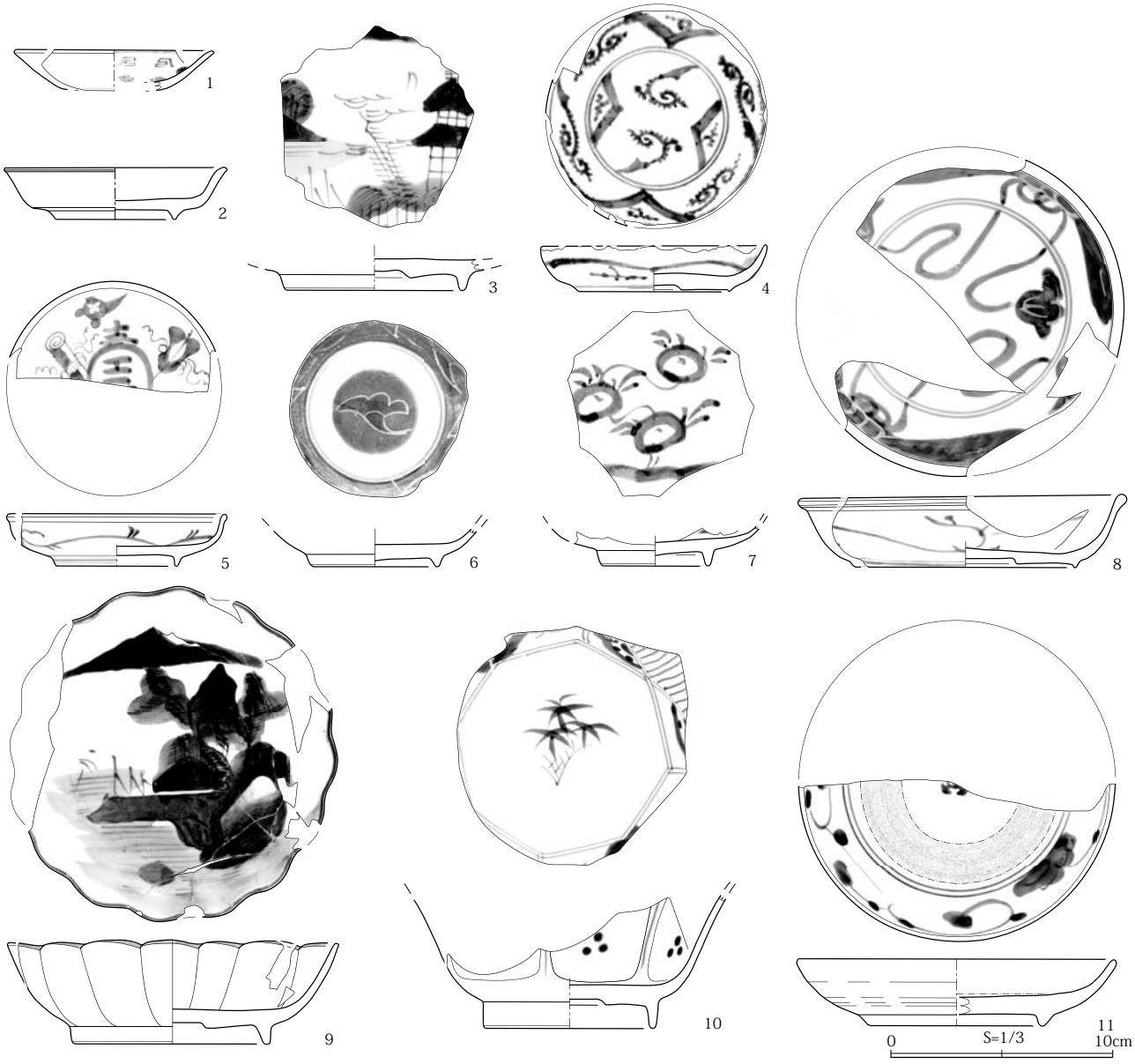
図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量（cm）			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	141-1	N1-W6	磁器	輪花皿	口縁～高台	やや密	-	5.95	2.9	肥前	17 世紀中葉～後葉	染付　口錆 高台に離れ砂付着	J-165
2	141-2	N1-W6	磁器	皿	口縁～高台	密	(13.3)	(6.2)	3.0	肥前	17 世紀前葉	染付 高台に離れ砂付着	J-166
3	141-3	N1-W7	磁器	輪花皿	口縁～高台	密	(14.2)	5.0	3.06	肥前	17 世紀中葉～後葉	内面：染付四方割銀杏文	J-167
4	141-4	N1-W6	磁器	皿	体部～高台	粗	-	(11.3)	(1.85)	肥前	17 世紀末～18 世紀	染付唐草文 二重圏線 高台内に銘「大明年製」　内面：窓に岩・草・花・宝珠文	J-168
5	141-5	N1-W6	磁器	輪花皿	口縁～高台	密	15.2	8.1	4.7	肥前	17 世紀末～18 世紀前葉	染付牡丹唐草文　高台内「太明成化年製」 内面：見込み松竹梅文	J-169
6	141-6	N1-W6	磁器	皿	口縁～高台	密	(14.3)	8.3	4.65	肥前	17 世紀末葉～18 世紀前半	染付牡丹唐草文 二重圏線 内面：唐草文 圏線 高台内に銘「角渦福」	J-170

第 240 図　Ⅲ層出土遺物（13）



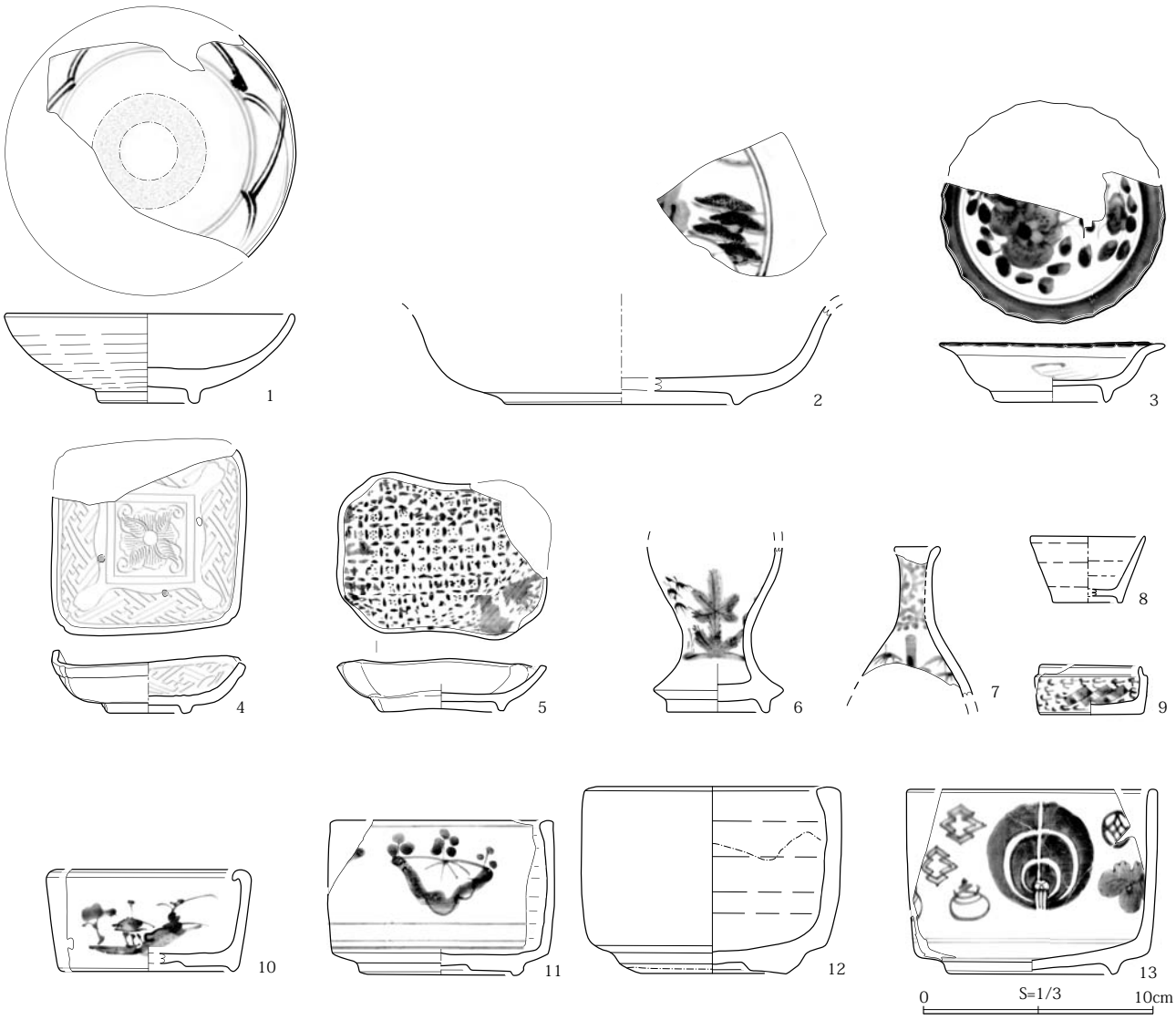
図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量（cm）			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	142-1	N1-W7	磁器	皿	口縁～高台	密	11.65	3.8	3.35	肥前	17 世紀後葉～18 世紀中葉	透明釉　ヘラケズリ 蛇の目釉剥ぎ	J-171
2	142-2	N1-W6	磁器	皿	口縁～高台	密	11.1	4.05	3.3	肥前	17 世紀末葉～18 世紀中葉	染付　内面：文様有	J-172
3	142-3	N2-W6	磁器	皿	口縁～高台	密	(10.41)	5,65	2.25	肥前	18 世紀代	染付　内面：波・帆掛け・月文	J-173
4	142-4	N1-W5	磁器	皿	口縁～高台	やや密	(11.8)	(6.1)	2.5	肥前	18 世紀前葉	染付松葉文　内面：コンニャク印判菊花文	J-174
5	142-5	N2-W4	磁器	輪花皿	口縁～高台	密	14.5	7.75	4.08	肥前	18 世紀前葉～中葉	染付唐草文　コンニャク印判五弁花 内面：松竹篭文見込みに五弁花	J-175
6	142-6	N1-W6	磁器	皿	口縁～高台	密	10.2	5.4	2.15	肥前	18 世紀前半	染付折れ松葉文　内面：コンニャク印判菊花文　口縁に敲打痕？	J-176
7	142-7	N1-W6	磁器	皿	口縁～高台	密	9.8	5.4	2.1	肥前	18 世紀前半	染付折れ松葉文　内面：コンニャク印判菊花文	J-177
8	142-8	N1-W6	磁器	皿	口縁～高台	密	10.0	5.3	2.9	肥前	18 世紀前半	染付松葉文　内面：菊花文　コンニャク印判　口縁に敲打痕？	J-178
9	142-9	N1-W6	磁器	皿	口縁～高台	密	10.0	5.3	2.15	肥前	18 世紀前葉～後葉	染付折れ松葉文　内面：菊花文 コンニャク印判の菊花文	J-179

第 241 図　Ⅲ層出土遺物（14）



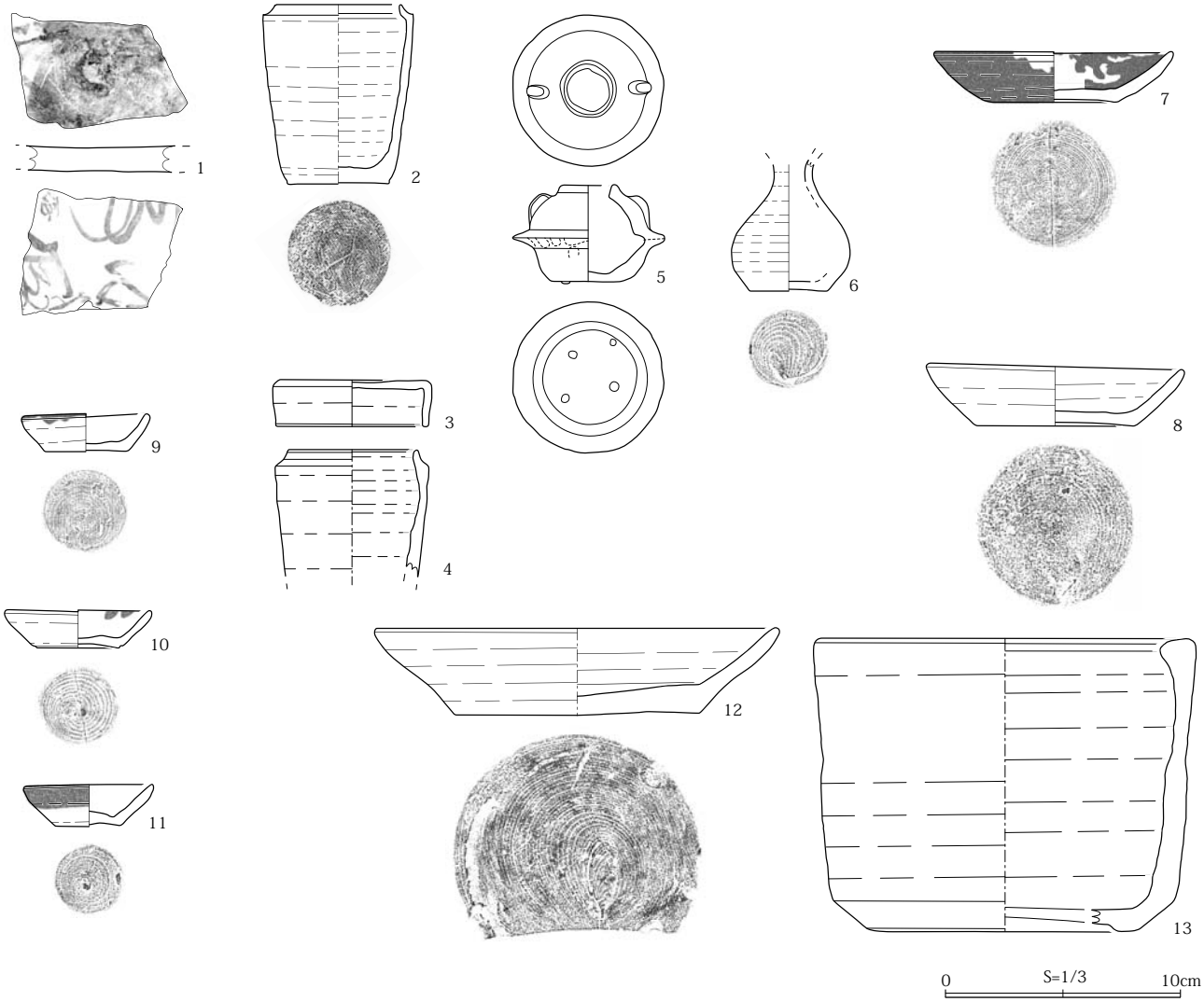
図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量（cm）			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	143-1	N1-W8	磁器	皿	口縁～体部	密	9.0	-	1.8	肥前	18 世紀末葉～19 世紀代	染付 圏線　文字風	J-180
2	143-2	N1-W5	磁器	皿	口縁～高台	密	(10.1)	5.5	2.32	肥前	18 世紀～19 世紀前葉	青磁	J-181
3	143-3	N1-W6	磁器	皿	体部～高台	やや密	-	7.8	1.93	肥前	18 世紀後葉～19 世紀前葉	内面：染付山水楼閣文 蛇の目凹型高台	J-182
4	143-4	N2-W6	磁器	皿	口縁～高台	密	(10.2)	6.4	2.05	肥前	18 世紀後半～19 世紀前半	染付唐草文　内面：蛸唐草文 蛇の目凹型高台　口縁に敲打痕？	J-183
5	143-5	N1-W6	磁器	皿	口縁～高台	密	(9.9)	(5.5)	2.35	肥前	18 世紀後半～19 世紀前葉	唐草文　内面：染付吉祥文	J-184
6	143-6	N2-W5	磁器	皿	体部～高台	密	-	5.8	-	肥前	19 世紀前半	内面：染付銀杏文　二重圏線 焼継ぎ痕	J-185
7	143-7	N1-W6	磁器	皿	体部～高台	やや密	-	4.86	(1.8)	肥前	19 世紀前葉	内面：染付草花文	J-186
8	143-8	N1・N2-W6	磁器	皿	口縁～高台	やや密	14.8	10.05	3.3	肥前	19 世紀前半	染付唐草文　二重圏線　内面：蔓草文 蛇の目凹形高台　玉縁	J-187
9	143-9	N2-W6	磁器	輪花皿	口縁～高台	密	15.2	8.9	4.55	肥前	19 世紀前葉～中葉	透明釉　貫入　口錆 内面：染付山水楼閣文 蛇ノ目凹形高台	J-188
10	144-1	N2-W4	磁器	八角鉢	体部～高台	密	-	(7.8)	6.0	肥前	18 世紀末葉～19 世紀前葉	染付　内面：染付笹文 蛇の目凹形高台　焼継ぎ痕あり	J-189
11	144-2	N1-W5	磁器	皿	口縁～高台	やや密	(14.4)	(7.7)	3.0	波佐見	18 世紀後葉	透明釉　内面：染付蔓草文 見込みに五弁花　蛇の目釉剥ぎ	J-190

第 242 図　Ⅲ層出土遺物（15）



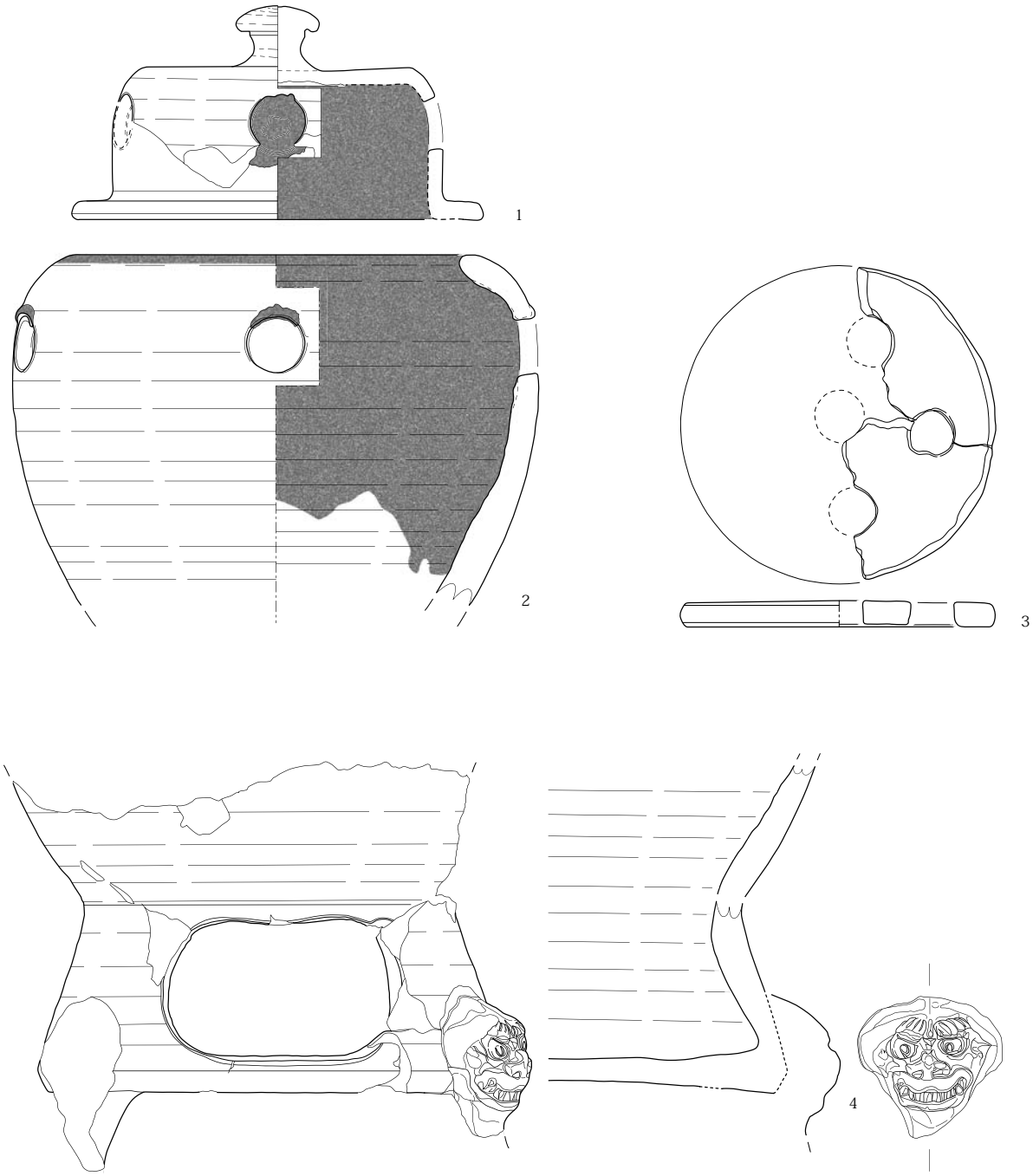
図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量（cm）			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	144-6	N1-W6	陶器	皿	口縁～高台	やや密	(12.7)	4.4	3.94	波佐見	18 世紀後葉	染付格子文 蛇ノ目釉剥ぎ	J-191
2	144-7	N1-W6	磁器	皿	体部～口縁	密	(18.3)	(10.4)	(4.27)	波佐見	18 世紀前葉	青磁釉 内面：染付山水文	J-192
3	144-3	N1-W5	磁器	輪花皿	口縁～高台	密	9.8	4.65	2.6	瀬戸・美濃	19 世紀	染付　内面：染付草花文	J-193
4	144-4	N1-W7	磁器	皿	口縁～高台	密	8.5	3.7	2.6	瀬戸・美濃	19 世紀代	白磁　内面：印刻 形がたわむ	J-194
5	144-5	N1-W4	磁器	変形手塩皿	口縁～高台	密	9.19	5.49	5.49	瀬戸・美濃	19 世紀中葉以降	染付 形押し	J-195
6	144-8	N1-W6	磁器	御神酒徳利	体部～高台	密	-	4.47	(7.25)	肥前	18 世紀末～19 世紀前半	染付松竹梅文 内面：無釉 捻り成形痕あり	J-196
7	144-9	S1-W7	磁器	徳利	口縁～体部	密	1.9	-	(6.6)	肥前	18 世紀末～19 世紀前半	染付蛸唐草文竹文　透明釉 内面：無釉　ロクロ右回転	J-197
8	144-10	N2-W5	磁器	猪口	口縁～高台	やや粗	(5.0)	(3.1)	2.9	肥前	18 世紀末葉～19 世紀初頭	透明釉	J-198
9	144-11	N1-W6	磁器	合子（身）	口縁～底部	密	4.55	4.55	2.2	肥前	17 世紀～18 世紀	染付飛雲文　短冊文　羽文 内面透明釉	J-199
10	145-1	N2-W5	磁器	香炉	口縁～高台	やや密	8.9	7.6	4.45	肥前	18 世紀後半	青磁釉　山水楼閣文 蛇の目凹形高台 高台に砂付着	J-200
11	145-2	N1-W6	磁器	香炉	口縁～高台	密	9.7	7.1	6.75	肥前	18 世紀後半	染付 内面：無釉 焼継ぎ痕あり　蛇の目凹型高台	J-201
12	145-4	N1・N2-W6	磁器	香炉	口縁～高台	密	11.1	6.5	8.2	波佐見	17 世紀末～18 世紀前半	青磁釉 内面：上半に青磁釉 下半は無釉　蛇の目凹型高台	J-202
13	145-3	S1-W5	磁器	火入れ	口縁～高台	密	(10.8)	7.30	8.1	肥前	18 世紀後半	染付かしわ・吉祥・宝玉文 蛇の目凹形高台 内面：見込みに蛇の目釉剥ぎ	J-203

第 243 図　Ⅲ層出土遺物（16）



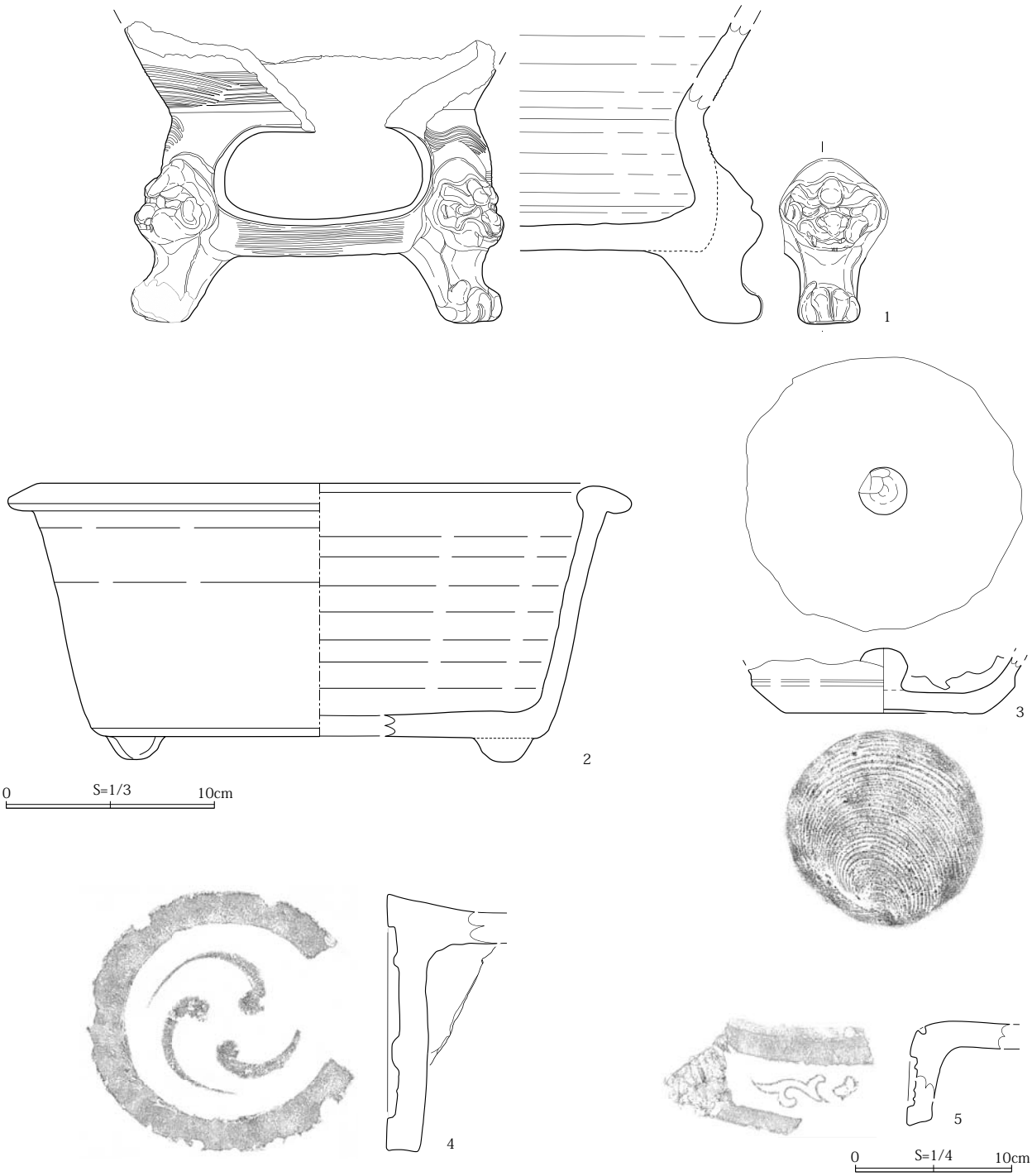
図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量（cm）			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	145-6	N1-W6	土師質土器	皿	底部	やや粗	-	-	1.2	在地	近世	墨書 ヨコナデ 内面・底面に墨書「義段事勝」	I-266
2	145-5	N1-W6	土師質土器	焼塩壺	口縁～底部	粗	(5.9)	4.35	7.6	関西	18 世紀後葉	ロクロナデ	I-267
3	145-8	N2-W6	土師質土器	焼塩壺蓋	頂部～口縁	やや粗	(6.5)	-	2.0	関西	近世	ロクロナデ　ヨコナデ	I-268
4	145-9	N2-W6	土師質土器	焼塩壺身	口縁～体部	やや粗	(5.7)	-	5.4	関西	近世	ロクロナデ 最大径 6.55cm	I-269
5	145-10	N1-W6	土師質土器	釜ミニチュア	口縁～底部	粗	2.1	3.3	4.1	在地	近世	指頭痕 スス付着 三足 最大径 6.8cm	I-270
6	145-7	N1-W6	土師質土器	壺	頸部～底部	やや粗	-	(3.3)	(5.6)	在地	近世	ロクロナデ 底部回転糸切り痕 最大径 5.05cm	I-271
7	145-14	N1-W6	土師質土器	灯明皿	口縁～底部	粗	10.1	5.4	2.15	在地	近世	ロクロ成形後ヨコナデ油煙付着	I-272
8	145-15	N1-W6	土師質土器	灯明皿	口縁～底部	やや粗	11.0	6.66	2.67	在地	近世	ロクロナデ 底部に回転糸切り痕 ロクロ左回転	I-273
9	145-11	N2-W6	土師質土器	灯明皿	口縁～底部	粗	5.55	3.46	1.6	在地	近世	油煙 内面：ヨコナデ	I-274
10	145-12	N1-W5	土師質土器	灯明皿	口縁～底部	やや粗	6.3	3.5	1.6	在地	近世	ヨコナデ　油煙	I-275
11	145-13	N1-W6	土師質土器	灯明皿	口縁～底部	やや粗	5.5	2.8	1.8	在地	近世	油煙 ロクロ成形後ヨコナデ	I-276
12	145-16	N1-W6	土師質土器	灯明皿	口縁～底部	やや粗	(17.3)	10.6	3.7	在地	近世	ロクロナデ	I-277
13	146-3	N1-W6	土師質土器	火入れ	口縁～底部	やや粗	(16.2)	(11.35)	12.5	在地	近世	ロクロナデ 口縁に打痕あり	I-278

第 244 図　Ⅲ層出土遺物（17）



図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量（cm）			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	146-2	N2-W6	瓦質土器	蚊遣り蓋	摘み～口縁	やや粗	（18.8）	12.4	9.78	在地	18 世紀末葉～19 世紀中葉	ロクロナデ ロクロ左回転 内面：炭化物付着 煙り出し孔推定 6 ヶ（残存 3 箇所）	I-279
2	146-3	N2-W6	瓦質土器	蚊遣り上部	口縁～体部	やや粗	（18.4）	（17.8）	（16.1）	在地	18 世紀末葉～19 世紀中葉	ロクロナデ 口縁部スス付着 内面：スス付着	I-280
3	146-4	N2-W6	瓦質土器	蚊遣りサナ		やや粗	（14.3）	（14.3）	（1.2）	在地	18 世紀末葉～19 世紀中葉	孔数推定 6 ヶ	I-281
4	146-5	N2-W6	瓦質土器	蚊遣り下部	体部～脚部	やや粗	-	20.6	（19.1）	在地	18 世紀末葉～19 世紀中葉	ロクロナデ ロクロ右回転 獣脚 3 ヶ（残存 1 ヶ）回転糸切痕	I-282

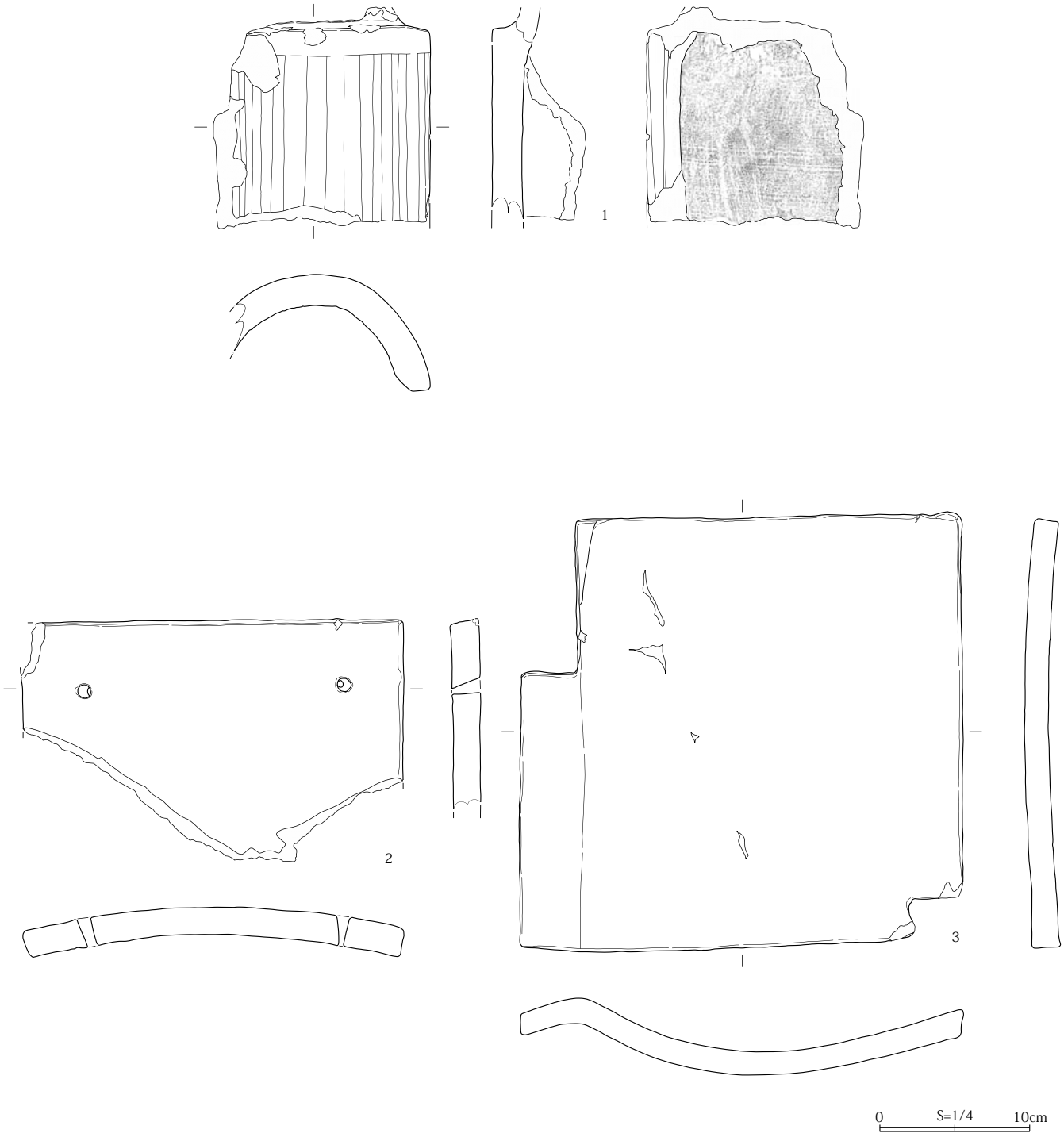
第 245 図　Ⅲ層出土遺物（18）



図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量（cm） 口径	底径	器高	産地	時期	備考	登録番号
1	147-1	N2-W6	瓦質土器	蚊遣り	体部～脚部	粗	-	14.7	（14.6）	在地	18 世紀末～19 世紀前葉	獣脚 ロクロナデ 櫛描波状文・直線文　型押し成形	I-283
2	147-2	N2-W6	瓦質土器	火鉢	口縁～脚部	粗	（30.）	（22.1）	12.38	在地	近世	ミガキ 底部ロクロナデ 内面：ロクロナデ　火鉢 A 類	I-284
3	147-3	N2-W6	瓦質土器	火鉢蓋	摘み～底部（口縁欠損）	粗	-	9.5	3.1	在地	近世	黒色 回転糸切り痕	I-285

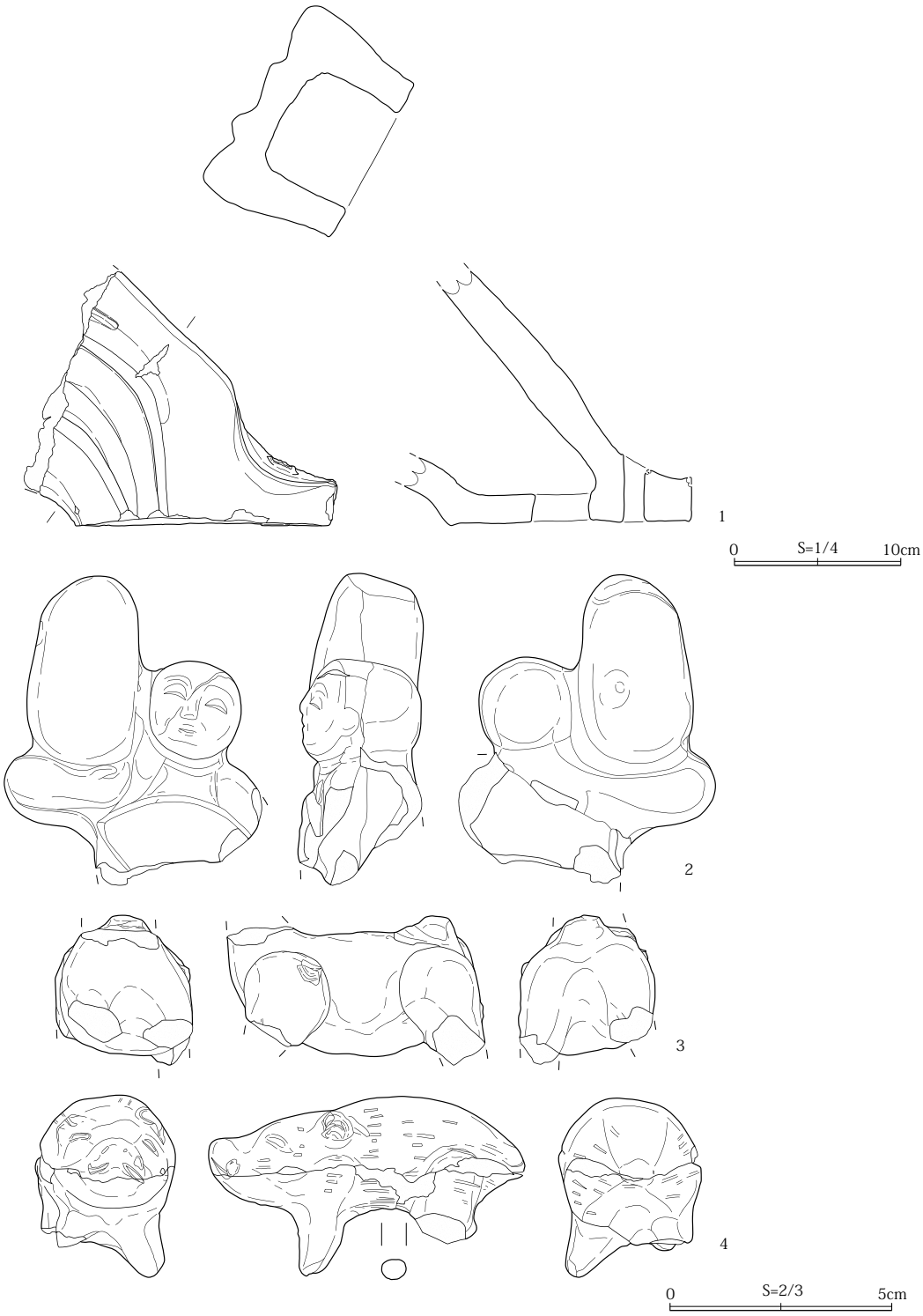
図版番号	写真図版番号	グリッド	種類	法量（cm） 長さ	幅	厚さ	備考	登録番号
4	147-4	N1-W6	軒丸瓦	7.0	16.6	16.4	文様区径：（12.6）cm　瓦当径：（17.0）cm　瓦当厚：2.35cm　周縁高：0.45cm　周縁幅：2.2cm　最大長：（7.7）cm　文様：三巴文（左巻）	F-5
5	147-5	N1-W6	軒平瓦	（14.6）	（14.2）	7.8	瓦当高：6.65cm　文様区高：3.2cm　瓦当厚：1.6cm　周縁幅：1.2cm　瓦当幅：（13.2）cm　文様区幅残存値（9.6）cm　弧深：（0.75）cm　内面：ヨコナデ　外面：型押しヨコネデ雲母粉付着　文様：飛雲文	G-6

第 246 図　Ⅲ層出土遺物（19）



図版番号	写真図版番号	グリッド	種類	法量（cm）			備考	登録番号
				長さ	幅	厚さ		
1	148-1	N1-W6	丸瓦	6.4	13.2	6.6	外面：ヘラケズリ、ヨコナデ　内面：コビキＢ　布目圧痕　ヘラ切り後ヨコナデ　ヨコナデ	F-6
2	148-2	N2-W6	平瓦	（15.9）	25.4	1.9	内、外面ともにヨコナデ　穴２つ残存	G-7
3	148-4	S1-W5	桟瓦（陶製）	29.4	29.65	1.8	きき足：18.45cm　尻切込長：10.05cm　きき幅：26.36cm　頭切込幅 3.28cm 頭切込幅：3.28cm　頭切込長：2.8cm　尻切込幅：3.8cm 表面：鉄釉　裏面：鉄釉（一部無釉）ヨコナデ	H-5

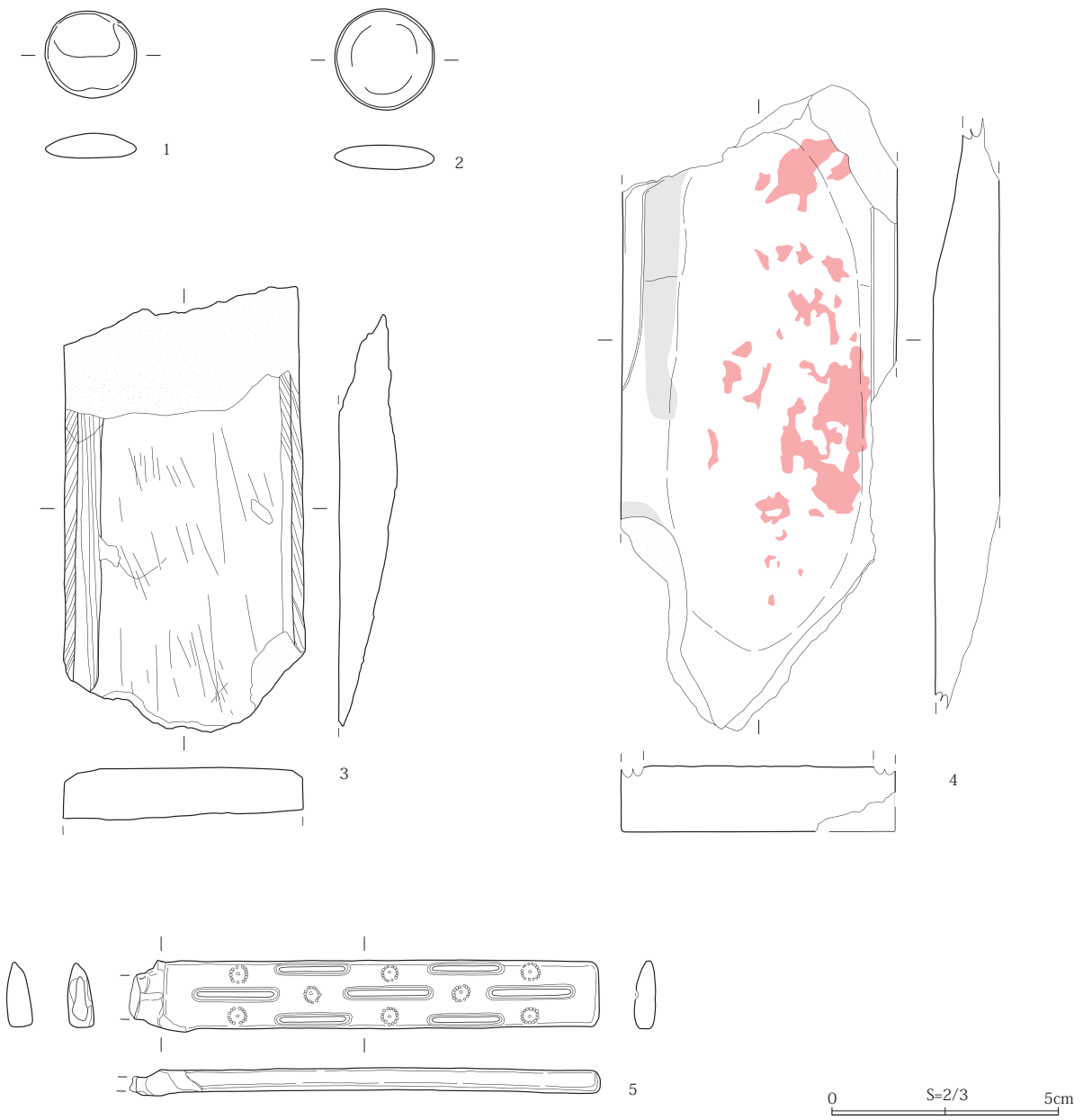
第 247 図　Ⅲ層出土遺物（20）



図版番号	写真図版番号	グリッド	種類	法量（cm）			備考	登録番号
				長さ	幅	厚さ		
1	148-3	N2-W6	鬼瓦	（18.8）	8.0	（15.0）	外面：ヨコナデ　ヘラ状工具による文様成形　内面：ナデ	H-6

図版番号	写真図版番号	グリッド	種類	法量（cm・g）				備考	登録番号
				長さ	幅	厚さ	重量		
2	148-5	N1-W5	土製品	7	5.5	2.7	34.8	土人形　型押し	P-7
3	148-6	N1-W5	土製品	5.8	3.15	3.4	44.5	土人形　犬　型押し　頸・脚欠損　騎乗している痕跡あり	P-8
4	149-1	N2-W6	土製品	7.05	3.15	4.1	39.8	土人形　猪　型押し	P-9

第 248 図　Ⅲ層出土遺物（21）

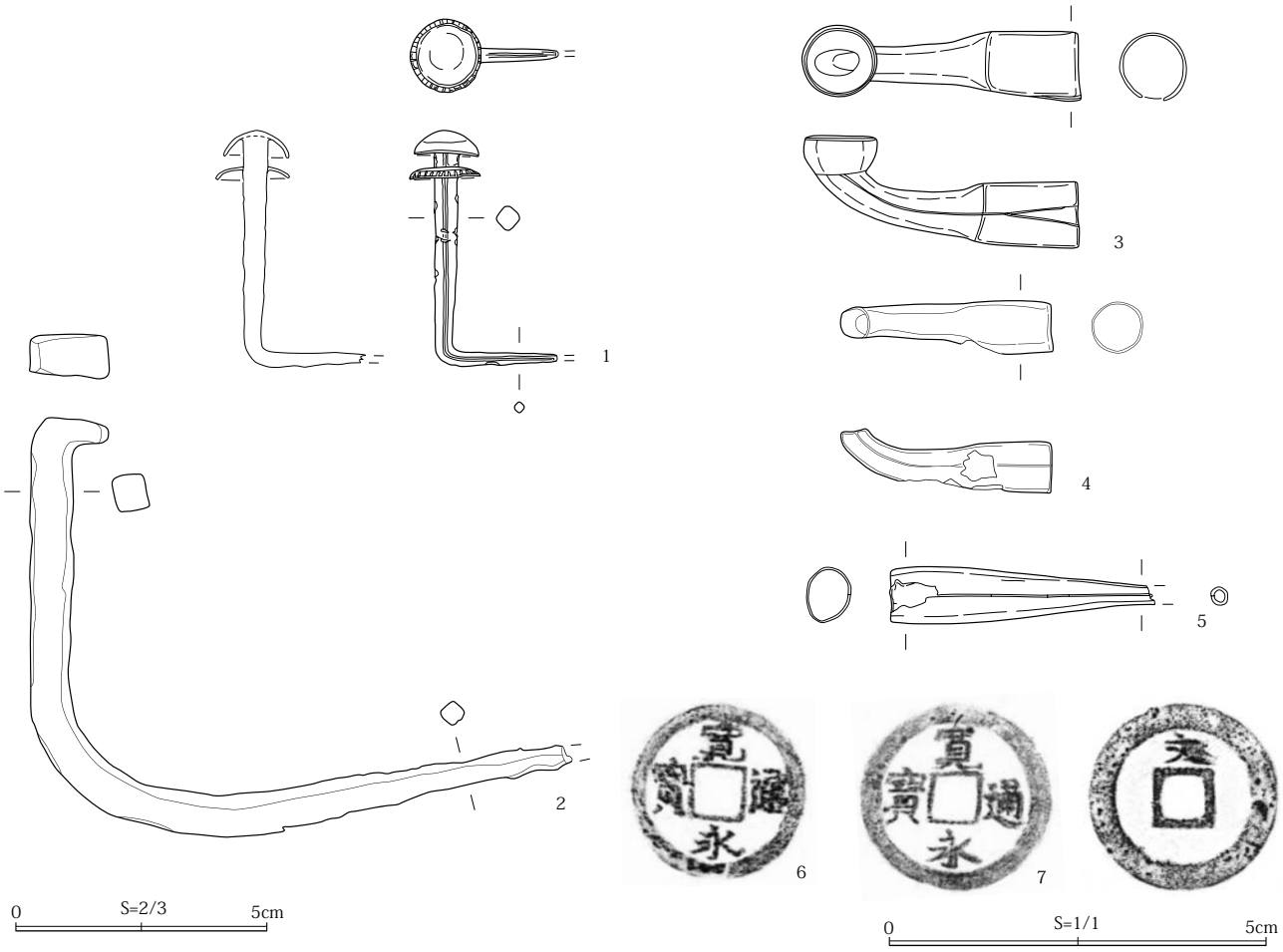


図版番号	写真図版番号	グリッド	種類	法量（cm・g）				備考	登録番号
				長さ	幅	厚さ	重量		
1	149-3	N1-W7 P3 1 層	土製品	2	1.9	0.58	2	碁石　横ナデ	P-10

図版番号	写真図版番号	グリッド	種類	法量（cm・g）				石材	備考	登録番号
				口径	底径	器高	重量			
2	149-4	N1-W8 P59 1 層	石製品	2.2	2.2	0.58	4.19	粘板岩	碁石	K-14
3	149-2	N1-W6	石製品	(9.8)	(5.3)	(1.3)	87.41	凝灰質頁岩	砥石	K-15
4	149-5	N1-W6	石製品	(14.28)	6.1	(1.49)	177.98	安山岩質凝灰岩	硯　一部に朱墨と黒墨付着	K-16

図版番号	写真図版番号	グリッド	種類	法量（cm・g）				備考	登録番号
				長さ	幅	厚さ	重量		
5	149-6	N1-W6	金属製品	10.4	1.5	0.55	29.54	刀子（柄）	N-54

第 249 図　Ⅲ層出土遺物（22）



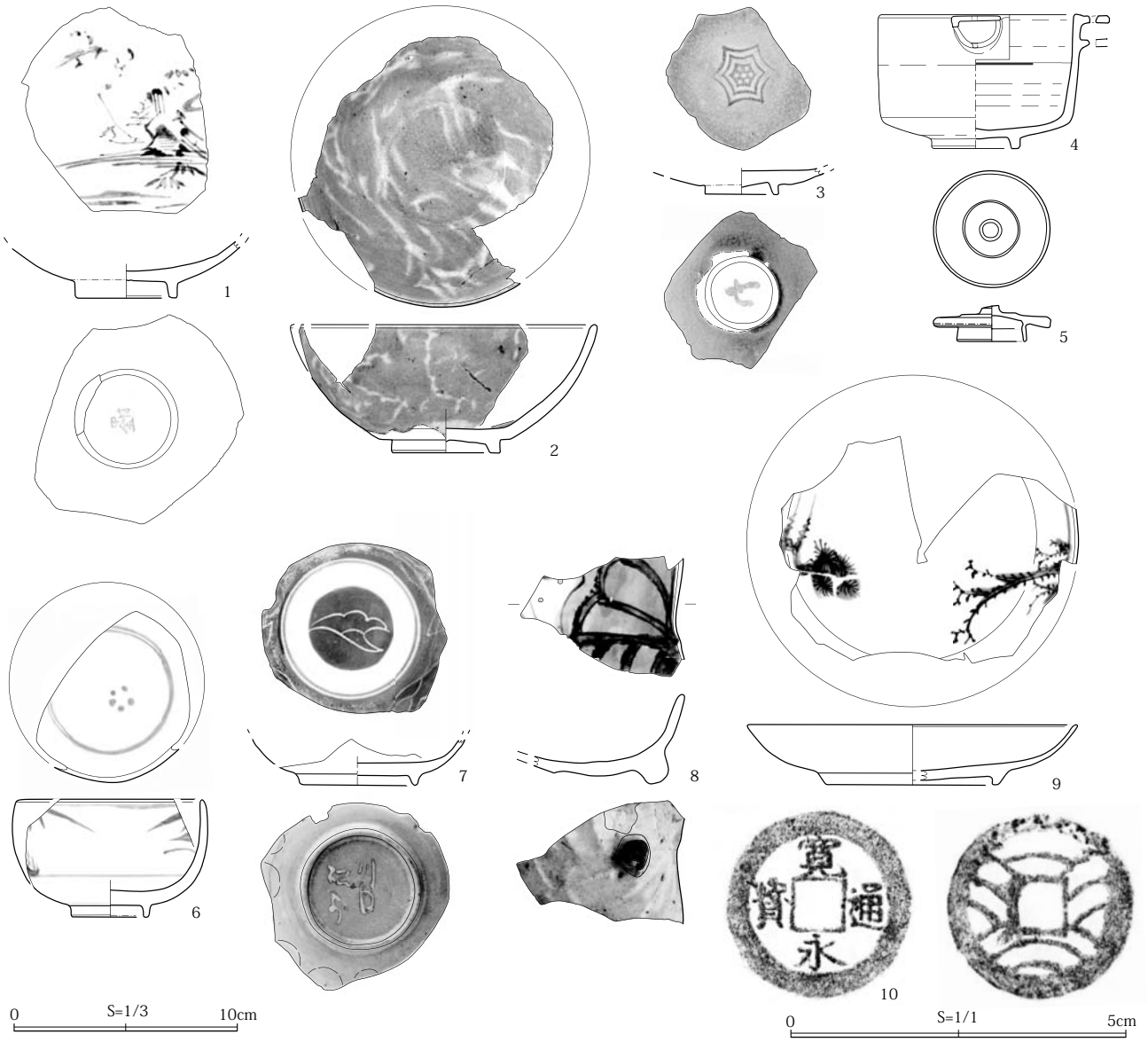
図版番号	写真図版番号	グリッド	種類	法量（cm・g）				備考	登録番号
				長さ	幅	厚さ	重量		
1	149-8	N1-W5	金属製品	4.7	1.44	-	7.83	飾り釘　二段目　菊花紋	N-55
2	149-9	N2-W4	金属製品	16.9	0.77	0.63	49.58	釘	N-56
3	149-7	N1-W6	金属製品	5.5	1.3	0.1	9.04	煙管（雁首）	N-57
4	149-10	N1-W6	金属製品	4.2	-	0.04	3.43	煙管（雁首）最大幅 1.05㎝　最小幅 0.6㎝　火皿なし	N-58
5	149-11	N1-W6	金属製品	5.25	1.15	0.05	3.79	煙管（吸口）最大径 1.15㎝　　最小径 0.4㎝	N-59

図版番号	写真図版番号	グリッド	銭貨名	初鋳年	法量（cm・g）			備考	登録番号
					外径	穿径	重量		
6	150-1	N1-W5	寛永通宝（新）	1697	2.3	0.6	2.69	無背	N-60
7	150-2	N1-W6	寛永通宝（新）	1668	2.5	0.6	2.99	文銭	N-61

第 250 図　Ⅲ層出土遺物（23）

5　Ⅱ層出土遺物（第 251 図、図版 150-3 ～ 151-6）

Ⅱ層からの出土遺物について図示した。Ⅱ層からは近代以降の遺物とともに、近世の遺物も多量に出土している。ここでは、その中で、形が良く残っているものや、希少なもの、銘、墨書が見られるもの等 10 点を図示した。特筆すべきものとして、第 251 図 -7 は 19 世紀前半の肥前産の皿であるが、高台内に「川内松前」の文字の痕が見られる。近世末期この地に居住していた松前氏の所有していたものと考えられる。(高台内の文字については 240 頁、「第 7 章　第 1 節 1（4）補修痕のある陶磁器について」を参照。)



図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量（cm）			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	150-5	N1-W5	陶器	平碗	体部～高台	やや密	-	4.6	(7.5)	肥前	18 世紀前葉	灰釉 内面：鉄絵山水楼閣文 上絵付け赤絵　高台内に銘「中村金」	I-286
2	150-4	N1-W5	陶器	碗	口縁～高台	粗	14.2	4.9	5.75	肥前	17 世紀末～18 世紀初頭	刷毛目文　灰釉	I-287
3	150-6	N1-W6	陶器	皿	体部～高台	やや密	-	3.3	(1.7)	大堀相馬	18 世紀後葉	灰釉 内面：見込みに陰刻 高台内に墨書「七」	I-288
4	150-3	N2-W6	陶器	鳥鉢	口縁～高台	やや密	(8.8)	(3.9)	6.0	大堀相馬	19 世紀前葉～中葉	灰釉 内面：鉄絵	I-289
5	151-3	N1-W5	陶器	土瓶蓋	摘み～口縁	やや密	3.1	-	無釉	大堀相馬	18 世紀末葉～19 世紀中葉	灰釉 内面：無釉 最大径 5.25cm	I-290
6	151-2	N1-W6	磁器	碗	口縁～高台	やや粗	8.3	3.4	5.25	肥前	18 世紀後半	染付笹文 透明釉 内面：染付梅花文 圏線	J-204
7	151-6	N1-W5	磁器	輪花皿	体部～高台	密	-	5.2	(2.05)	肥前	19 世紀前半	透明釉 高台内に文字痕「川内松前」焼継ぎ痕 内面：染付銀杏文	J-205
8	151-1	N1-W7	磁器	変形皿	口縁～脚部	やや密	-	-	(4.0)	肥前	近世	透明釉 内面：染付 最大長 6.75cm	J-206
9	151-4	N1-W6	磁器	皿	口縁～高台	密	(14.8)	7.9	2.7	肥前	16 世紀末～17 世紀初頭	透明釉　内面：染付松梅文　圏線	J-207

図版番号	写真図版番号	グリッド	銭貨名	初鋳年	法量（cm・g）			備考	登録番号
					外径	穿径	重量		
10	151-5	N1-W6	寛永通宝（波）	1768	2.8	0.6	4.39	4 文銭　11 波	N-62

第 251 図　II 層出土遺物

第 6 章　自然科学分析

第 1 節　川内 B 遺跡の植物化石群

吉川昌伸・吉川純子 (古代の森研究舎)

1　はじめに

川内 B 遺跡は、広瀬川右岸の段丘上にあり、今回の調査区の場所は、近世は武家屋敷地、近代以降は主に軍用地として利用されていたことがわかっている。ここでは主に川内 B 遺跡を中心に武家屋敷周辺の植生と生業、遺構の用途や堆積環境などを明らかにすることを目的に、花粉化石、珪藻化石、種実、樹種の植物化石群の調査を行った。

2　試料と方法

分析試料のリストと分析項目を第 4 表に示す。なお、樹種同定結果は第 2 節に示してある。また、各地点の位置とセクション図、堆積物の記載については以下では示さないので、関係する章を参照されたい。

a）花粉分析

花粉化石の調査は、路線部 I 区 SX3 性格不明遺構で採取された 3 試料（試料 No.1 ～ 3）と、路線部Ⅱ区 S1-W9 グリッドⅦ層の 1 試料（No.4）、迂回路部の SX37 と SX46、P4、N2-W6、N1-W8 から採取された 7 試料（No.14 ～ 21）である。花粉化石の抽出は、試料約 2 ～ 5g を秤量し体積を測定後に 10%KOH（湯煎約 15 分）、傾斜法により粗粒砂を取り除き、48%HF（約 15 分）、重液分離（比重 2.15 の臭化亜鉛）、アセトリシス処理（濃硫酸 1: 無水酢酸 9 の混液で湯煎 5 分）の順に処理を行った。プレパラート作製は、残渣を適量に希釈しタッチミキサーで十分撹拌後、マイクロピペットで取り重量を測定（感量 0.1mg）しグリセリンで封入した。また、堆積物の性質を調べるために、有機物量、泥分（シルト以下の細粒成分）、砂分量、及び生業の指標となる微粒炭量について調査した。有機物量については強熱減量を測定した。強熱減量は、電気マッフル炉により 750℃で 3 時間強熱し、強熱による減量を乾燥重量百分率で算出した。微粒炭量は、デジタルカメラでプレパラートの顕微鏡画像を取り込み、画像解析ソフトの ImageJ で 75 μ㎡微粒炭の積算面積を測定した。

No.	調査区	試料採取地点	層　位	時　期	花粉分析	珪藻分析	大型植物	植物珪酸体	樹種同定
1	路線部 I 区	S1-W11	Ⅱ層	近代	○				
2	〃	SX3	1 層	19 世紀	○	○			
3	〃	SX3	2 層	19 世紀	○				
4	路線部Ⅱ区	S1-W9c	Ⅶ層シルト層	近世	○	○			
11	迂回路部	SX21 西側カマド	焼土	18 世紀後葉～ 19 世紀				○	
12	〃	SX35 カマド	焼土	18 世紀後葉～ 19 世紀					2 (炭化材)
13	〃	SX35 前庭部下層	18 層	18 世紀後葉～ 19 世紀					2 (炭化材)
14	〃	SX37	2 層	18 世紀後葉～ 19 世紀	○		○		
15	〃	SX46		18 世紀後葉～ 19 世紀	○				1 (炭化材)
16	〃	P4	1（粘土層）	19 世紀中葉	○				
17	〃	P4	2（粘土層）	19 世紀中葉	○				
18	〃	N2-W6	Ⅳ層	18-19 世紀	○	○	○		
19	〃	N2-W6	Ⅴ層	18 世紀	○	○	○		
21	〃	N1-W8	Ⅴ層	18 世紀	○	○	○		
W22	路線部 I 区	SX5	堆積土	306 (根材)					1
W23	迂回路部	SD2	底面	867 (板)					1
W24	〃	S1-W8	Ⅴ層	792 (杭)					1

第 3 表　川内 B 遺跡の分析試料と項目

b）珪藻分析

珪藻化石の調査は、路線部Ⅰ区 SX3 と路線部Ⅱ区 S1-W9 の２試料（No.2,4）、迂回路部の N2-W6、N1-W8 の３試料（No.18,19,21）で行った。珪藻化石の抽出は、試料約 1g をトールビーカーにとり、35％過酸化水素水を加えて加熱し、有機物の分解と粒子の分散を行う。反応終了後に、沈底法により水洗を５～６回行った。次に分散した試料を適当な濃度に調整し、十分攪拌後マイクロピペットで取り、カバーガラスに展開して乾燥させる。スライドグラスにマウントメディア（封入剤）を適量のせ、これに先程のカバーグラスをかぶせ、加熱して封入剤の揮発成分を気化させて永久プレパラートを作成した。検鏡は 1000 倍の光学顕微鏡を使用して、珪藻殻が 1/2 以上残存したものについて同定・計数を行った。珪藻の同定および各種の生態情報は、Krammer & Lange-Bertalot（1986, 1988, 1991a, 1991b）、渡辺（2005）を参考にし、古環境の復元のための指標としては小杉（1988）と安藤（1990）の環境指標種群や、渡辺（2005）の有機汚濁と pH などを用いた。

c）植物珪酸体分析

植物珪酸体分析は、迂回路部 SX21 の焼土１試料（No.11）である。植物珪酸体化石の抽出は、試料約 1g をトールビーカーにとり、過酸化水素水、6N 塩酸、超音波処理の順に処理し、沈底法により 10 μ m 以下の粒子を除去した。傾斜法により粗粒な粒子を除いた残渣を遠心管に移し、十分攪拌後マイクロピペットで取りカバーガラスに展開して乾燥させ、マウントメディアで封入してプレパラートを作製した。

d）大型植物化石分析

大型植物化石は、迂回路部の SX37（No.14）、N2-W6（No.18.19）、N1-W8（No.21）の４試料である。No.14 は木材片を多く含むシルト、No.18-19 は約 5cm の礫を含むシルト質砂で、No.14 は 100cc、No18-19 はそれぞれ 300cc を分析に用いた。各試料は 0.25㎜目の篩で水洗し、残渣から実体顕微鏡下で同定可能な植物部位を選別し、同定・計数した。

3. 結　果

a) 花粉化石群

花粉分析試料の堆積物の特性を第５表に示す。堆積物は砂質シルトないしシルト質砂からなり、全般に無機物が卓越する。有機物量は４～15% 含まれ、10% 前後が多い。迂回路部の No.21（N1-W8）では種実が多く含まれている。出現した分類群のリストとその個数を第６表に、主要花粉分布図を第 251 図に示す。出現率は、樹木は樹木花粉数、草本胞子は花粉胞子数を基数として百分率で算出した。なお、P4 の No.16 は検出された樹木花粉数が 88 粒と少ないが参考までに図示した。第 252 図のうち路線部Ⅰ区は層序関係に基づき配列している。図表中で複数の分類群をハイフンで結んだのは、分類群間の区別が明確でないものである。また、図版に示した AFR.MY 番号は単体標本の番号を示す。路線部Ⅰ区 SX3 と路線部Ⅱ区 S1-W9 は主要樹木花粉の層位的産出傾向にもとづき、下位より OK- Ⅰ，Ⅱ、Ⅲの３つの花粉化石群帯を設定する。

No.	堆積物の特徴	砂	泥	強熱減量（有機物量）
1	オリーブ灰色シルト質細粒砂	64.8	29.1	6.1
2	オリーブ灰色細粒砂質シルト	29.7	59.4	10.9
3	灰オリーブ色シルト質中粒砂、6-8mm の礫混じる	68.7	27.5	3.8
4	オリーブ灰色シルト質細～中粒砂	46.1	44.6	9.3
14	オリーブ黒色シルト質細粒砂、2-10mm の礫混じる	52.6	37.4	10.0
15	オリーブ黒色中～細粒砂質シルト	41.5	47.2	11.3
16	オリーブ黒色シルト質中～細粒砂	51.5	39.0	9.5
17	灰オリーブ色細粒砂質シルト	21.0	66.9	12.1
18	灰色中粒砂質シルト	19.9	67.6	12.5
19	灰色中粒砂質シルト	22.2	64.0	13.8
21	オリーブ黒色細粒砂質シルト、種子多く混入	39.9	45.0	15.1

第４表　川内 B 遺跡の花粉分析試料の堆積物の特性 (重量％)

〈OK- Ⅰ〉

OK- Ⅰ（No.4）は、コナラ亜属とブナ、クリ属が比較的高率で出現し、ハンノキ属やクマシデ属 - アサダ属、クルミ属、マツ属複維管束亜属などを伴う。草本では、イネ属型が比較的高率で出現し、水生植物のミズアオイ属やオモダカ属、キカシグサ属を伴う。他にヨモギ属やソバ属、アブラナ科などが出現している。微粒炭量は 218 ㎟ / ㎤とそれほど多いわけでない。

〈OK- Ⅱ〉

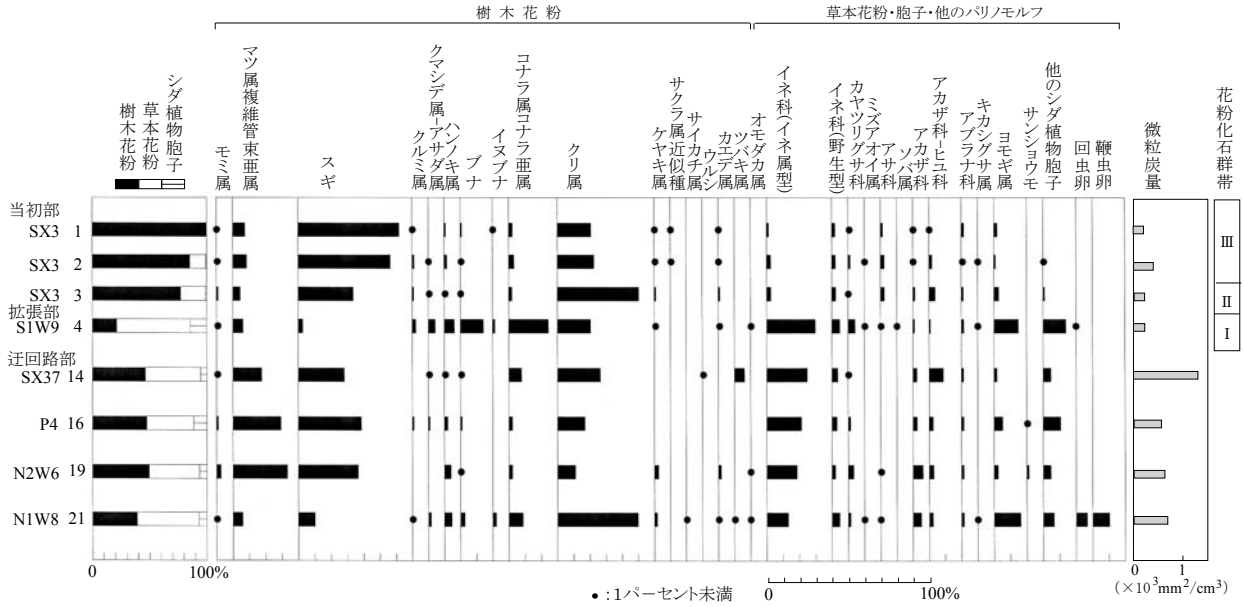
OK- Ⅱ（No.3）ではコナラ亜属やブナ、クマシデ属 - アサダ属などの広葉樹は減少して低率になり、クリ属とスギが比較的高率で出現する。草本は低率になり、アサ科やアカザ科、アブラナ科などが検出される。微粒炭量は 203 ㎟ / ㎤と OK- Ⅰと同様である。

〈OK- Ⅲ〉

OK －Ⅲ（No.1-2）では、スギが増加し高率で出現する。クリ属は減少するが比較的高率に占める。草本は OK- Ⅱと同様で変化はなく、微粒炭量も 189 ～ 371 ㎟ / ㎤と量的に際立った変化はない。

迂回路部の花粉化石群は、花粉が稀な No.15 と No.17 を除いては、No.14,16,18,19 と No.21 の 2 つに区分される。No.14,16,18,19 は、スギとマツ属複維管束亜属が比較的高率を占め、クリ属やコナラ亜属、モミ属などを伴う。No.14 ではツバキ属やウルシも検出されている。草本ではイネ属型が比較的多く占め、アカザ科やヨモギ属、アブラナ科などを伴う。また、微粒炭が 500 ～ 1286 ㎟ / ㎤と夥しい量が含まれる。

No.21 はクリ属が 50% と高率で出現し、スギやコナラ亜属、サイカチ属やツバキ属などを伴う。草本ではイネ属型やヨモギ属などが幾分多く占め、水生植物のオモダカ属やミズアオイ属などを伴う。また、寄生虫の回虫卵 738 個 / ㎤、鞭虫卵 1195 個 / ㎤、肝吸虫卵 82 個 / ㎤が出現し、微粒炭量が 681 ㎟ / ㎤と多く含まれる。また No.21 の樹木花粉群は OK- Ⅲに類似する。



第 252 図　川内 B 遺跡の主要花粉分布図
（出現率は樹木は樹木花粉数、草木・胞子は花粉胞子数を基数として百分率で算出した）

		路線部Ⅰ区		路線部Ⅱ区			迂回路部					
和　　名	学　名	SX3 1	SX3 2	SX3 3	S1-W9 4	SX37 14	SX46 15	P4 16	P4 17	N2-W6 18	N2-W6 19	N1-W8 21
樹　木												
モミ属	*Abies*	1	2	3	2	1	-	1	-	1	6	1
ツガ属	*Tsuga*	-	-	-	1	1	-	-	-	-	1	1
トウヒ属	*Picea*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-
マツ属単維管束亜属	*Pinus subgen. Haploxylon*	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus subgen. Diploxylon*	22	25	13	13	22	-	26	-	19	72	13
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	-	1	-	-	1	-	-	-	-	3	-
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	1	1	-	-	1	-	-	-	-	1	-
スギ	*Cryptomeria japonica* (L.fil.)D.Don	178	162	93	6	35	1	34	-	14	79	22
イチイ科－ヒノキ科－イヌガヤ科	*Taxaceae - Cupressaceae - Cephalotaxaceae*											
ヒノキ型	*Chamaecyparis type*	2	-	-	2	1	-	1	-	-	-	1
ヤナギ属	*Salix*	1	-	1	3	-	-	1	-	-	-	1
ヤマモモ属	*Myrica*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
サワグルミ属	*Pterocarya*	-	-	-	3	1	-	-	-	-	1	2
クルミ属	*Juglans*	1	4	3	5	-	-	1	-	1	-	1
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	-	1	2	9	1	-	1	-	-	-	4
ハシバミ属	*Corylus*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
カバノキ属	*Betula*	-	-	-	5	2	1	-	-	-	-	1
ハンノキ属	*Alnus*	3	5	2	13	1	1	2	-	4	9	10
ブナ	*Fagus crenata* Blume	3	2	1	29	1	-	1	-	1	1	6
イヌブナ	*Fagus japonica* Maxim.	1	-	-	3	-	-	-	-	-	-	5
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	7	10	6	50	10	1	2	-	2	5	19
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	1	1	2	-	1	-	1	-	1	-	-
クリ属	*Castanea*	60	65	139	42	33	1	15	-	1	24	107
シイノキ属	*Castanopsis*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
ニレ属	*Ulmus*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1
ケヤキ属	*Zelkova*	1	2	3	2	-	-	-	-	-	6	4
サクラ属近似種	cf. *Prunus*	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サイカチ属	*Gleditsia*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
サンショウ属	*Zanthoxylum*	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
ウルシ	*Rhus verniciflua* Stokes	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ヤマウルシ類	*Rhus trichocarpa* type	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ヌルデ	*Rhus javanica L.* var. roxburghii	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1
モチノキ属	*Ilex*	1	1	1	-	-	-	1	-	-	1	-
カエデ属	*Acer*	1	1	3	2	-	-	-	-	-	4	1
トチノキ属	*Aesculus*	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-	1
ツタ属	*Parthenocissus*	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ツバキ属	*Camellia*	-	-	-	-	8	-	-	-	-	-	1
グミ属	*Elaeagnus*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	*Araliaceae*	-	1	1	1	-	-	-	-	-	1	1
ミズキ属	*Swida*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
イボタノキ属	*Ligustrum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
トネリコ属	*Fraxinus*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	2
ニワトコ属	*Sambucus*	-	-	1	1	1	-	-	-	-	-	3
ガマズミ属	*Viburnum*	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
草　本												
サジオモダカ属	*Alisma*	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-
オモダカ属	*Sagittaria*	-	-	-	4	-	-	-	-	-	1	1
イネ科（イネ属型）	Gramineae (Oryza type)	5	9	10	286	67	10	40	-	68	81	73
イネ科（野生型）	Gramineae (Wild type)	7	8	9	48	10	3	6	1	7	10	27
カヤツリグサ科	Cyperaceae	3	5	1	43	1	-	3	-	5	15	9
ホシクサ属	*Eriocaulon*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
イボクサ属	*Aneilema*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1
ミズアオイ属	*Monochoria*	-	1	-	4	-	-	-	-	-	-	1
ネギ属	*Allium*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ギボウシ属	*Hosta*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
アヤメ科	Iridaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
アサ科	Cannabiaceae	5	8	9	4	-	-	-	-	-	2	1
イブキトラノオ属	*Bistorta*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
イヌタデ属	*Persicaria*	-	-	2	2	-	-	-	-	-	-	9
ソバ属	*Fagopyrum*	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科	Chenopodiaceae	1	1	5	11	7	1	5	-	11	27	28
他のアカザ科－ヒユ科	other Chenopodiaceae-Amaranthaceae	1	7	14	10	24	-	5	-	4	13	14
ナデシコ科	Caryophyllaceae	2	-	-	4	-	-	-	-	2	4	6
カラマツソウ属	*Thalictrum*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	-	1	1	3	-	-	-	-	-	-
アブラナ科	Curuciferae	6	3	5	16	4	1	3	-	-	7	10
バラ科	Rosaceae	-	-	1	1	1	-	-	-	-	-	1
マメ科	Leguminosae	-	-	1	1	-	-	-	-	-	2	4
ツリフネソウ属	*Impatiens*	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
キカシグサ属	*Rotala*	-	1	-	2	-	-	-	-	-	-	1
アリノトウグサ属	*Haloragis*	-	-	-	1	1	-	-	-	-	5	1
セリ科	Umbelliferae	-	-	3	4	-	-	-	-	2	1	-
シソ科	Labiatae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
オオバコ属	*Plantago*	1	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-
オミナエシ属	*Patrinia*	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	1
ヘクソカズラ属	*Paederia*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ヨモギ属	*Artemisia*	7	4	11	145	5	2	10	-	6	11	90
他のキク亜科	other Tubuliflorae	-	-	1	10	4	-	1	-	-	4	10
タンポポ亜科	*Liguliflorae*	1	-	1	9	3	-	3	-	2	7	3
シダ植物												
ヒカゲノカズラ属	*Lycopodium*	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-
ミズニラ属	*Isoetes*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ゼンマイ属	*Osmunda*	-	-	-	2	-	-	-	-	-	1	1
サンショウモ	*Salvinia natans (L.) All.*	-	-	-	-	-	-	1	-	3	6	-
他のシダ植物胞子	other Pteridophyta	-	2	4	133	13	2	20	2	8	21	37
他のパリノモルフ												
寄生虫卵												
回虫	*Ascaris*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	38
鞭虫	*Trichuris*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	58
肝吸虫	*Clonorchis*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4
樹木花粉総数	Arboreal pollen	287	286	275	203	124	5	88	0	44	215	214
草本花粉総数	Nonarboreal pollen	39	47	77	616	130	17	77	1	107	191	297
シダ植物胞子総数	Fern spores	0	2	4	136	14	2	21	2	12	28	38
花粉・胞子総数	Pollen and Spores	326	335	356	955	268	24	186	3	163	434	549
不明花粉	Unknown pollen	3	12	2	7	18	0	1	0	6	13	7
樹木花粉量（× 102 粒 / cm³）		52.9	146.2	54	15.1	30.2	1.2	8.3	0	4.9	19.4	44.1
微粒炭量（mm² / cm³）		189	371	203	218	1286	897	564	4	500	621	681

第５表　川内Ｂ遺跡で検出した花粉化石の一覧表

b）珪藻化石群

検出した珪藻化石群のリストとその個数を第 7 表に、珪藻化石群分布図を第 252 図に示す。出現率は珪藻殻総数を基数として百分率で算出した。

				路線部Ⅰ区	路線部Ⅱ区	迂回路部		
				SX3	S1-W9	N2-W6	N2-W6	N1-W8
分 類 群	指標種群	有機汚濁	pH	2	4	18	19	21
Amphora copulata (Kützing) Schoeman	W	ind	alph	20	3	-	-	1
Aulacoseira canadensis (Hustedt) Simonsen	W			-	1	-	-	-
Caloneis bacillum (Grunow) Cleve	W	ind	alph	1	-	-	-	-
Caloneis borealis J.R.Carter	W			-	-	-	-	1
Caloneis lauta Carter & Bailey-Watts	W			-	2	1	-	2
Caloneis silicula (Ehrenberg) Cleve	W	ind	alph	2	2	-	-	1
Cocconeis placentula var. *lineata* (Ehrenberg) Van Heurck	W			-	1	-	-	-
Craticula cuspidata (Kützing)D.G.Mann	W			7	2	-	-	-
Cyclotella sp.				1	-	-	-	-
Cymbella aspera (Ehrenberg) Peragallo	O	ind	albi	-	1	-	-	-
Cymbella naviculiformis Auerswald in Rabenhorst	W	ind	neut	2	3	-	-	-
Cymbella tumida (Brébisson) Van Heurck	W	saxe	alph	2	-	-	-	-
Cymbella sp.					-	-	-	1
Diploneis elliptica (Kutzing) Cleve	Q	saxe	alph	1	10	-	-	5
Diploneis ovalis (Hilse) Cleve	W			-		-	-	3
Diploneis yatukaensis Horik. et Okuno	W			-	1	-	-	3
Diploneis spp.				-	2	-	-	-
Encyonema lange-bertalotii Krammer	W	saxe	neut	1	-	-	-	-
Encyonema mesianum (Cholnoky) D.G.Mann	W	saxe	neut	-	2	1	-	-
Encyonema silesiacum (Bleisch in Rabenhorst) D.G.Mann	W	saxe	neut	-	-	-	-	3
Epithemia adnata (Kützing) Brébisson	W	saxe	alph	-	-	-	-	3
Eunotia glacialis Meister	W			1	-	-	-	-
Eunotia minor (Kützing) Grunow in Van Heurck	W	saxe	neut	-	-	-	-	1
Eunotia pectinalis (Dillwyn) Rabenhorst	O	saxe	acph	-	-	-	-	6
Eunotia sp.				-	1	-	-	6
Gomphonema acuminatum　Ehrenberg	O	ind	alph	1	-	-	-	1
Gomphonema angustatum Agardh	W	saxe	alph	4	-	-	-	3
Gomphonema gracile Ehrenberg	O	ind	neut	-	1	-	-	1
Gomphonema intricatum var. vivrio (Ehrenberg) Cleve	W	ind	alph	-	1	-	-	-
Gomphonema parvulum (Kützing) Kützing	W	ind	neut	2	-	1	-	1
Gomphonema turris Ehrenberg	W			1	-	-	-	-
Gomphonema spp.				2	-	-	-	2
Gyrosigma cf. *procerum* Hustedt	W	ind	neut	3	-	-	-	-
Gyrosigma scalproides (Rabenhorst) Cleve	W	ind	neut	1	-	-	-	-
Hantzschia amphioxys (Ehrenberg) Grunow in Cleve & Grunow	Q	ind	neut	25	8	17	21	14
Melosira varians Agardh	K	ind	alph	2	-	-	-	-
Meridion circulare var. constrictum (Ralfs) Van Heurck	K	saxe	alph	1	-	-	-	-
Navicula elginensis (Gregory) Ralfs	O	ind	neut	1	-	-	-	-
Navicula mutica Kutzing	Q	saph	alph	1	-	-	-	4
Navicula cf. *peregrina* (Ehrenberg) Kützing	W			15	1	-	-	-
Navicula spp.				1	1	-	-	1
Neidium affine (Ehrenberg) Pfitzer	W	ind	acph	-	-	-	-	1
Neidium ampliatum (Ehrenberg) Krammer	W		acph	-	2	-	-	3
Neidium iridis (Ehrenberg) Cleve	O			2	-	-	-	-
Neidium sp.				2	-	-	-	-
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	O			3	4	-	-	9
Pinnularia borealis Ehrenberg	Q	ind	acph	-	1	1	-	1
Pinnularia brebissonii (Kützing) W.Smith	W			-	-	-	-	2
Pinnularia divergens var. *sublineariformis* Krammer	W			2	1	-	-	-
Pinnularia divergens W.Smith	W				2	-	-	-
Pinnularia gibba Ehrenberg	O	ind	acph	15	1	-	-	16
Pinnularia interrupta W.Smith	W			2	-	-	-	2
Pinnularia microstauron (Ehrenberg) Cleve	W	saph	acbi	7	-	-	-	5
Pinnularia nodosa (Ehrenberg) W.Smith	O			-	1	-	-	-
Pinnularia obscura Krasske	W			-	-	1	1	-
Pinnularia schroederii Hustedt	W			1	-	-	-	-
Pinnularia subcapitata Gregory	Q	saph	acbi	-	-	-	-	-
Pinnularia viridis (Nitzsch) Ehrenberg	O	ind	neut	11	13	-	-	15
Pinnularia spp.				8	11	1	-	24
Rhopalodia gibba (Ehrenberg) O.Müller	W	ind	neut	-	1	-	-	-
Rhopalodia gibba var. ventricosa (Kützing) H.Peragallo & M.Peragallo	W			-	-	1	-	-
Rhopalodia gibberula (Ehrenberg) O.Müller	W			-	24	-	-	15
Sellaphora americana (Ehrenberg) D.G.Mann	W			39	-	-	-	-
Stauroneis acuta W.Smith	W			1	-	-	-	1
Stauroneis phoenicenteron (Nitzschi) Ehrenberg	O	ind	neut	11	2	-	1	7
Surirella angusta Kützing	W	ind	neut	-	-	-	-	2
Surirella capronii Brébisson & Kitton	W	ind	neut	1	-	-	-	-
Surirella biseriata Brébisson in Brébisson & Godey	W	ind	neut	1	-	-	-	-
Surirella sp.				4	-	-	-	3
Synedra ulna (Nitzsch) Ehrenberg	W	ind	alph	5	-	-	-	-
Trybionella levidensis W.Smith	W	saph	neut	2	1	-	-	1
環境指標種群（個数）								
中～下流性河川指標種群（K）				3	0	0	0	0
沼沢湿地付着生種群（O）				44	23	0	1	55
陸域指標種群（Q）				27	19	18	21	24
淡水産公布種（W）				123	50	5	1	54
不定				18	15	1	0	37
珪藻殻数				215	107	24	23	170
珪藻殻数 (× 1000 個 /g)				493.8	46.0	11.4	13.2	11.2
付着珪藻群集に基づく有機汚濁指数 (DAIpo)				51	55	-	-	55

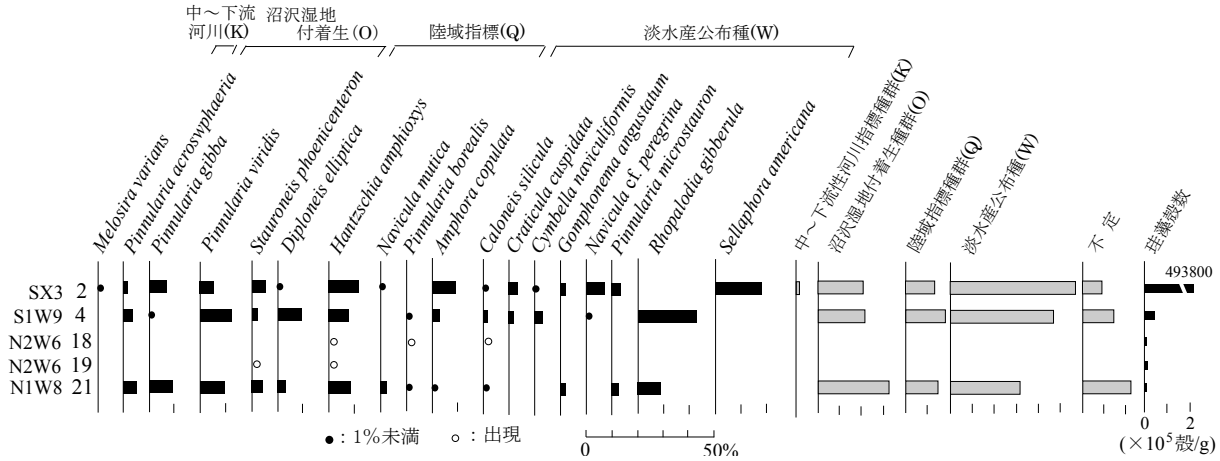
saxe：好清水性種，　saph：好汚濁性種，　ind：広適応性種，　acbi：真酸性種，　acph：好酸性種，　neut：中性種，　alph：好アルカリ性種，　albi：真アルカリ性種

第 6 表　川内 B 遺跡の珪藻分析結果一覧表

（指標種郡は安藤 (1990)、有機汚濁と pH は渡辺 (2005) に基づく）

路線部Ⅱ区の No.4 では、淡水産公布種の *Rhopalodia gibberula* が比較的高率に出現し、沼沢湿地付着生種群の *Pinnulari viridis*、*Stauroneis phoenicenteron* や陸域指標種群の *Hantzschia amphioxys*、*Diploneis elliptica* などを伴う。上位層の路線部Ⅰ区の No.2 では淡水産公布種の *Sellaphora americana* が比較的高率に出現し、*Amphora copulata* や陸域指標種群の *Hantzschia amphioxys*、沼沢湿地付着生種群の *Pinnulari viridis*、*Pinnularia gibba* などからなり、*Rhopalodia gibberula* は検出されない。珪藻殻数は約 49 万殻 /g と他試料に比べ多く含まれていた。

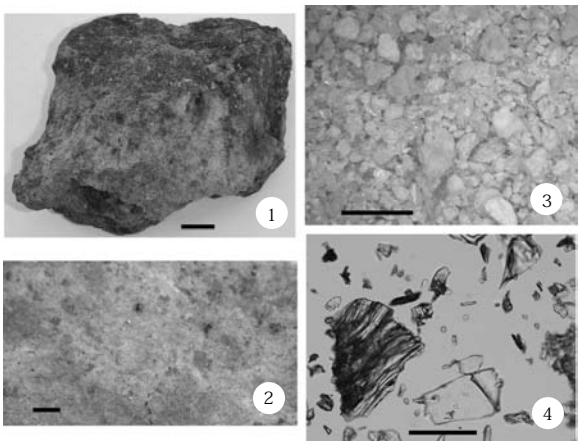
迂回路部の No.18 と No.19 では検出された珪藻化石は少ないが、その中では陸域指標種群の *Hantzschia amphioxys* が大半を占める。No.21 では特に多く検出された分類群はないが、沼沢湿地付着生種群の *Pinnulari viridis*、*Pinnularia gibba* や陸域指標種群の *Hantzschia amphioxys*、*Diploneis elliptica*、淡水産公布種の *Rhopalodia gibberula* などが出現する。迂回路部の No.21 の珪藻化石群は路線部Ⅱ区の No.4 に似る。



第 253 図　川内 B 遺跡の主要珪藻分布図

c）植物珪酸体分析

迂回路部 SX21 から採取した焼土試料（No.11）からは植物珪酸体は検出されなかった。また、珪藻化石も検出されない。第 253 図に試料の状況と、実体顕微鏡（第 253 図 -3）と生物顕微鏡写真（第 253 図 -4）示す。構成粒子は、灰白色軽石と火山ガラス（平板から繊維状、塊状）を主体とし、微量に石英や斜長石が含まれる。



第 254 図　No.11(SX21) 試料の状況と構成粒子の顕微鏡写真
（スケールは 1 =1cm, 2 & 3 =1mm, 4 =0.1mm）

d）大型植物化石群

迂回路部 SX37 の No.14 からは同定可能な植物部位は検出されなかった。

迂回路部の N2-W6 グリッドの No.18 と No.19 から検出した種実は少量であった。No.18 からは、食用としてメロン仲間が 1 個検出し、ほかにはニワトコ、イイギリ、コゴメガヤツリ近似種を検出した。No.19 は完形のヒユ属を検出し、ほかにニワトコ、イイギリ、タラノキを検出した。

迂回路部 N1-W8 の No.21 からはメロン仲間の種子を多数検出し、ヒエ穎も多く検出した。食用では、ほかにトウガラシ属を検出し、つぶれたヒユ属種子も検出した。本試料では木本の種実は検出せず、イヌビエ、ミドリハコベ近似種、カタバミ、スゲ属などの比較的日当たりの良い路傍などに生育する草本の種実を検出している。廃棄する部位を多く検出していることから、食糧残渣を廃棄したことが推測される。

分類群		出土部位	18 N2-W6 300cc	19 N2-W6 300cc	21 N1-W8 100cc
イイギリ	*Idesia polycarpa* Maxim.	種子	1	1	-
タラノキ	*Aralia elata* (Miq.) Seeman	内果皮	-	1	-
ニワトコ属	*Sambucus*	内果皮	2	1	-
ヒエ	*Echinochloa esculenta* (A. Braun) H. Scholz	穎	-	-	52
イヌビエ	*E. crus-galli* (L.) Beauv.	穎	-	-	6
エノコログサ属	*Setaria*	穎	-	-	1
コゴメガヤツリ近似種	*Cyperus* cf. *iria* L.	果実	1	-	1
スゲ属	*Carex*	果実	-	-	3
サデクサ	*Persicaria maackiana* (Regel) Nakai	果実	-	-	2
サナエタデ近似種	*P.*cf. *scabrum* Moench	果実	-	-	1
ミドリハコベ近似種	*Stellaria* cf. *neglecta* Weihe	種子	-	-	3
ノミノフスマ近似種	*S.* cf. *alsine Grimm var. undulata* (Thunb.) Ohwi	種子	-	-	1
ヒユ属	*Amaranthus*	種子完形	-	2	6
		種子つぶれ	-	-	2
カタバミ属	*Oxalis*	種子	-	-	2
トウガラシ属	*Capsicum*	種子	-	-	1
ナス属	*Solanum*	種子	-	-	1
ヤブジラミ	*Torilis japonica* (Houtt.) DC.	果実	-	-	1
キュウリ属メロン仲間	*Cucumis melo* L.	種子	1	-	399
イヌコウジュ属	*Mosla*	果実	-	-	1

第 7 表　川内 B 遺跡検出大型植物化石一覧表

4　考　察

(1) 路線部 I 区 SX3 と、路線部 II 区 S1-W9、迂回路部 N2-W6、N1-W8 の堆積環境

路線部 I 区 SX3 の No.2 と路線部 II 区 S1-W9 の No.4 は、ほぼ同様な指標種群から構成されるが、幾分異なった環境であったとみられる。つまり、いずれも淡水産公布種が優勢で、沼沢湿地付着性種群と陸域指標種群を伴う特徴がある。陸域指標種群は、コケ類を含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壌の表層部など大気に接触した環境に生活する一群（小杉，1986）で、他の生育地には出現しないか、出現しても主要でない（安藤 ,1990）とされている。沼沢湿地付着性種群は水域で植物が繁茂しているところ、および湿地で付着の状態で優勢な出現が見られる種群（安藤 ,1990）であることから、S1-W9 と SX3 は滞水した部分とその周囲にじめじめした環境があったとみられる。一方で、S1-W9 は淡水から汽水域に分布する好アルカリ性種の *Rhopalodia gibberula* が比較的多く占めるのに対し、SX3 は好アルカリ性種の *Sellaphora americana* が比較的多く検出される。これら種は、公布種のため環境を特定することはできないが、SX3 では中～下流性河川指標種群の珪藻が僅かに検出されているため、S1-W9 の閉鎖的な環境と、SX3 の僅かではあるが河川水が流入するような環境の違いによるのかもしれない。

迂回路部 N2-W6 の No.18・19 は、検出される珪藻殻数が少ないが、その中では陸域指標種群の *Hantzschia amphioxys* が大半を占めることから、コケが生えるようなじめじめした環境にあったと推測される。一方、N1-W8 の No.21 は、沼沢湿地付着性種群と淡水産公布種が優勢で陸域指標種群を伴うことから、滞水した部分とその周囲にじめじめした環境があったとみられる。また No.21 は路線部 I 区の S1-W9 の No.4 と似た組成を示し、ほぼ同様な堆積環境であったと推定される。

(2) 川内 B 遺跡周辺の植生と生業

路線部 I 区と路線部 II 区の花粉化石群の層位的変動、及び迂回路部の花粉化石群の組成に基づくと、近世（17 世紀以降）の周辺植生は、クリとコナラ亜属時期、クリとスギの時期、スギ林の拡大期、マツとスギの時期の 4 つの植生期に区分される。

〈クリとコナラ亜属の時期（17 世紀頃？）〉

この期は路線部 II 区の S1-W9 の No.4 が相当する。川内 B 遺跡が位置する二の丸北方武家屋敷周辺には、落葉広葉樹のクリやコナラ亜属、カエデ属、クルミ属、針葉樹のスギやマツ、モミ属などが分布していたとみられる。樹木花粉の比率が低く樹木花粉量も少ないことから、ブナ、ハンノキ属、クマシデ属 - アサダ属などは幾分離れ

た所からの飛来花粉と推測される。また、クリ花粉が 21% と比較的高率に出現している。クリ花粉は林内では高率に占めるが林外で急減し、周囲に森林が発達する地域ではクリ林から約 20m で 5% 以下、200 m程度離れると花粉が稀にしか検出されない（荒川ほか、2008）。本遺跡ではクリ花粉が比較的高率であることや樹木花粉の比率と花粉量が少ないことから、周辺にクリ個体が多いか、あるいは調査地点に近接してクリが生育し、コナラ亜属は疎林であったと考えられる。この期の花粉化石群の組成は、上段部や平成 20 年度の調査区にも認められないため、調査した範囲では最も古い時期である可能性がある。

〈クリとスギの時期（17 世紀）〉

この期は路線部Ⅰ区の SX3 の No.3 が相当する。この期にはコナラ亜属が縮小し、スギやクリを主とする樹木が分布していたとみられる。クリ属花粉は 51％と高率に占めるため、少なくとも SX3 の周辺にはクリ個体が生育し、スギやカエデ属、ケヤキ、モミ属などが疎らにあったと推測される。また、迂回路部の N1-W8 の No.21（17 世紀）もクリ属が高率に出現し、同様な組成を示す。No.21 と No.3 が同時期であれば、17 世紀頃にクリ個体が多く植栽されていた可能性も考えられる。

No.21 には寄生虫卵が 2015 個 / cm^3と比較的多く含まれる。糞便堆積物の目安として 1000 ～ 10000 個 / cm^3以上の寄生虫卵の密度が指摘されている（金原，1999）が、寄生虫卵は花粉に比べ保存性が悪いことや感染状況により量が異なることが想定され、少量の場合は密度のみでは難しいであろう。また、食用植物の花粉が目立って多いわけでないが、メロン仲間の種子が多く混入していることから、糞便堆積物あるいは糞便が廃棄された可能性はある。しかしながら、種実ではヒエの頴など廃棄する部位も多く検出されているため、食糧残渣も廃棄されているとみられる。なお、寄生虫の回虫と鞭虫は手指や野菜に付着、塵と共に食物の上に散布した幼虫包蔵卵を経口摂取、肝吸虫はモツゴやフナ、コイなどの淡水魚の生食で感染する。回虫は成虫が小腸内で静かに寄生している場合は大した症状はないが、時に胆管や虫垂に迷入すると激しい腹痛を生じ、鞭虫は少数寄生の場合はほとんど無症状で、多数寄生すると異食症や腹痛、下痢等、肝吸虫も少数感染の場合は無症状に経過するが、多数感染の場合は腹水、浮腫、黄疸などの重篤な症状をきたすとされている（吉田ほか、1996）。

〈スギ林の拡大期〉

この期は路線部Ⅰ区の SX3 の No.1 ～ 2 が相当する。この期には周辺でスギが拡大したとみられ、クリや他の落葉広葉樹には際立った変化があったわけではないであろう。前年度及び同時期に調査された仙台城跡においてもスギが優勢な時期が認められたことから、屋敷周辺で広く起こった変化とみられる。一方、池の可能性が推定されている SX3 堆積物から出現した草本花粉は低率で、イネ科や抽水植物のミズアオイ属、キカシグサ属などが僅かに検出される程度であるため、遺構内の植生は貧弱であった可能性が推測される。

〈マツとスギの時期（18-19 世紀）〉

この期にはスギが縮小し、マツが拡大したようである。他の分類群は、前時期と同様に際立った変化がないことから、概ね同様であったとみられる。同様の組成は仙台城跡Ⅱ区東部池２（SN- Ⅲ）等でも認められることから、少なくとも二の丸北方武家屋敷周辺の広い範囲で起こった変化である。また、迂回路部 SX37、P4、N2-W6 グリッドⅣ層堆積土の各試料からは、イネ属型花粉が比較的多く検出され、抽水植物も出現するため、生活排水の流入等が想定される。

引用文献

荒川隆史・吉川昌伸・吉川純子・門口実代．2008. 縄文時代のクリ利用に関する調査と実験．考古学ジャーナル 574，23-27.

安藤一男．1990．淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，73-88.

金原正明 . 1999. 寄生虫.「考古学と自然科学② 考古学と動物学」（西本豊弘・松井　章編），151-158.

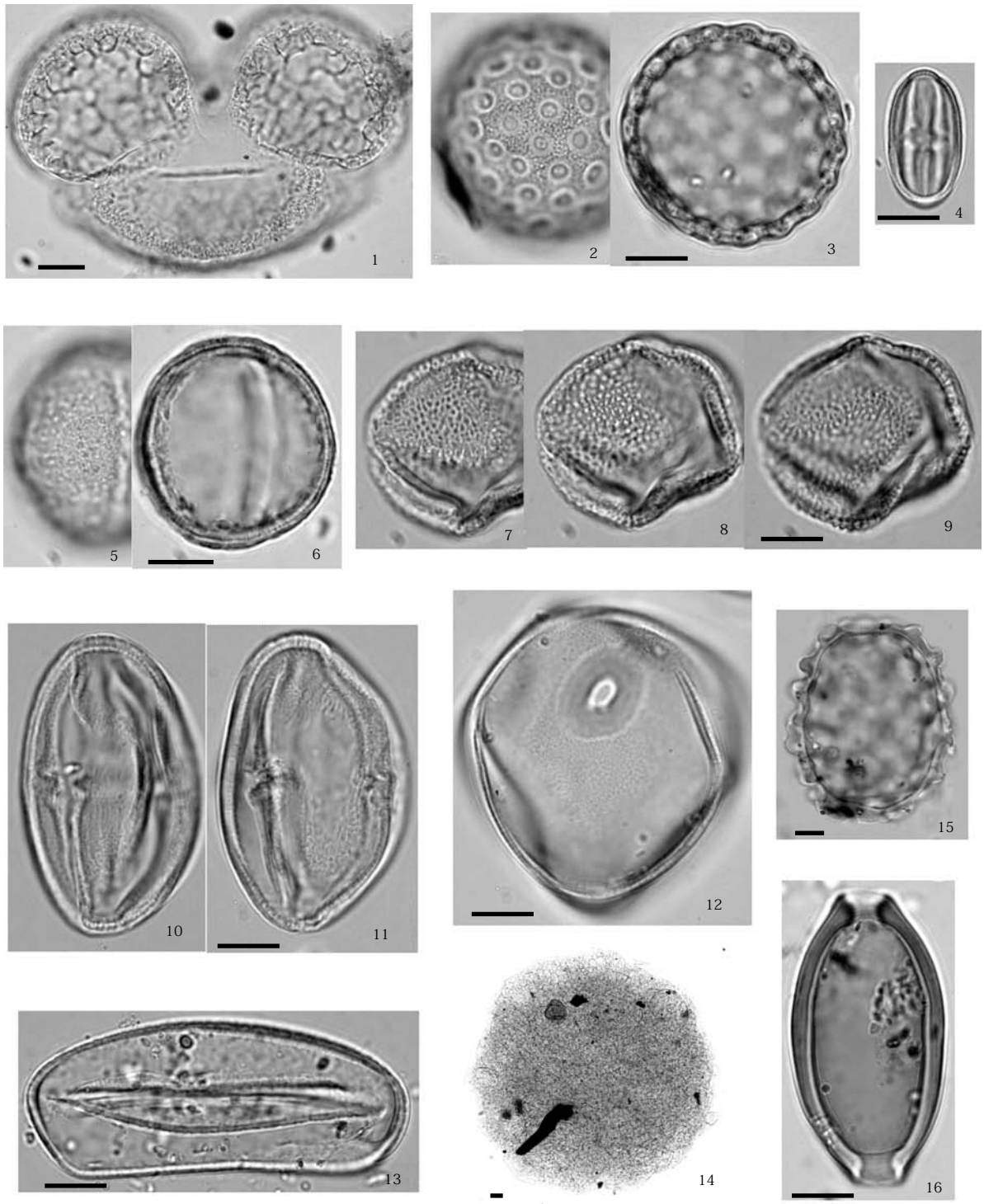
小杉正人．1986．陸生珪藻による古環境の解析とその意義－わが国への導入とその展望．植生史研究，1 号，29-　44.

小杉正人．1988．珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用．第四紀研究，27，1-20.

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.（1986, 1988, 1991a, 1991b）Bacillariophyceae, 1.Teil:Naviculaceae.876p.; 2.Teil:Bacillariaceae, Epithemiaceae, Surirellaceae. 596p.; 3.Teil:Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. 576p.; 4.Teil:Achnanthaceae, Hritische Efgänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. 437p, In: Ettl, H., Gerloff, J., Heyning, H., Mollenhauer, D.(eds),Susswasserflora von Mitteleuropa, Bd2/1-4, Gustav Fische, Stuttgart.

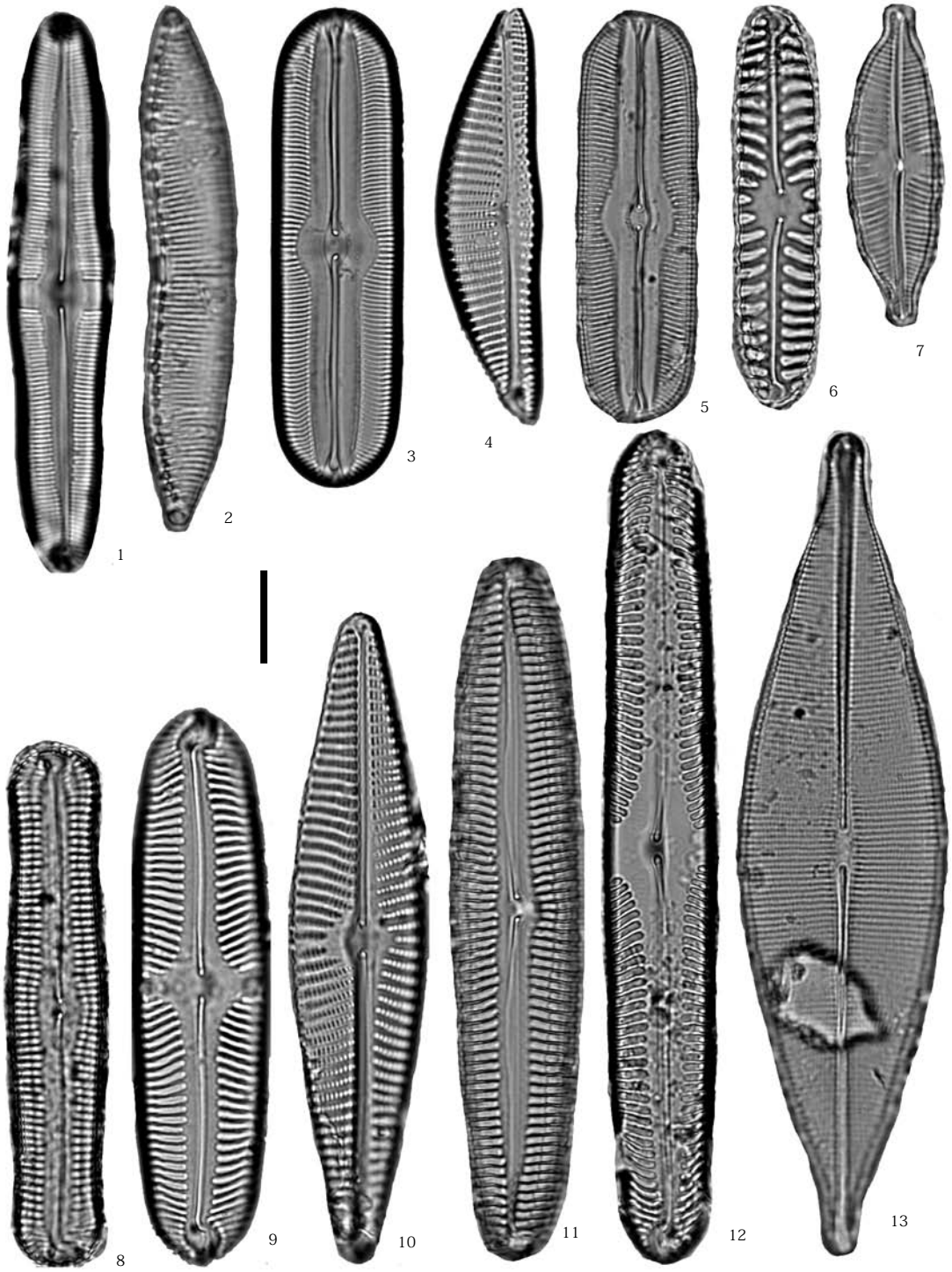
吉田幸雄．1996．図説人体寄生虫学．293p.，南山堂，東京.

渡辺仁治．2005．淡水珪藻生態図鑑．666 ｐ . 内田老鶴圃，東京.



第 255 図　川内 B 遺跡で検出した花粉化石とパリノモルフ

1: マツ属複維管束亜属 (*Pinus* subgen. *Diploxylon*)，21, AFR.MY 1906. 2-3: アカザ科 (Chenopodiaceae), 21, AFR.MY 1908.
4: クリ属 (*Castanea*), 21, AFR.MY 1910.　5-6: コナラ亜属 (*Lepidobalanus*)，21, AFR.MY 1905.　7-9 : ウルシ (*Rhus verniciflua*), 14, AFR.MY 1902. 10-11: ヌルデ (*Rhus javanica* var. *roxburghii*)，21，AFR.MY 1904.　12: イネ科イネ属型 (*Oryza* type), 21, AFR.MY 1907. 13: ミズアオイ属 (*Monochoria*), 2, AFR.MY 1903.　14: サンショウモ (*Salvinia natans*), 18, AFR.MY 1912. 15: 回虫卵 (*Ascaris*), 21, AFR.MY 1909.　16: 鞭虫卵 (*Trichuris*)，21, AFR.MY 1921.　　スケール =10 μ m.



第 256 図　川内Ｂ遺跡で検出した珪藻化石

1 *Caloneis silicula*, no.2.　2 *Hantzschia amphioys,* no.18.　3 *Sellaphora americana*, no.2.　4 *Encyonema mesianum*, no.18.
5 *Sellaphora* americana, no.2.　6 *Pinnularia borealis*, no.4.　7 *Cymbella naviculiformis*, no.4.　8 *Pinnularia acrosphaeria*, no.21.
9 *Pinnularia divergens* var. *sublimeariformis*, no.2.　10 *Navicula* cf. *peregrina*, no.2.　11 *Pinnularia viridis*, no.21.　12 *Pinnularia gibba*, no.21.
13 *Craticula cuspidata*, no.2.　　スケール＝ 10 μ m

第２節　川内Ｂ遺跡出土木材の樹種同定

吉川純子（古代の森研究舎）

１　試料と方法

川内Ｂ遺跡は、平成 20 年度に発掘調査を行い、江戸時代の 17 世紀～ 19 世紀にかけての遺構から木製品や加工材が多数出土している。今回、川内Ｂ遺跡における木材利用状況を解明するため、これらの出土木材の樹種を調査した。

分析に充てた種類は杭、板材などの加工材と下駄、漆器、箸などの木製品で計 50 点、根材１点、炭化材５点の計 56 試料の樹種同定を行った。出土木材からは直接剃刀を用いて横断面、接線断面、放射断面の３方向の薄片を採取し、ガムクロラールを用いてプレパラートに封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。炭化材は剃刀を用いて横断面、接線断面、放射断面の３方向の断面に割りとりプレパラートに固定して、反射照明型顕微鏡で観察・同定した。

２　同定結果

川内Ｂ遺跡から出土した木材の樹種同定結果を第９表に示す。杭、柱、棒、板材、井戸枠など加工材と木片、桶、箸など木製品から同定された樹種は、スギ 11 点、ブナ属 10 点、針葉樹７点、クリ５点、アスナロ属、カマツカ属、コナラ属コナラ節が各３点、アサダ、トチノキが各２点、ハリギリ、トネリコ属、モミ属、サクラ属、コナラ亜属コナラ節が１点ずつであった。また、根材はトウヒ属、炭化材はブナ属２点とイイギリ２点及びクマシデ属１点であった。以下に同定された分類群の記載を行う。

スギ *(Cryptomeria japonica* (Linn.fil.)D.Don)：

早材から晩材への移行は急で晩材部が厚い。分野壁孔はスギ型で横に長い楕円形となり、１分野に２～３個ある。

アスナロ属 (*Thujopsis*)：

早材から晩材への移行はゆるやかで年輪界が比較的明瞭な針葉樹。晩材部付近に樹脂細胞があり水平壁が数珠状に肥厚する。分野壁孔はスギないしヒノキ型で小さく１分野に 2-3 個存在する。

トウヒ属 (*Picea*)：

早材から晩材への移行は比較的緩やかで、垂直および水平樹脂道が存在する。分野壁孔はトウヒ型で、放射仮導管の有縁壁孔縁に針状突起が確認できる。

モミ属 (*Abies*)：

早材から晩材への移行は比較的緩やかで、晩材部は幅が狭い。放射組織は単列で２～ 10 細胞高程度、上下縁辺には不規則な形の柔細胞がみられ、じゅず状末端壁を有する。

分野壁孔はスギ型で１分野に１～４個程度存在する。

針葉樹：

早材から晩材への移行は比較的急で樹脂道は確認できない。放射組織は柔細胞のみからなるようであるが、分野壁孔が溶けて確認できないため、ほかの組織も失われている可能性があり同定不可であった。

クマシデ属 (*Carpinus*)：

小さい管孔が単独ないし３～４個放射方向に複合し配列する放射孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で３細胞幅くらいのものと集合放射組織がある。

アサダ (*Ostrya japonica* Sarg.)：

中くらいの道管が３～５個放射方向に複合して、年輪内に平等に分布する散孔材。道管は単穿孔を持ち、らせ

ん肥厚がある。軸方向柔細胞は接線状や網状となる。放射組織は異性で上下端に方形細胞があり、幅は１～４細胞幅で、一つ一つが丸みを帯びている。

ブナ属 (*Fagus*)：

単独ないし２～３個連結した小さな道管が年輪内にやや密に分布し、晩材部でやや径が減ずる散孔材。横断面に頻繁に広放射組織があり、年輪界と直交する部分で年輪界が外に突出する傾向がある。放射組織は１～４細胞幅の紡錘形と、幅の広く長い広放射組織があり、同性である。道管内の穿孔板は単一である。

コナラ属コナラ節 (*Quercus* sect. *Prinus*)：

年輪のはじめに大きな道管が２～３列集合し、その後径が急減して、波状に薄壁で角張った小管孔が配列する環孔材。道管の穿孔板は単一で放射組織は同性で単列と広放射組織があり、横断面で広放射組織が目立つ。

クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)：

年輪のはじめに大きい道管が花弁状に配列し、急に径が減じて火炎状に配列する環孔材である。道管は単穿孔、放射組織は１～２列でほぼ同性である。

サクラ属 (*Prunus*)：

小型で丸い管孔が単独ないし数個複合して斜めにつらなり、やや密に分布する散孔材。晩材部で道管径がやや減少する。道管は単穿孔でらせん肥厚がある。放射組織は異性で１～５細胞幅。

カマツカ属 (*Pourthiaea*)：

小さい道管が単独で年輪内に平等に散在する散孔材。道管はほぼ単穿孔で、道管側壁は交互状で内壁にらせん肥厚がある。放射組織は異性で１～４細胞幅である。

イイギリ (*Idesia polycarpa* Maxim.)：

中くらいの道管が２～７個放射方向に複合して、年輪内に平等に散在する散孔材。道管は単穿孔があり、放射組織は異性で１～４細胞幅で、単列部が長い。

トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume)：

単独ないし数個放射方向に複合した管孔が均一に分布する散孔材。道管内にらせん肥厚があり、穿孔板は単一で放射組織は単列で同性、しばしば層階状に配列する。

ハリギリ (*Kalopanax pictus* Nakai)：

年輪のはじめに大きな道管が１列配列し、その後小さい管孔が多数複合して斜線状、波状に著しく長く連なって配列する環孔材。道管は単一穿孔を有する。放射組織は1-5細胞幅で異性で大部分が平伏細胞だが、上下縁に方形細胞が並ぶ。

トネリコ属 (*Fraxinus*)：

年輪のはじめに大きくて厚壁の管孔が2,3列配列し、晩材部では厚壁の小さい管孔が、単独ないし数個複合して

試料番号	図版番号	出土地点	種類	樹種
1	第 51 図 1	N1-W13 Ⅳ層	杭	アサダ
2	第 72 図 1	S1-W10 Ⅲ層	しゃもじ	針葉樹
3	第 58 図 9	SX3	杭	モミ属
4	第 51 図 3	N1-W12 Ⅴ層	杭	スギ
5	第 51 図 2	N1-W12 Ⅴ層	杭	針葉樹
6	第 98 図 2	S1-W4d Ⅴ層	杭	スギ
7	第 134 図 4	SX40	加工木片黒漆塗	針葉樹
8	第 211 図 5	N1-W8 Ⅳ-2 層	箸	スギ
9	第 129 図 11	N2-W8 Ⅳ-3 層	加工木片（板材）	スギ
10	第 179 図 3	SX11	柱根	スギ
11	第 124 図 1	SX29	杭	カマツカ属
12	第 124 図 2	SX29	杭	カマツカ属
13	第 127 図 1	SX30	柱根	クリ
14	第 127 図 2	SX30	柱根	クリ
15	第 151 図 7	SK7	結桶側板	スギ
16	第 179 図 4	SX11	柱根	スギ
17	-	SX43	杭	カマツカ属
18	第 118 図 3	SX41	溝蓋	アサダ
19	第 119 図 3	SX41	分割材（溝蓋）	コナラ属コナラ節
20	第 121 図 1	SX41	板材（溝蓋）	ブナ属
22	第 118 図 4	SX41	丸木材（溝蓋）	サクラ属
23	第 118 図 2	SX41	杭	コナラ属コナラ節
24	第 134 図 6	SX40	杭	針葉樹
25	第 134 図 5	SX40	杭	針葉樹
25-2	第 134 図 7	SX40	杭	スギ
26	第 121 図 2	SX41	桶把手	スギ
27	第 119 図 2	SX41	半割材（溝蓋）	コナラ属コナラ節
28	第 119 図 1	SX41	丸木材（溝蓋）	トネリコ属
29	第 120 図 1	SX41	板材（溝蓋）	ブナ属
30	第 130 図 1	N2-W7 Ⅴ層	下駄	ハリギリ
31	第 148 図 2	SD6	箸	アスナロ属
32	第 148 図 3	SD6	箸	アスナロ属
33	第 148 図 4	SD6	箸	アスナロ属
34	第 120 図 2	SX41-19	建築部材（溝蓋）	クリ
35	第 129 図 6	N1-W7 Ⅴ層	漆器椀	トチノキ
36	第 129 図 8	N1-W8 Ⅴ層	漆器椀	トチノキ
38	第 151 図 4	SK7	漆器椀	ブナ属
39	第 129 図 10	N1-W8 Ⅴ層	箸	スギ
40	第 151 図 3	SK7	漆器椀	ブナ属
41	第 116 図 1	SX33	漆器椀	ブナ属
42	第 121 図 3	SX41	漆器椀	ブナ属
43	第 129 図 7	N1-W8 Ⅴ層	漆器椀	ブナ属
44	第 129 図 9	N2-W8 Ⅴ層	漆器椀	ブナ属
45	第 151 図 6	SK7	漆器椀	ブナ属
46	第 151 図 6	SK7	漆器椀	ブナ属
47	第 58 図 8	SX3	塗り材片	スギ
48	第 58 図 7	SX3	塗り箸	針葉樹
49	第 130 図 2	SX30	杭	クリ
12-1	-	SX35	炭化材	ブナ属
12-2	-	SX35	炭化材	ブナ属
13-1	-	SX35(17 層)	炭化材	イイギリ
13-2	-	SX35(17 層)	炭化材	イイギリ
15	-	SX46	炭化材	クマシデ属
W22	第 34 図	SX5	根材	トウヒ属
W23	第 144 図	SD2	溝側板	針葉樹
W24	-	S1-W8 Ⅴ層	杭	クリ

第８表　川内Ｂ遺跡の木製品及び炭化材の樹種

散在する環孔材。木部柔組織は周囲状および翼状で、道管の穿孔板は単一である。放射組織は同性で２列である。

3　加工材の樹種からみた植物利用

56 点の試料を同定した結果、17 種類の樹種が確認された（第８表）。そのうちから炭化材及び根材を除いた木製品 50 点（第９表）について見てみると、最も多く確認されたスギは、桶、箸等の木製品や杭、柱根等に見られ、次に確認数の多いブナ属は漆器椀と杭であった。針葉樹は漆器碗や箸とともに杭や加工材等にも使用され、クリは杭、加工材、柱根に使用されていた。以下、箸で確認されたアスナロ属、杭や加工材のコナラ属コナラ節、おなじく杭に利用されたカマツカ属と続く。

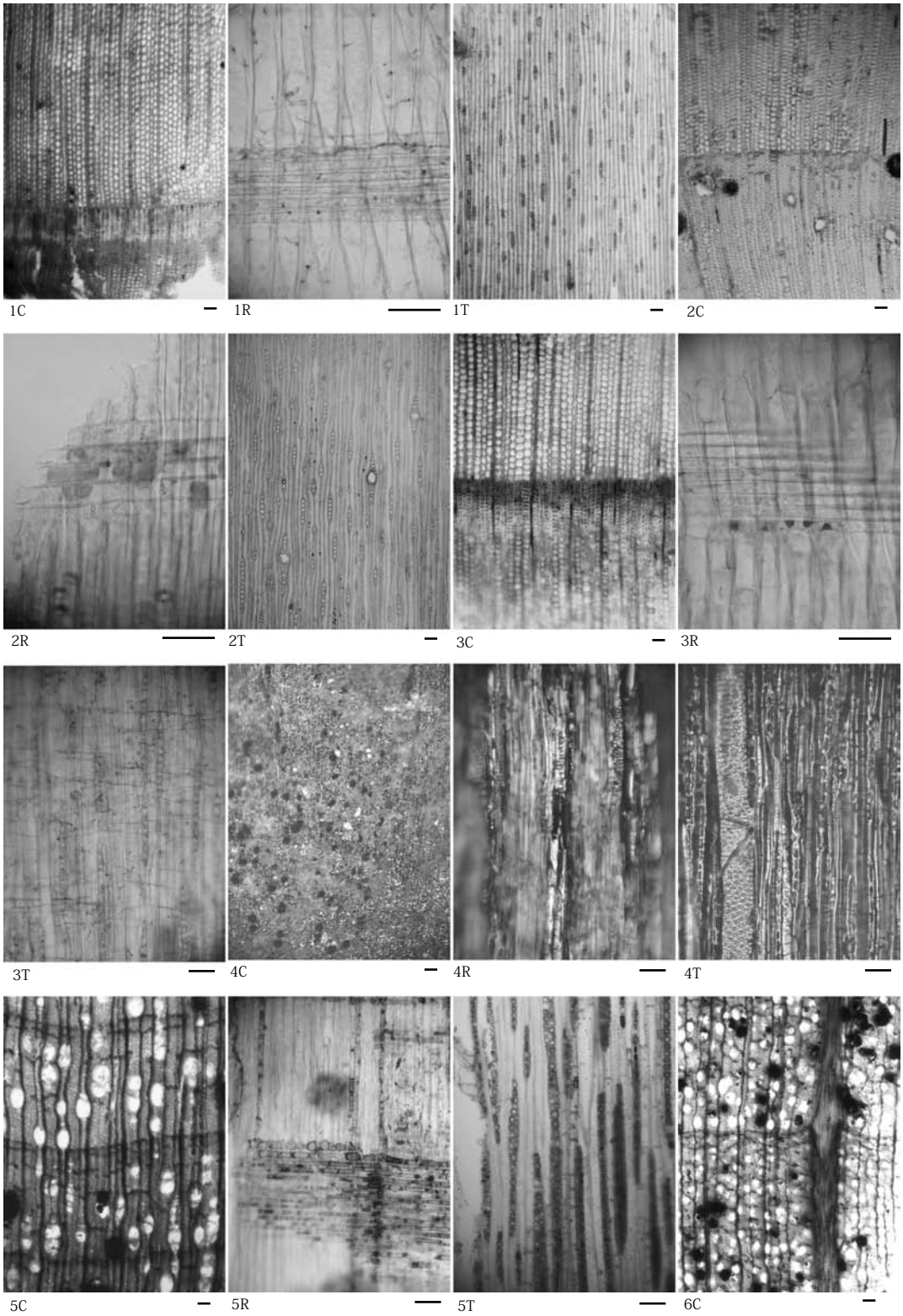
下駄、漆器碗、箸、桶等の製品では、漆器椀のブナ属が８点、ついで５点のスギが多い。また漆器のうち２点はトチノキが使われており、下駄にはハリギリ、桶、しゃもじ、箸にはスギ、針葉樹、アスナロ属が使われているが、そのほかの樹種は使われておらず、用途に応じて厳密な樹種選択がなされていたと考えられる。

これに対し杭や加工材、柱根等では、スギが最も多く６点、以下クリ５点、コナラ属コナラ節、カマツカ属、アサダ、モミ属、サクラ属、トネリコ属と比較的多くの種が使われており、大きな樹種の偏りがみられない。これらの樹種は、現在の青葉山に生育しており、当時も周囲に生育していた木材を利用した可能性が考えられる。

また、炭化材はクマシデ属、ブナ属、イイギリを確認し、これらも青葉山に生育していたとみられ、特にイイギリは種実試料でも確認されていることから、周辺に生育していた樹木の一部を焼いた可能性が考えられる。

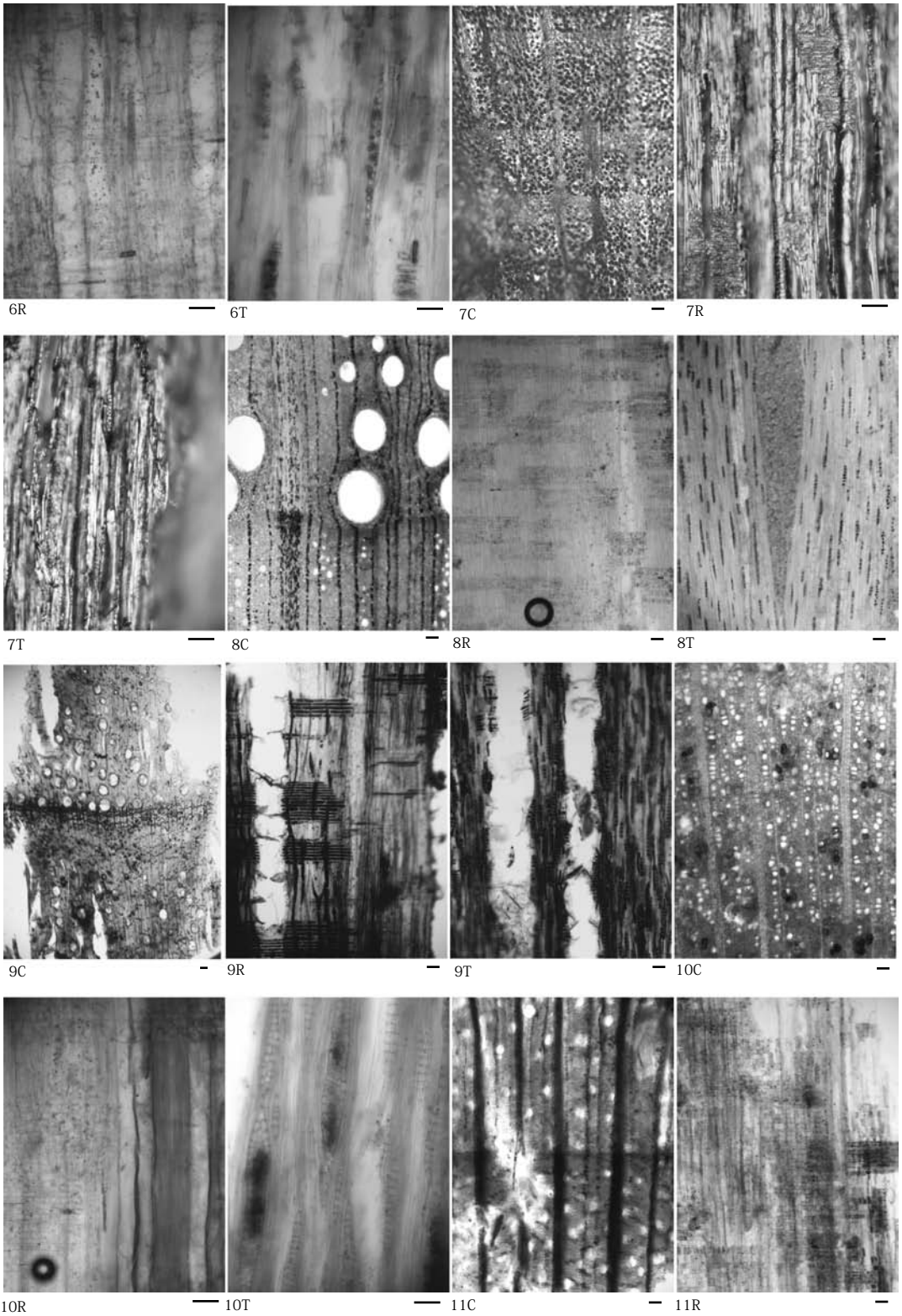
	下駄	漆器椀 塗りもの片	箸 しゃもじ	桶	杭	加工材	柱根	用途不明	計
スギ		1	2	2	3		2	1	11
ブナ属		8				2			10
針葉樹		1	2		3	1			7
クリ					2	1	2		5
アスナロ属			3						3
コナラ属コナラ節					1	2			3
カマツカ					3				3
アサダ					1	1			2
トチノキ		2							2
モミ属					1				1
サクラ属						1			1
ハリギリ	1								1
トネリコ属						1			1
計	1	12	7	2	14	9	4	1	50

第９表　川内Ｂ遺跡出土木製品および加工材の種類別出土数



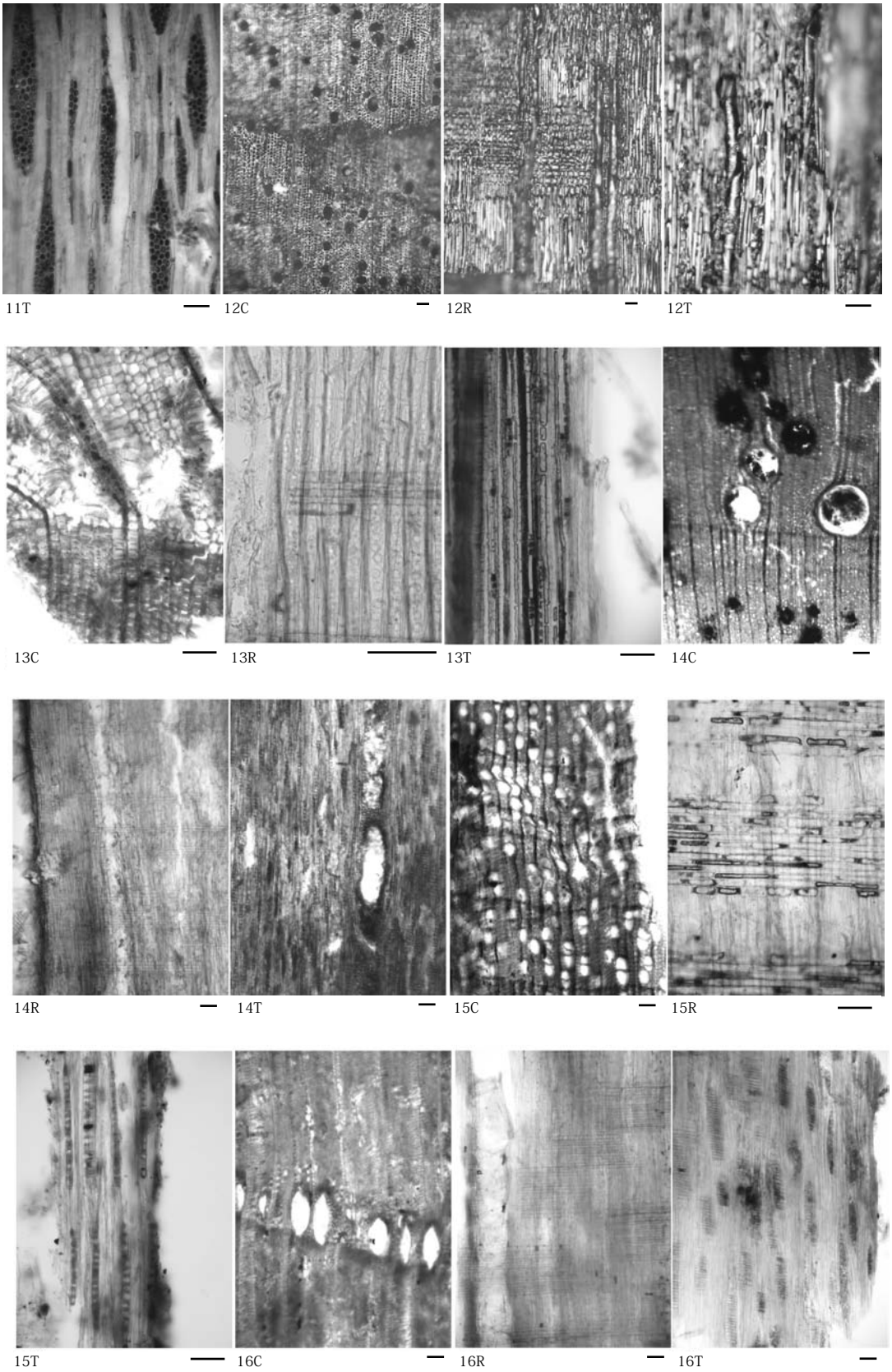
第 257 図　川内 B 遺跡出土木材の顕微鏡写真 (1)

1. スギ (ウ0716)　2. トウヒ属 (306)　3. モミ属 (ト236)　4. クマシデ属炭化材 (No.15)　5. アサダ (ウ1064)
6. ブナ属 (ウ1074)　C: 横断面 , R: 放射断面 , T: 接線断面 , スケールは 0.1mm



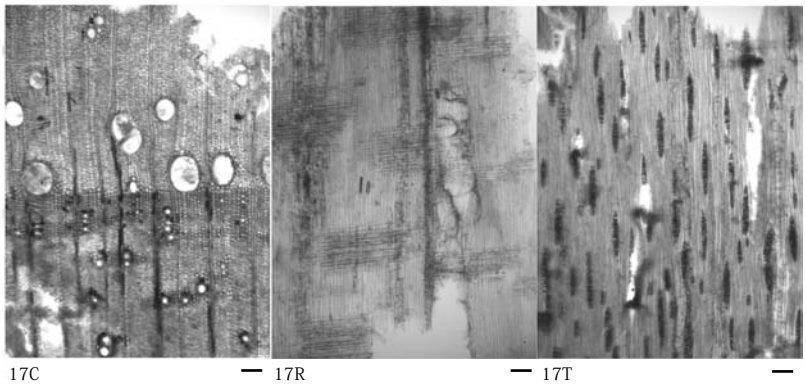
第 258 図　川内 B 遺跡出土木材の顕微鏡写真 (2)

6. ブナ属 (ウ 1074)　7. ブナ属炭化材 (No.12-1)　8. コナラ属コナラ節 (ウ 1065)　9. クリ (ウ 0887)
10. サクラ属 (ウ 1081)　11. カマツカ属 (ウ 0882)　C: 横断面 , R: 放射断面 , T: 接線断面 , スケールは 0.1mm



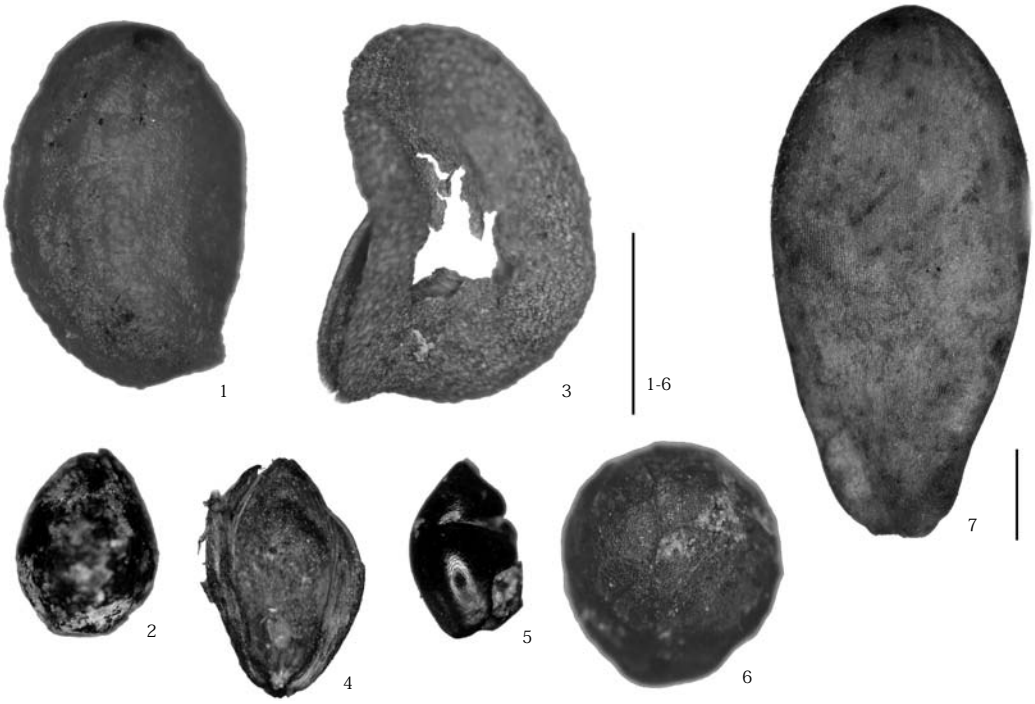
第 259 図　川内 B 遺跡出土木材の顕微鏡写真 (3)

11. カマツカ属 (ウ0882)　12. イイギリ (No.13)　13. アスナロ属 (木 32 箸)　14. コナラ亜属コナラ節 (木 27 半割材)
15. トチノキ (木 35 漆器碗)　16. ハリギリ (木 30 下駄)　C: 横断面 , R: 放射断面 , T: 接線断面 , スケールは 0.1mm



第 260 図　川内 B 遺跡出土木材の顕微鏡写真 (4)

17. カマツカ属 (ウ0882)　C: 横断面 , R: 放射断面 , T: 接線断面 , スケールは 0.1mm



第 261 図　川内 B 遺跡出土種実の顕微鏡写真

1. タラノキ，内果皮　2. イイギリ，種子　3. トウガラシ属，種子　4. ヒエ，頴　5. ヒユ属，潰れ種子
6. イヌコウジュ属，果実　7. キュウリ属メロン仲間，種子　（1 ～ 2 (No.19)，3 ～ 7 (No.21))　スケールは 1mm

第 3 節　川内 B 遺跡出土の動物遺体

中村賢太郎（パレオ・ラボ）

1　はじめに

川内 B 遺跡では、仙台藩上級家臣の屋敷跡の一部と思われる遺構が調査された。ここでは、カマド跡などと考えられる遺構から出土した江戸時代後期（18 世紀後葉～ 19 世紀）の動物遺体を同定した結果を報告する。

標本の閲覧と同定に関して、国立歴史民俗博物館西本豊弘先生、早稲田大学樋泉岳二先生にご協力とご教示をいただいた。

2　試料と方法

試料は台所跡と考えられる区域のカマド跡（SX4、SX21）およびカマド跡以外から採取された動物遺体 12 試料である。試料は、発掘現場で確認され、取上げられていた。12 試料のうち、遺物 No.0819、0894、1035、1038、1110 の 5 試料は土ごと取上げられたままの状態（土付着試料）、それ以外の 7 試料は洗浄と選別が行われていた（選別済試料）。

土付着試料については、パレオ・ラボにおいて 1㎜目の篩上で水洗した。水洗後に回収した試料を、5㎜目の篩により、1㎜以上 5㎜未満と 5㎜以上に分離した。貝類は 5㎜以上から、二枚貝ならば殻頂が残るもの、巻貝ならば 2 巻き以上残るものを選別し、同定と計数の対象とした。ただし、微小な貝類は 5㎜未満でも選別した。魚骨は 1㎜以上を選別し、同定と計数の対象とした。選別済試料については、全て同定と計数の対象とした。同定は肉眼および実体顕微鏡を用いて現生標本との比較により行った。

3　結果

哺乳類、鳥類、魚類、貝類、甲殻類が見られた。同定された分類群を第 10 表に示し、遺構別の出土数を第 11 表に示す。また、各試料についての所見は第 12 表に示す。

a）哺乳類

哺乳類はイノシシの可能性がある左脛骨 1 点が SX7 で見られた。焼けていない。また、齧歯類の咬み痕が見られた。

b）鳥類

鳥類は、不明鳥類の四肢骨が SX21 と P73 で各 1 点見られた。いずれも骨幹のみが残存しており、部位や種は同定できなかった。いずれも焼けていない。

c）魚類

魚類は、タラ科の左歯骨が SX39 で 1 点、スズキ属の第 1 椎骨が SX39 で 1 点、タイ科の鱗が SX35 で 8 点、ウミタナゴ科の腹椎が SX21、ヒラメ科の腹椎が SX39 で 1 点見られた。これらのうち、SX39 から出土したスズキ属第 1 椎骨には鋭利な切断の痕跡が見られた。そ

脊索動物門　Chordata
哺乳綱　Mammalia
イノシシ？　Sus scrofa?
鳥綱　Aves
鳥綱の一種　Aves ord., fam., gen. et sp. Indet.
条鰭綱 Actinopterygii
真骨類　Teleostei
真骨類の一種　Teleostei ord., fam., gen. et sp. Indet.
タラ目　Gadiformes
タラ科　Gadidae
タラ科の一種　Gadidaegen. et sp. indet.
スズキ目　Perciformes
スズキ科　Percichthyidae
スズキ属　Lateolabrax
スズキ属の一種　Lateolobrax sp.
タイ科　Sparidae
タイ科の一種　Sparidae gen. et sp. indet.
ウミタナゴ科　Embiotocidae
ウミタナゴ科の一種　Embiotocidae gen. et sp. indet.
カレイ目　Pleuronectiformes
ヒラメ科　Paralichthyidae
ヒラメ科の一種　Paralichthyidae gen. et sp. indet.
軟体動物門　Mollusca
腹足綱　Gastropoda
腹足綱の一種 (微小巻貝)　Gastropoda ord., fam., gen. et sp. Indet.
吸腔目　Sorbeoconcha
アクキガイ科　Muricidae
アカニシ属　Rapana
アカニシ　Rapana venosa
二枚貝綱　Bivalvia
二枚貝綱の一種　Bivalvia ord., fam., gen. et spp. Indet.
ウグイスガイ目　Pterioida
イタボガキ科　Ostreidae
マガキ　Crassostrea gigas
マルスダレガイ目　Veneroida
シジミ科　Corbiculidae
ヤマトシジミ　Corbicula japonica
マルスダレガイ科　Veneridae
ハマグリ　Meretrix lusoria
節足動物門　Arthropoda
顎脚綱　Mxillopoda
無柄目　Sessilia
フジツボ亜目　Balanina
フジツボ亜目の一種　Balanina fam., gen. et sp. indet.

第 10 表　川内 B 遺跡出土動物遺体種名表

の他に真骨類としか同定できなかったものがSX21とSX39で複数見られた。いずれも焼けていない。

d）貝類

貝類のうち巻貝については、アカニシがSX21とSX39で各１点、陸産と思われる微小な巻貝がSX39で１点、巻貝の蓋の可能性がある破片がSX21で１点見られた。二枚貝については、マガキがSX21で左殻１点、P61で左右各１点、ヤマトシジミがSX21で左殻１点、右殻８点、左右不明11点、ハマグリが出土遺構不明で右殻１点、不明な二枚貝がSX21で２点見られた。

e）甲殻類

甲殻類は、フジツボ類の破片がSX4で見られた。

分類群		部位	左右	カマド		カマド以外					
				SX04	SX21	SX07	SX35	SX39	P61	P73	—
哺乳類	イノシシ？	脛骨	左			1					
鳥類	不明	四肢骨	？		1					1	
魚類	タラ科	歯骨	左					1			
	スズキ属	第１椎骨	—					1			
	タイ科	鱗	—				8				
	ウミタナゴ科	腹椎	—		1						
	ヒラメ科	腹椎	—					1			
	真骨類	前上顎骨	右					1			
		歯	？					1			
		椎骨	—		1						
		鱗	？					11			
		不明	—		+			+			
貝類	アカニシ	—	—		1			1			
	微小巻貝	—	—					1			
	腹足綱？	蓋？	—		1						
	マガキ	—	左		1				1		
			右						1		
	ヤマトシジミ	—	左		1						
			右		8						
			？		11						
	ハマグリ	—	右								1
	不明二枚貝綱	—	？		2						
甲殻類	フジツボ類	—	—	+							

※数量の「＋」は破片多数のため計数していない

第 11 表　動物遺体遺構別出土数

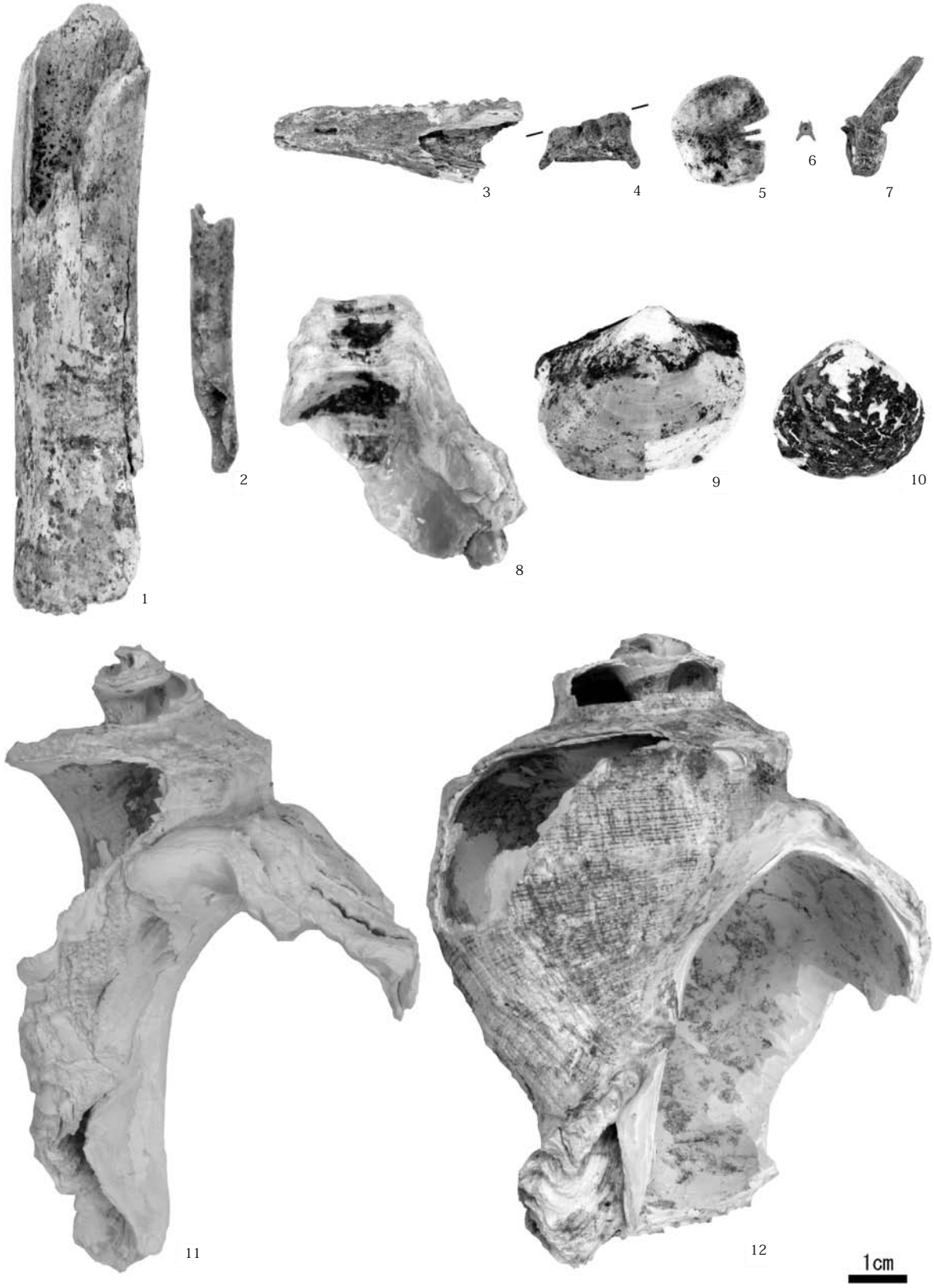
試料 No.	遺物 No.	遺構名	層位	分類群	部位	部分・状態	左右	数量	備考
1	0535	SX7	１層	イノシシ？	脛骨	骨幹	左	1	齧歯類と見られる噛み痕
2	0780	SX4（カマド）	被熱面一括	フジツボ類	—	破片	—	+	
3	0819	SX21	底面付近堆積土 D 断面東側端部付近	真骨類	不明	破片	？	+	
				ヤマトシジミ	—	殻皮残る	左	1	
							右	5	
							？	6	
4	0843	P73	Ⅳ層一括　擂鉢	鳥綱	四肢骨	骨幹	？	1	
5	0894	SX21	１層 B 断面西側	ウミタナゴ科	腹椎	完存	—	1	
				真骨類	不明	破片	—	+	
				マガキ	—	破片	左	1	
6	0946	P61	Ⅲ d 層直下一括	マガキ	—	破片	左	1	
							右	1	
7	0993	SX35	10 層上層一括 B 断面南側 C 断面交差部	タイ科	鱗	ほぼ完存	？	8	
8	1026	SX21	—	アカニシ	—	殻軸と殻頂周囲の体層	—	1	
9	1035	—	整地１層２下位層	ハマグリ	—	破片	右	1	
10	1038	SX39	最上層 遺構直上	タラ科	歯骨	前端と後端欠く	左	1	
				スズキ属	第１椎骨	半欠	—	1	切断の痕
				ヒラメ科	腹椎	完存	—	1	
				真骨類	前上顎骨	破片	右	1	小型
					歯	完存	？	1	
					鱗	破片	？	11	
					不明	破片	？	+	
				アカニシ	—	ほぼ完存	—	1	孔あり
				微小巻貝	—	完存	—	1	
11	1058	SX21	版築２層上一括 南側付近	鳥綱	四肢骨	骨幹	？	1	
12	1110	SX21	D ベルト（貝）	真骨類	椎骨	破片	—	1	
				ヤマトシジミ	—	殻皮残る	右	3	
							？	5	
				二枚貝綱	—	表面摩耗	？	2	
					蓋？	破片	—	1	

※数量の「＋」は破片多数のため計数していない

第 12 表　動物遺体観察表

4　考察

上に示した同定結果からは、江戸時代後期（18 世紀後葉～ 19 世紀）における仙台藩上級家臣の屋敷で消費された動物質食料について知ることができる。イノシシの可能性がある陸生哺乳類の出土からは獣肉食の存在を指摘できる。鳥肉も食べられていたと考えられる。魚類では、タラ科（マダラ、スケソウダラなど）、スズキ属（スズキ、ヒラスズキなど）、タイ科（マダイ、クロダイなど）、ウミタナゴ科（ウミタナゴ、オキタナゴなど）、ヒラメ科（ヒラメ、タマガンゾウビラメなど）など海産魚類が食べられていたと考えられる。なお、スズキ属の第１椎骨には、鋭利な刃物によると見られる切断の痕があり、スズキ属は頭部を切り落としてから調理されたと考えられる。貝類ではアカニシ、マガキ、ハマグリといった海産貝類の他、河口近くなど汽水域に生息するヤマトシジミが食べられていたと考えられる。なお、ここでは同定と報告の対象とならなかったが、アワビやホタテの貝殻も出土している。その他、フジツボ類については、食用可能ではあるが、マガキに付着していたものの可能性もあり、実際に食用とされていたかどうか判断できない。



第 262 図　川内 B 遺跡出土の動物遺体

1. イノシシ？左脛骨 (0535)　2. 鳥類四肢骨 (0843)　3. タラ科左歯骨 (1038)　4. スズキ属第 1 椎骨（1038)　5. タイ科鱗 (0993)　6. ウミタナゴ科腹椎 (0894)　7. ヒラメ科腹椎 (1038)　8. マガキ左殻 (0894)　9. ハマグリ右殻 (1035)　10. ヤマトシジミ右殻（0819)　11. アカニシ（1026)　12. アカニシ (1038)

第 7 章　出土遺物と検出遺構について

第 1 節　出土遺物について

本調査区からは陶器、磁器、瓦質土器、土師質土器、土製品、石製品、金属製品、木製品、瓦、その他が出土している。出土遺物は、同一個体等を確認し、接合した後の総数で 22,614 点を数える。それらを各基本層及び基本層上面検出遺構からの出土遺物として集計した（第 13 表）。本節では、川内 B 遺跡の出土遺物についてその様相を遺構の堆積層とともに概観していきたい。

	陶器	磁器	瓦質土器	土師質土器	土製品	石器・石製品	金属製品	木製品	瓦	自然遺物	縄文土器	その他	合計
Ⅱ層中出土	3396	3387	148	303	9	14	178	10	817	22	11	26	8321
Ⅲ層上面検出遺構出土	390	216	21	47	4	4	10	3	56	3	0	7	761
Ⅲ層中出土	3697	2915	348	379	29	20	92	6	458	9	16	13	7982
Ⅳ層上面検出遺構出土	1125	485	86	233	10	14	93	34	230	17	12	17	2356
Ⅳ層中出土	1054	870	69	210	2	9	64	23	264	10	14	6	2595
Ⅳ -2 層上面検出遺構出土	7	6	0	4	0	0	0	10	2	0	0	5	34
Ⅳ -2 層中出土	10	9	0	4	0	0	2	14	0	1	1	0	41
Ⅴ層上面検出遺構出土	30	26	2	9	0	0	2	14	13	0	8	1	105
Ⅴ層中出土	73	92	2	34	0	7	7	49	53	13	11	0	341
Ⅵ層上面検出遺構出土	1	1	0	0	0	0	0	49	2	0	0	0	53
Ⅵ層中出土	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3
Ⅶ層上面検出遺構出土	5	0	0	4	0	0	0	3	6	0	4	0	22
合計	9790	8007	676	1228	54	68	448	215	1901	75	77	75	22614

第 13 表　川内 B 遺跡出土遺物数量一覧表

1　陶磁器

(1) 出土層別産地分類

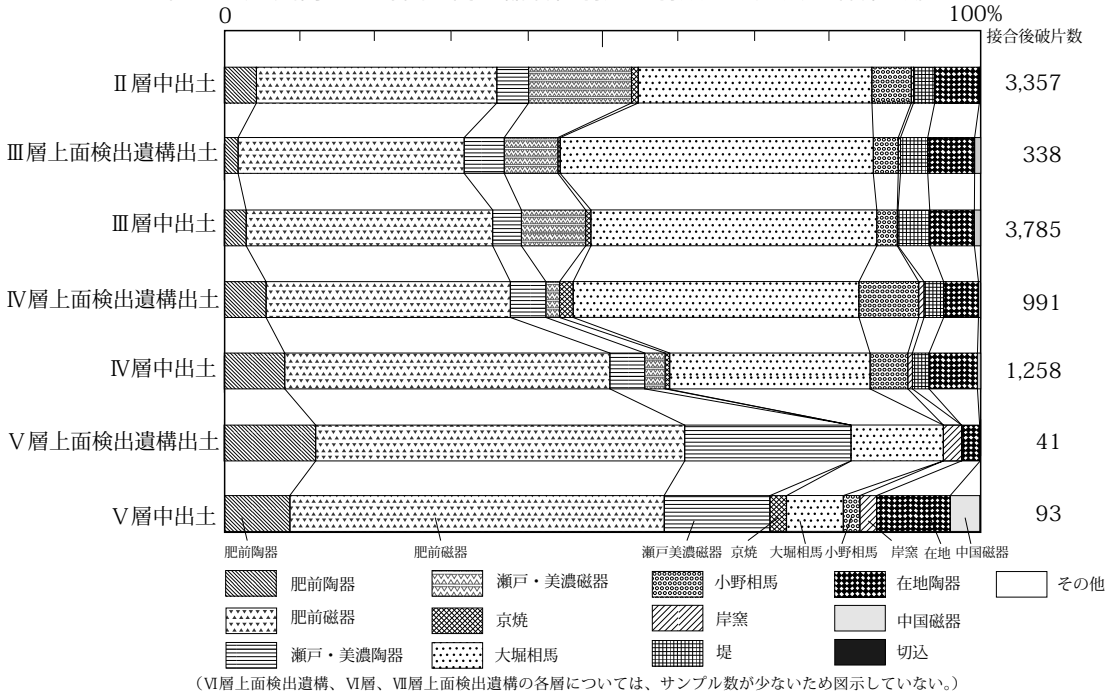
陶磁器は 16 世紀後葉～ 19 世紀後葉までの各時期のものが出土しており、接合後の破片数は陶器 9,790 点、磁器 8,007 点、合計で 17,797 点を数える。ここから、近現代の所産とわかる遺物及び小片で産地や時期が判別できないものを除いた 9,872 点について出土層位別産地別に分類して集計した（第 14 表）。なお、当遺跡の基本層のうちⅢ・Ⅳ層は、調査区外から搬入された客土であると考えられ、当該層出土遺物は、必ずしもその土層の堆積時期を表すものとは言い難い。とりわけ古い遺物は混入する可能性が高いため、各基本層出土の陶磁器のうち最も新しいものの時期が、その土層の堆積した時期の下限であると考えた。そのうえで、各基本層から出土した陶磁器の組成はおおよその傾向を示すものとして捉えた。また、Ⅳ -2 層出土遺物は、同時期と考えられるⅣ層に含めた。

Ⅵ層上面検出遺構及びⅥ層、Ⅶ層上面検出遺構出土の陶磁器は出土点数が少ないためグラフに表さなかったが、当該土層からは瀬戸・美濃産の陶器、肥前産及び中国産の磁器、岸窯産の陶器が確認されている。

Ⅴ層では肥前産が陶磁器で 50% 以上を占め、その他は瀬戸・美濃産と大堀相馬産の陶器が多くみられる。これ以降、肥前産の陶磁器は大きな割合を占めながらも、徐々に減少して行き、代わりに大堀相馬産陶器の占める割合が大きくなっていく。また、瀬戸・美濃産では、陶器がⅤ層及びⅤ層上面検出遺構では比較的大きな割合を占めるが、Ⅳ層以上の堆積層では一定量の割合を占めるものの減少していき、代わりに磁器の割合が少しずつ増加する。近傍の産地では、大堀相馬の他に小野相馬産の陶器が見られ、Ⅳ層及びⅣ層上面検出遺構からの出土量が比較的多いが、Ⅲ層ではその割合が減少する。また、堤産の陶器が少しづつ割合を増加させていることが読み取れる。そのほかには、Ⅲ層で切込産の磁器が 5 点出土した。また、中国産の磁器は数が少ないながらも一定量出土している。

産地　種別 / 出土層	肥前		瀬戸・美濃		京	相馬		岸窯	堤	在地	中国	その他	切込	合計
	陶器	磁器	陶器	磁器	京	大堀相馬	小野相馬				磁器	陶器	磁器	
Ⅱ層中出土	135	1072	135	506	31	1004	171	9	92	198	0	4	0	3357
割合（%）	4.0	31.9	4.0	15.1	0.9	29.9	5.1	0.3	2.7	5.9	0.0	0.1	0.0	
Ⅲ層上面検出遺構出土	6	101	18	24	1	140	11	1	12	21	3	0	0	338
割合（%）	1.8	29.9	5.3	7.1	0.3	41.4	3.3	0.3	3.6	6.2	0.9	0.0	0.0	
Ⅲ層中出土	111	1215	143	321	37	1443	102	5	157	243	0	3	5	3785
割合（%）	2.9	32.1	3.8	8.5	1.0	38.1	2.7	0.1	4.1	6.4	0.0	0.1	0.1	
Ⅳ層上面検出遺構出土	54	320	46	18	18	375	78	7	26	45	3	1	0	991
割合（%）	5.5	32.3	4.6	1.8	1.8	37.8	7.9	0.7	2.6	4.5	0.3	0.1	0.0	
Ⅳ層中出土	101	539	58	34	8	334	63	7	29	81	2	2	0	1258
割合（%）	8.0	42.8	4.6	2.7	0.6	26.6	5.0	0.6	2.3	6.4	0.2	0.2	0.0	
Ⅴ層上面検出遺構出土	5	20	9	0	0	5	0	1	0	1	0	0	0	41
割合（%）	12.2	48.8	22.0	0.0	0.0	12.2	0.0	2.4	0.0	2.4	0.0	0.0	0.0	
Ⅴ層中出土	8	46	13	0	2	7	2	2	0	9	4	0	0	93
割合（%）	8.6	49.5	14.0	0.0	2.2	7.5	2.2	2.2	0.0	9.7	4.3	0.0	0.0	
Ⅵ層上面検出遺構出土	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	2
割合（%）	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	50.0	0.0	0.0	50.0	0.0	0.0	
Ⅵ層中出土	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
割合（%）	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
Ⅶ層上面検出遺構出土	0	1	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
割合（%）	0.0	20.0	80.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
合計	420	3314	428	903	97	3308	427	33	316	598	13	10	5	9872

第 14 表　川内 B 遺跡出土陶磁器層位別産地別数量一覧表　（層位順）



（Ⅵ層上面検出遺構、Ⅵ層、Ⅶ層上面検出遺構の各層については、サンプル数が少ないため図示していない。）

第 263 図　川内 B 遺跡出土陶磁器層位別産地別割合

（2）機能別産地分類

本調査区出土の陶磁器類を、その機能から、食膳具、喫茶飲酒具、調理具、灯明具、貯蔵具、化粧道具、信仰・調度具、暖房具等に分類し、産地別に破片数を集計すると以下のとおりになる（第 15 表）。なお、ここでは、土師質土器の皿、灯明皿、瓦質土器の蚊遣りや火鉢等も集計に加えた。

食膳具の碗や皿は、肥前及び瀬戸・美濃産の陶磁器、大堀相馬、小野相馬、堤等多くの産地のものが見られる。そのなかで、京焼は碗のみで皿や平碗は見られず、中国産磁器や切込は皿のみで碗は見られない。鉢では、磁器は肥前産が多いが、瀬戸・美濃産のものも見ることができる。陶器は、肥前産、瀬戸・美濃産、大堀相馬産、在地産が見られる。

喫茶・飲酒具についても概ね食膳具と同様の傾向を示し、磁器では肥前と瀬戸・美濃産、陶器では肥前、瀬戸・美濃、大堀相馬、在地産が見られる。これらに加えて 19 世紀以降は堤産が現れる。また、土瓶はそのほとんどが大堀相馬産で占められる。喫煙具の灰落しは、肥前産磁器 3 点、大堀相馬産が 1 点の計 4 点出土しているが、そのほかに、磁器の皿の口縁部に敲打痕や煤のようなものが見られるものが数点見られ（第 241 図 6、第 242 図 4）、

		食膳具				喫茶・飲酒具・喫煙				調理具				灯明具				貯蔵		化粧道具			信仰・調度具				暖房具		その他	合計
		碗	皿	向付	鉢	徳利	杯	土瓶急須	灰落し	片口鉢	擂鉢	鍋	焙烙	油受け皿	秉燭	灯明皿	油徳利	甕	壺	紅猪口	瓶盥	油壺	仏飯器	香炉	仏花器	豆甕	火鉢	蚊遣り		
磁器	肥前・波佐見	1669	1043	70	54	27	89	2	5											7	3	4	3	57					281	3314
	瀬戸・美濃	678	122		13	8	41	8																1					32	903
	切込		5																											5
	中国		11																										2	13
陶器	肥前・唐津	243	40	3	88	2	1	1																4					38	420
	瀬戸・美濃	118	87	4	63	20	7	8		1	33	3		2							1			5					76	428
	大堀相馬	1472	244		49	27	20	1186	1	4	4	12		14	1			3	10		1		13	28	2	1			216	3308
	小野相馬	24	354					1		24								1						5	3				15	427
	堤	1			1	2		13			21	4	183	1	4		1	42	6								2		35	316
	岸窯										25					1								4					3	33
	在地		9		34			8		3	329	26			2	3		81											103	598
	京	73																											24	97
	丹波										3																			3
その他		7																												7
陶磁器小計		4285	1915	77	302	86	158	1227	6	32	415	45	183	17	7	4	1	127	16	7	5	4	16	104	5	1	2	0	825	9872
土師質土器			841													96														937
瓦質土器																											269	103		372
合　　計		4285	2756	77	302	86	158	1227	6	32	415	45	183	17	7	100	1	127	16	7	5	4	16	104	5	1	271	103	825	11181

第 15 表　出土陶磁器産地別機能別数量表

表には現れないが、皿等を灰落しに転用している可能性も考えられる。

調理具は陶器のみで、在地産や堤産が大部分を占める。特に擂鉢は在地産が、焙烙は堤産がそのほとんどを占め、瀬戸・美濃や大堀相馬、小野相馬、岸窯等が少量であるが見られる。

灯明具も調理具と同様、磁器製のものは見られず、大堀相馬、堤、在地産の陶器の製品が出土しているが、土師質土器の灯明皿が圧倒的に多く、油受け皿等は大堀相馬産が、秉燭は堤産が比較的多く見られる。

貯蔵具の甕、壺についても調理具や灯明具と同様に磁器は見られず、在地産と堤産陶器が主体を占める。

化粧道具及び信仰・調度具では、肥前産の磁器がともに卓越し、陶器では瀬戸・美濃産及び大堀相馬産が主体を占めている。

(3) 器種別の変遷

食膳具の碗、皿、鉢、喫茶・飲酒具の杯、土瓶、調理具の擂鉢、香炉について、それぞれ基本層及び各層上面遺構で集計した（第 16 表）。

碗は、Ⅵ層以下についてはサンプル数が少なすぎるので、Ⅴ～Ⅱ層出土遺物で検討した。Ⅴ層では、肥前産の磁器が最も多く 57.9% を占める。これに対し大堀相馬産 15.8%、肥前産陶器が 15.8% である。Ⅳ層上面検出遺構、Ⅲ層上面検出遺構では大堀相馬産が 48.8%、44.3% と最も多く、肥前磁器の 32.4%、37.7% を凌駕する。Ⅲ層及びⅡ層段階では、瀬戸・美濃産磁器の割合も多くなり、幕末から近代にかけて肥前産磁器から大堀相馬産、瀬戸・美濃産へとその主体が移っていく傾向が見られる。

皿でも、肥前産磁器から瀬戸・美濃産磁器への変遷が見られるが、Ⅶ層上面検出遺構及びⅥ層では瀬戸・美濃産の陶器が、Ⅵ層上面検出遺構では中国産磁器が見られ、Ⅳ層段階以降は小野相馬産が大堀相馬産とともに比較的多く見られる。またⅤ～Ⅲ層段階で土師質土器のかわらけが一定量を占める。また、鉢は、瀬戸･美濃産及び肥前（唐津）産の陶器から肥前産及び瀬戸・美濃産の磁器、大堀相馬産への変遷が読み取れる。

喫茶・飲酒具である徳利と杯は、肥前産及び瀬戸・美濃産の磁器そして大堀相馬産のものが見られるが、Ⅲ層遺構段階で出土数が激減する。そしてⅡ層で出土が見られる。この傾向は、このほかに香炉等でも見られる。これは、近世を通じて武家屋敷であった当遺跡が、明治以降、仙台鎮台、そして第二師団の倉庫として利用されるようになり、土地利用形態が変わったためと推測される。

調理具の擂鉢は、在地産が圧倒的に多く、Ⅴ層上面検出遺構段階を除いて 6 割以上を占める。在地産以外では、瀬戸・美濃産及び岸窯産が見られ、Ⅳ層段階以降堤産が見られるようになる。生産年代を見てみると、17 世紀代

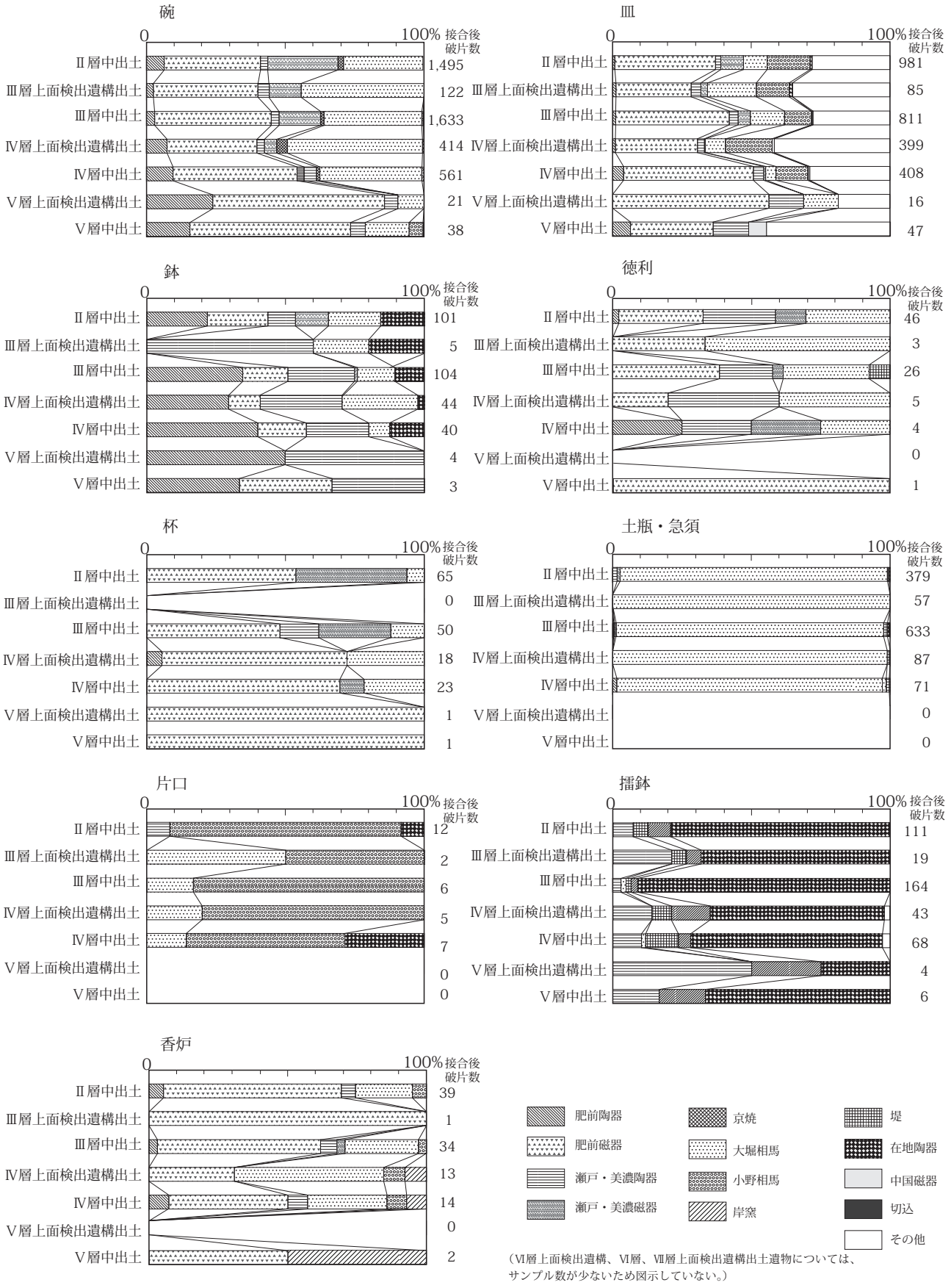
に岸窯産、17 世紀後葉～ 18 世紀前葉で瀬戸・美濃産及び丹波産のものが見られ、18 世紀以降は在地産が主体となり、19 世紀に入ってこれに堤産が加わるといった傾向が窺がえる。

	碗										皿											鉢						
機能別 産地別表	肥前陶器	肥前磁器	瀬戸・美濃陶器	瀬戸・美濃磁器	京焼	大堀相馬	小野相馬	堤	その他	合計	肥前陶器	肥前磁器	瀬戸・美濃陶器	瀬戸・美濃磁器	大堀相馬	小野相馬	在地	切込	中国	かわらけ	合計	肥前陶器	肥前磁器	瀬戸・美濃陶器	瀬戸・美濃磁器	大堀相馬	在地	合計
Ⅱ層中出土	95	517	39	377	30	427	6	0	4	1495	8	356	19	80	83	152	7	0	0	276	981	22	22	10	12	19	16	101
	6.4	34.7	2.6	25.3	2.0	28.6	0.4	0.0	0.3		0.8	36.3	1.9	8.2	8.5	15.5	0.7	0.0	0.0	28.1		21.8	21.8	9.9	11.9	18.8	15.8	
Ⅲ層上層検出遺構出土	3	46	5	14	0	54	0	0	0	122	1	23	3	2	15	10	1	0	0	30	85	0	0	3	0	1	1	5
	2.5	37.7	4.1	11.5	0.0	44.3	0.0	0.0	0.0		1.2	27.1	3.5	2.4	17.6	11.8	1.2	0.0	0.0	35.3		0.0	0.0	60.0	0.0	20.0	20.0	
Ⅲ層中出土	49	685	46	244	20	575	11	0	3	1633	8	332	26	36	100	78	0	5	0	226	811	36	17	25	1	14	11	104
	3.0	42.0	2.8	15.0	1.2	35.3	0.7	0.0	0.2		1.0	40.9	3.2	4.4	12.3	9.6	0.0	0.6	0.0	27.9		34.6	16.3	24.0	1.0	13.5	10.6	
Ⅳ層上層検出遺構出土	31	134	11	18	16	202	2	0	0	414	4	118	10	1	29	67	0	0	3	167	399	13	5	13	0	12	1	44
	7.5	32.4	2.7	4.3	3.9	48.8	0.5	0.0	0.0		1.0	29.6	2.5	0.3	7.3	16.8	0.0	0.0	0.8	41.9		29.5	11.4	29.5	0.0	27.3	2.3	
Ⅳ層中出土	54	251	14	25	7	206	3	1	0	561	16	191	15	3	15	47	1	0	2	118	408	16	7	9	0	3	5	40
	9.6	44.7	2.5	4.5	1.2	36.7	0.5	0.2	0.0		3.9	46.8	3.7	0.7	3.7	11.5	0.2	0.0	0.5	28.9		40.0	17.5	22.5	0.0	7.5	12.5	
Ⅴ層上層検出遺構出土	5	13	1	0	0	2	0	0	0	21	0	9	2	0	2	0	0	0	0	3	16	0	2	2	0	0	0	4
	23.8	61.9	4.8	0.0	0.0	9.5	0.0	0.0	0.0		0.0	56.3	12.5	0.0	12.5	0.0	0.0	0.0	0.0	18.8		0.0	50.0	50.0	0.0	0.0	0.0	
Ⅴ層中出土	6	22	2	0	0	6	2	0	0	38	3	14	6	0	0	0	0	0	3	21	47	1	1	1	0	0	0	3
	15.8	57.9	5.3	0.0	0.0	15.8	5.3	0.0	0.0		6.4	29.8	12.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.4	44.7		33.3	33.3	33.3	0.0	0.0	0.0	
Ⅵ層上層検出遺構出土	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0		0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0
	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0			0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0								
Ⅵ層中出土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0		0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0
											0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0			0.0								
Ⅶ層上層検出遺構出土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0		0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0
											0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0			0.0								
合計	243	1669	118	678	73	1472	24	1	7	4285	40	1043	87	122	244	354	9	5	9	841	2754	88	54	63	13	49	34	200

	徳利							杯						土瓶・急須								
機能別 産地別表	肥前陶器	肥前磁器	瀬戸・美濃陶器	瀬戸・美濃磁器	大堀相馬	堤	合計	肥前陶器	肥前磁器	瀬戸・美濃陶器	瀬戸・美濃磁器	大堀相馬	合計	肥前陶器	肥前磁器	瀬戸・美濃陶器	瀬戸・美濃磁器	大堀相馬	小野相馬	堤	在地	合計
Ⅱ層中出土	1	14	12	5	14	0	46	0	35	0	26	4	65	0	0	6	4	365	0	2	2	379
	2.2	30.4	26.1	10.9	30.4	0.0		0.0	53.8	0.0	40.0	6.2		0.0	0.0	1.6	1.1	96.3	0.0	0.5	0.5	
Ⅲ層上層検出遺構出土	0	0	0	1	2	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	57	0	0	0	57
	0.0	0.0	0.0	33.3	66.7	0.0		0.0	0	0	0	0		0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	
Ⅲ層中出土	0	10	5	1	8	2	26	0	24	7	13	6	50	0	2	2	4	610	0	9	6	633
	0.0	38.5	19.2	3.8	30.8	7.7		0.0	48.0	14.0	26.0	12.0		0.0	0.3	0.3	0.6	96.4	0.0	1.4	0.9	
Ⅳ層上層検出遺構出土	0	1	2	0	2	0	5	1	12	0	0	5	18	0	0	0	0	86	0	1	0	87
	0.0	20.0	40.0	0.0	40.0	0.0		5.6	66.7	0.0	0.0	27.8		0.0	0.0	0.0	0.0	98.9	0.0	1.1	0.0	
Ⅳ層中出土	1	0	1	1	1	0	4	0	16	0	2	5	23	1	0	0	0	68	1	1	0	71
	25.0	0.0	25.0	25.0	25.0	0.0		0.0	69.6	0.0	8.7	21.7		1.4	0.0	0.0	0.0	95.8	1.4	1.4	0.0	
Ⅴ層上層検出遺構出土	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
								0.0	100													
Ⅴ層中出土	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		100																				
Ⅵ層上層検出遺構出土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅵ層中出土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅶ層上層検出遺構出土	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		100																				
合計	2	27	20	8	27	2	86	1	89	7	41	20	158	1	2	8	8	1186	1	13	8	1227

	片口					擂鉢							香炉							
機能別 産地別表	瀬戸・美濃陶器	大堀相馬	小野相馬	在地	合計	瀬戸・美濃陶器	大堀相馬	堤	岸窯	在地	丹波	合計	肥前陶器	肥前磁器	瀬戸・美濃陶器	瀬戸・美濃磁器	大堀相馬	小野相馬	岸窯	合計
Ⅱ層中出土	1	0	10	1	12	8	0	6	9	88	0	111	2	25	2	0	8	2	0	39
		0.0	83.3	8.3		7.2	0.0	5.4	8.1	79.3	0.0		5.1	64.1	5.1	0.0	20.5	5.1	0.0	
Ⅲ層上層検出遺構出土	0	1	1	0	2	4	0	1	1	13	0	19	0	1	0	0	0	0	0	1
	0.0	50.0	50.0	0.0		21.1	0.0	5.3	5.3	68.4	0.0		0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
Ⅲ層中出土	0	1	5	0	6	5	3	3	4	149	0	164	1	20	2	1	9	1	0	34
	0.0	16.7	83.3	0.0		3.0	1.8	1.8	2.4	90.9	0.0		2.9	58.8	5.9	2.9	26.5	2.9	0.0	
Ⅳ層上層検出遺構出土	0	1	4	0	5	6	0	3	6	27	1	43	0	4	0	0	7	1	1	13
	0.0	20.0	80.0	0.0		14.0	0.0	7.0	14.0	62.8	2.3		0.0	30.8	0.0	0.0	53.8	7.7	7.7	
Ⅳ層中出土	0	1	4	2	7	7	1	8	3	47	2	68	1	6	1	0	4	1	1	14
	0.0	14.3	57.1	28.6		10.3	1.5	11.8	4.4	69.1	2.9		7.1	42.9	7.1	0.0	28.6	7.1	7.1	
Ⅴ層上層検出遺構出土	0	0	0	0	0	2	0	0	1	1	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0
						50.0	0.0	0.0	25.0	25.0	0.0									
Ⅴ層中出土	0	0	0	0	0	1	0	0	1	4	0	6	0	1	0	0	0	0	1	2
						16.7	0.0	0.0	16.7	66.7	0.0			50					50	
Ⅵ層上層検出遺構出土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
																			100	
Ⅵ層中出土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅶ層上層検出遺構出土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	1	4	24	3	32	33	4	21	25	329	3	415	4	57	5	1	28	5	4	104

第 17 表　機種・機能・層位別陶磁器集計表



第 264 図　器種・機能別層位毎の陶磁器産地割合

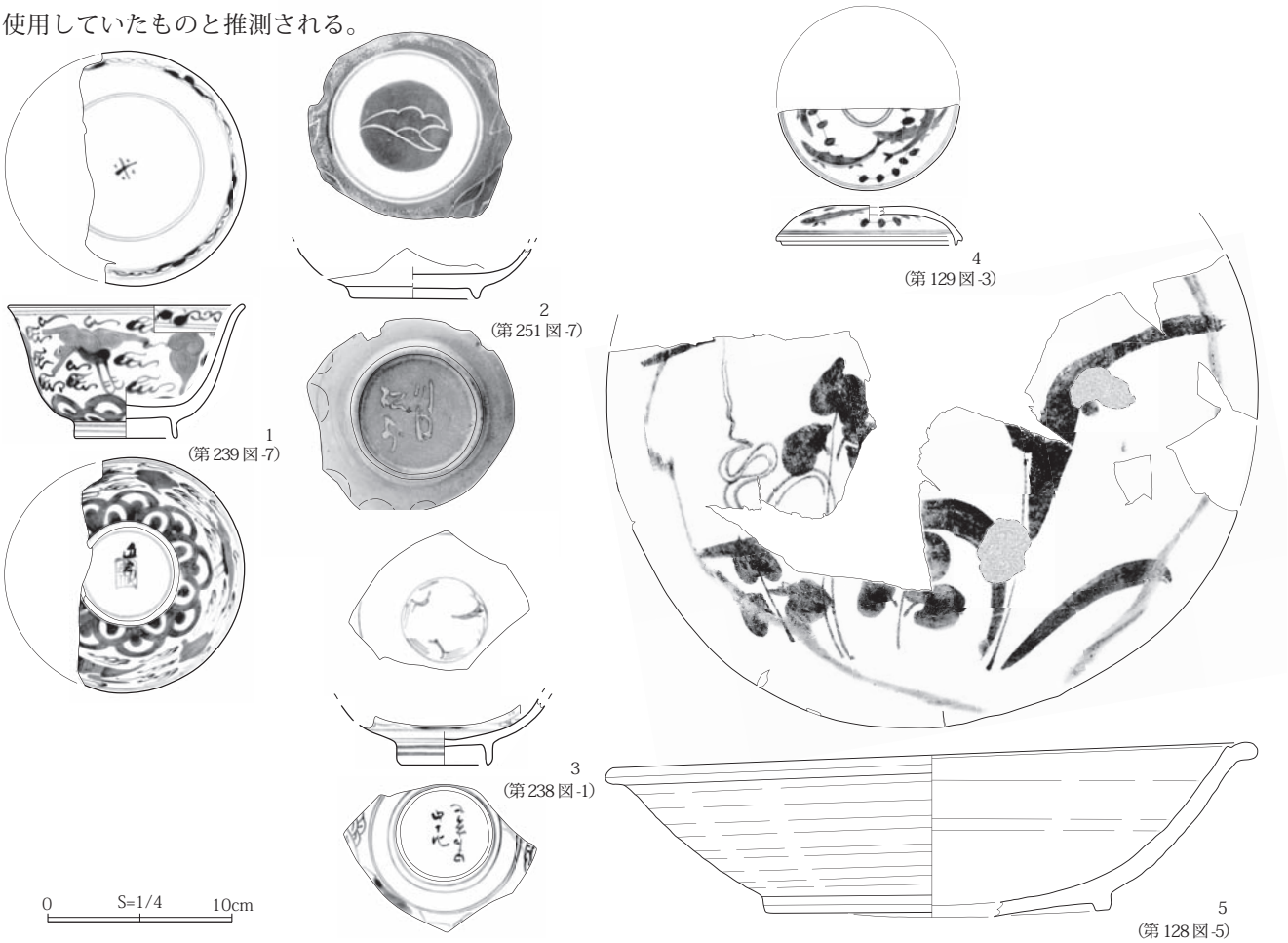
(4) 補修痕のある陶磁器について

今回調査で、焼継による補修痕のある磁器が 16 点確認された。内訳は肥前産の碗 5 点、皿が 6 点、鉢と段重が 1 点ずつ、瀬戸・美濃産の端反碗が 2 点、切込産の皿 1 点である。生産年代を見ると、18 世紀前葉～中葉が 1 点、18 世紀中葉が 1 点、18 世紀後葉～ 19 世紀代のものが 14 点であり、18 世紀後葉～ 19 世紀代のものが大部分を占める。

焼継は、江戸市中では 1790 年（寛政 2 年）ころから普及したといわれており（長佐古 2001）、当該時期には仙台藩内においても行われていたものと考えられるが、今回確認された焼継痕のある遺物は、いずれもⅣ層上面検出遺構もしくはⅢ層中からの出土であり年代的にも概ね一致する。

これらの 16 点の遺物のうち 3 点は高台内に文字が見られ、それぞれ「近衛」（第 265 図 -1）、「川内松前」（第 265 図 -2）、「四百六十七□十四」（第 265 図 -3）と読める。これらの文字は焼継剤に赤色顔料を加えたもので、焼継師が発注者を識別するためのものと推測されている（長佐古 2001）。今回確認された「近衛」や「川内松前」は人名と考えられ、特に「川内松前」は、文化 9 ～ 14 年（1812 ～ 1817）の『仙台城下絵図』（第 4 図 -3）と安政 3 ～ 6 年（1856 ～ 1859）『安政補正改革仙府絵図』（第 4 図 -4）の、今回調査区に該当する屋敷地内に、「松前和泉」、「松前主水」等の氏名が見られ、当該時期に当地に居住していた松前氏の所在地と姓名をさすものと考えられる。

そのほかに、18 世紀以前の遺物で、焼継でなく漆による補修痕のある遺物が 3 点確認された。陶器で 17 世紀前葉の瀬戸・美濃産の鉢（第 265 図 -5）、磁器では 18 世紀代の肥前産の蓋ものの蓋（第 265 図 -4）、その他に 17 世紀後葉～ 18 世紀前葉のものと思われる皿が出土している。焼継が普及する以前も、破損した陶磁器を修理して使用していたものと推測される。



第 265 図　高台内に文字が見られる焼継痕のある磁器と漆継痕のある陶磁器

2　瓦質土器

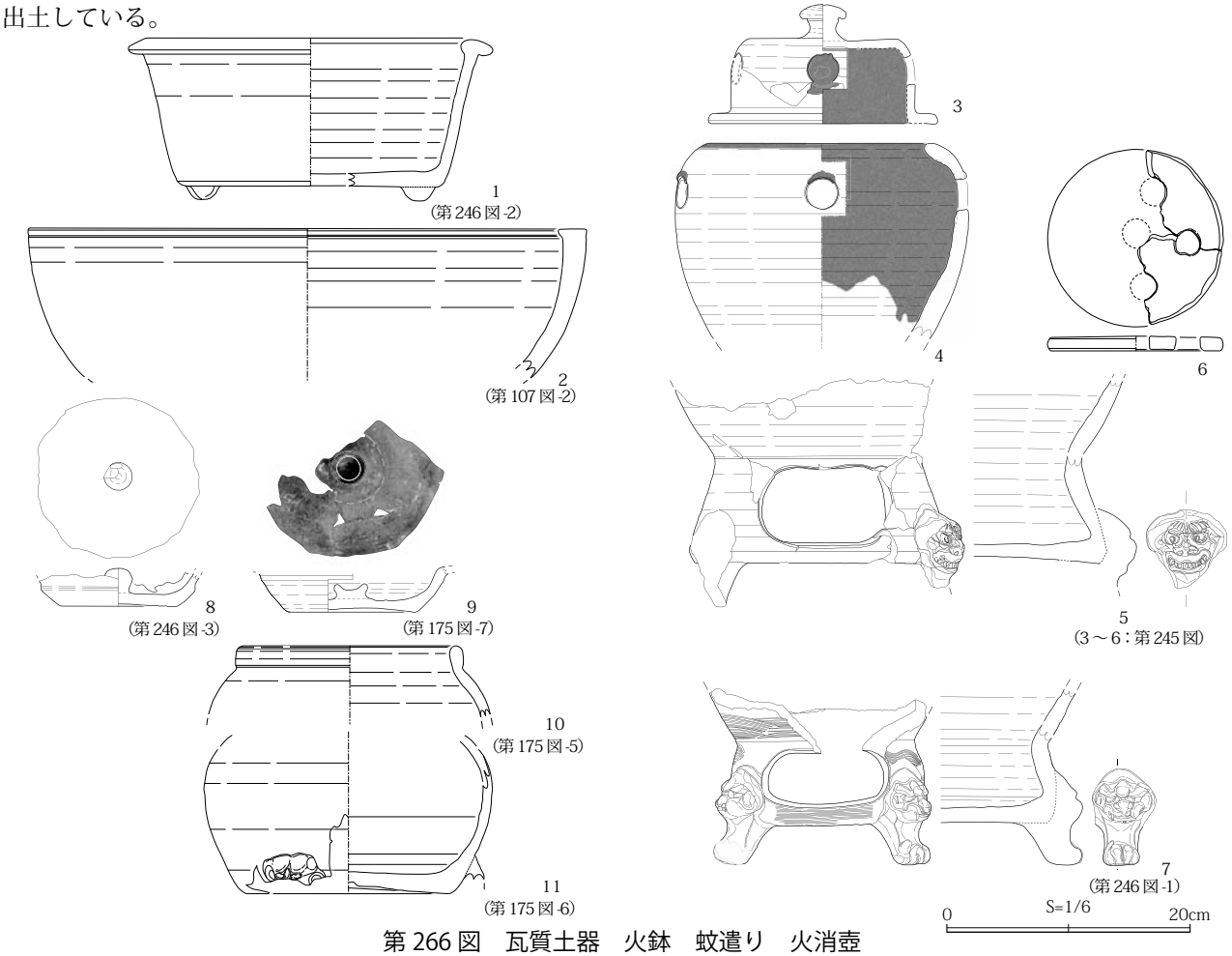
瓦質土器は接合後の破片数で 676 点出土している。内訳は、火鉢 263 点、蚊遣り 100 点、火消壺の身 1 点と蓋 2 点、炭櫃 5 点、十能 3 点、火入れ 1 点、瓦灯 1 点、その他は破片で器種不明である。ほとんどがⅣ層以上からの出土で、Ⅲ層で出土数の半分以上を占める。以下、器種ごとに述べる。

火鉢は、Ⅳ層から 21 点、Ⅳ層上面検出遺構から 22 点、Ⅲ層から 99 点、Ⅲ層上面検出遺遺構から 13 点、Ⅱ層から 114 点出土している。器形は 2 種類に分けられ、体部が外傾して直線的に立ち上がり、口縁部が T 字形に肥厚するもの（第 266 図 -1）と、体部が内湾しながら立ち上がり、口唇部が平坦でわずかに内側へ張り出すもの（第 266 図 -2）が見られる。

蚊遣りは、Ⅳ層から 7 点、Ⅳ層上面検出遺構から 19 点、Ⅲ層から 68 点、Ⅲ層上面検出遺構から 1 点、Ⅱ層から 5 点出土している。第 266 図 -3 ～ 6 は、一括で出土しており接合関係はないが、同一のものの可能性がある蚊遣りである。丸く張り出し、六方に煙り出しの丸孔を有する胴上半部と、正面に焚口を有し、底部には獅子の顔が貼り付けられた 3 足の獣脚を有する胴下半部、六方に丸孔を有する蓋、及び胴部くびれ部分に入れられるサナで構成される。内面には燻された炭化物が付着している。出土した蚊遣りは、大小あるが、何れも同様な器形で、胴下半部外面がロクロナデ調整のもの（第 266 図 -5）と、櫛描波状文を有するもの（第 266 図 -7）がある。

火消壺（第 266 図 -10・11）は、体部が内湾しながら立ち上がり、獣脚を有する。口縁部は肥厚し、口唇部が丸みを帯びて蓋が付く。蓋は摘みが球形を呈するもの（第 266 図 -8）と、中央が凹んだもの（第 266 図 -9）が見られる。

その他、炭櫃は板状の破片が、十能は把手の一部（第 211 図 -4）が、火入れ、瓦灯（第 71 図 -9）等も破片が出土している。



第 266 図　瓦質土器　火鉢　蚊遣り　火消壺

3　土師質土器

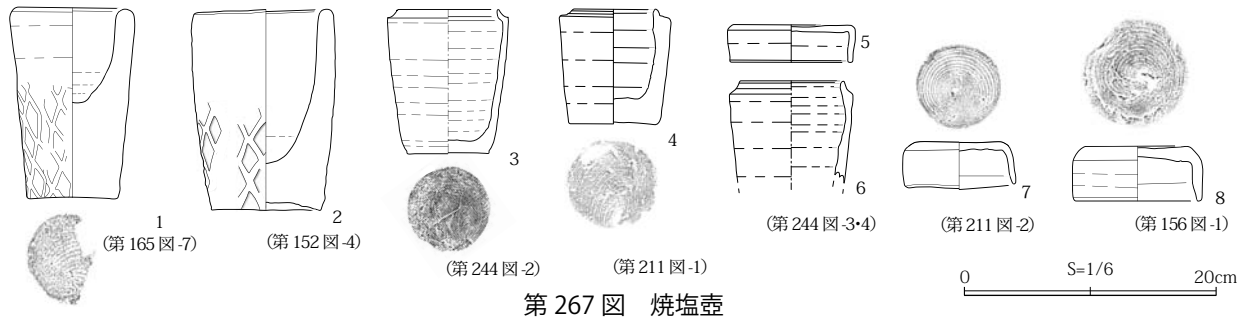
土師質土器は接合後破片数で 1,228 点出土している。内訳は、かわらけが 841 点、灯明皿 96 点、焼塩壺 43 点、火鉢 5 点、擂鉢 1 点、火入れ 2 点、袋物、碗、壺、蓋が各 1 点、ミニチュアの碗 2 点、釜、壺、皿が各 1 点、豆甕が 3 点、その他は細片で器種が不明である。以下主要な遺物について述べる。

(1) かわらけ

かわらけは、先述したようにⅤ層以上で出土しており、破片数は基本層では上層になるほど多くなる。遺構出土では、Ⅳ層上面検出遺構からの出土が最も多い。Ⅲ層出土のもので、墨書の見られるものが 1 点確認された。底部のみで法量や形状は不明であるが、見込みに「義段事勝」と記されている（第 244 図 -1）。

(2) 焼塩壺

焼塩壺は身及び蓋が出土している。身は、外面に格子タタキが施される在地産と考えられるもの（第 267 図 -1・2）と、比較的薄手の畿内系と考えられるもの（第 267 図 -3 ～ 5）の 2 種類が見られる。刻印等は確認されなかった。蓋は、その器形から、畿内系の身に伴うものと考えられる。5 と 6 は同じ箇所から出土しており、セット関係を有する可能性がある。



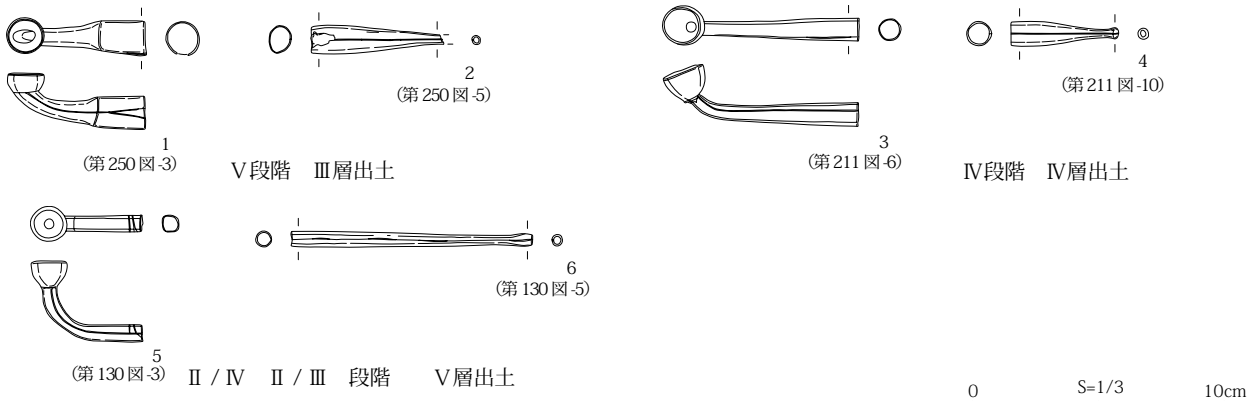
第 267 図　焼塩壺

4　金属製品

金属製品は 448 点出土した。内訳は煙管 40 点、釘 249 点、刀子 14 点、古銭 61 点、火箸、簪点各 1 点、その他である。以下主要な遺物について述べる。

(1) 煙管

煙管は遺構外の基本層堆積土中より出土しており、すべて雁首と吸い口を羅宇でつなぐ羅宇煙管である。煙管は小泉弘によりⅠ～Ⅵの 6 段階に分類されている（小泉 2001）が、今回の調査において出土した煙管は、その特徴から概ねⅡ～Ⅴの各段階に相当すると考えられる。出土層位との対応関係を見ると、Ⅲ層からはⅤ段階（19 世紀代）、Ⅳ層からはⅡ～Ⅳ段階（17 世紀後半～ 18 世紀後半）、Ⅴ層からⅡもしくはⅢ段階（17 世紀後半～ 18 世紀前半）の雁首と吸い口がそれぞれ出土しており、当遺跡基本層の年代と概ね合致する。



第 268 図　各段階の煙管

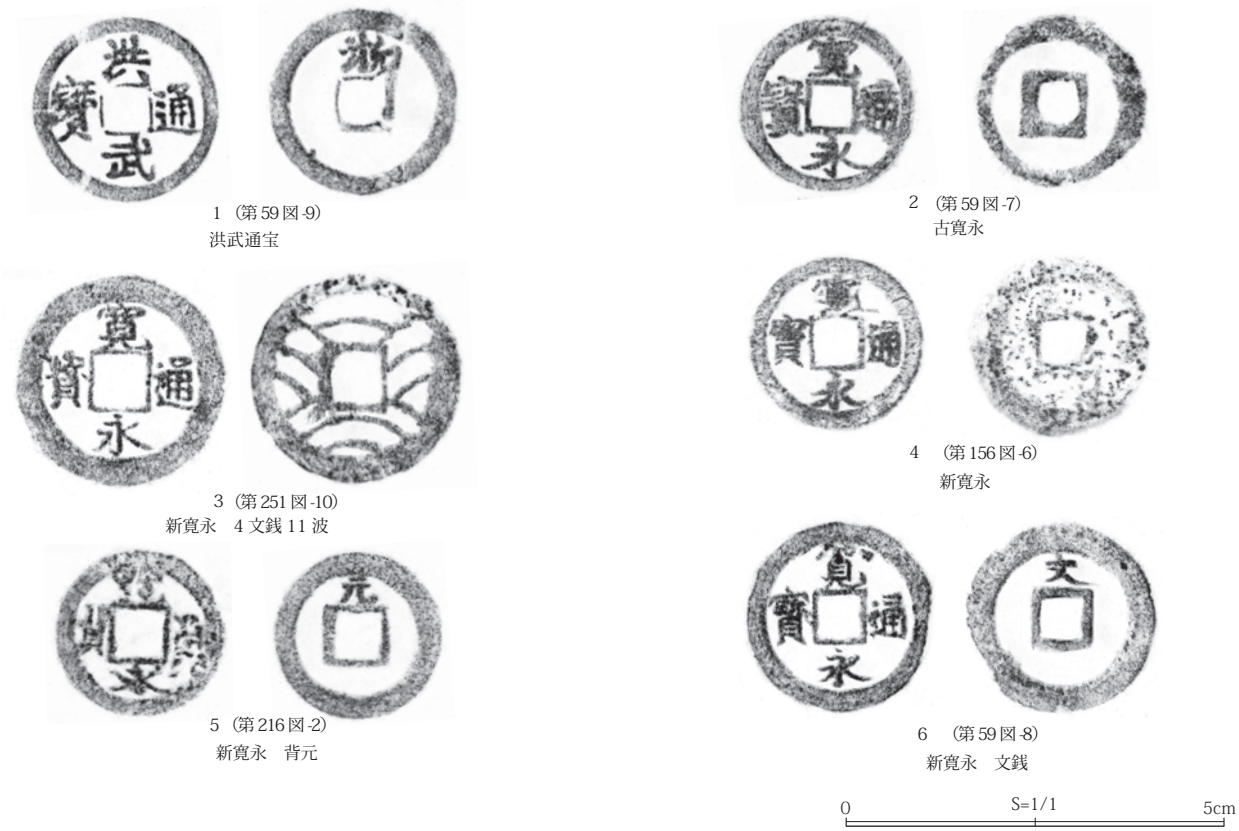
(2) 釘

釘は 249 点出土しており、頭巻釘、切り釘、飾釘等が出土している。Ⅱ層から 149 点、Ⅲ層から 43 点、Ⅳ層から 26 点等基本層からの出土が多いが、SX2 から 5 点、SX4 から 6 点、SX5 から 3 点、SX21 から 17 点出土するなど、カマド跡の堆積土と掘り方からの出土が多く見られる。これらは、寛永通宝等の銭貨とともに出土しており、カマドを築造する際の祭祀等にかかわるものと推測される。

(3) 銭貨

銭貨は 60 点出土した。そのうち近世の銭貨は 58 点である。錆による劣化が激しく、文字を判読できなかった 1 点を除いた 57 点のうち、56 点が寛永通宝であり、1 点は中国銭である洪武通宝（初鋳年 1368 年）である。寛永通宝は初鋳年 1639 年の古寛永 9 点、初鋳年 1697 年の新寛永 46 点、その他に初鋳年 1698 年の文銭等が出土している。

出土銭貨の大部分は、Ⅳ層及びⅣ層上面検出遺構以上の土層から出土している。また、カマド跡から釘とともに出土したものについては、カマドを築造する際の祭祀等にかかわるものと推測されるが、今後の類例の増加を待って検討したい。



第 269 図　川内 B 遺跡出土の銭貨

5　土製品

土製品は 43 点出土した。土製人形や土製の犬や猿、猪、碁石等がⅡ～Ⅳ層で出土しており、Ⅴ層以下では見られなかった。その他ミニチュアの碗、擂鉢、釜等玩具と思われるものが出土している。

6　木製品

木製品は 215 点出土した。内訳は柱根 11 点、杭 65 点、溝蓋 46 点、漆器椀 15 点、箸 5 点、下駄 1 点、しゃもじ形 1 点、その他用途不明品である。木製品は概ねⅤ層及びⅥ層より出土しているが、これは、地下水の影響で遺存状態が良好であったためと思われる。以下主要な木製品について述べる。

(1) 柱根

柱根はその素材が丸木であり、側面を面取りして断面が六角形を呈するもの、断面が四角形を呈するものが出土しているが、それぞれの時期や用途などは出土状況からは確認できなかった。杭は芯持ち材や半割材、分割材等の先端を整形したものが見られる。なかには側面に臍穴が認められるものもあり、建築部材の廃材を素材として転用したものと考えられるものが含まれる。

(2) 漆器

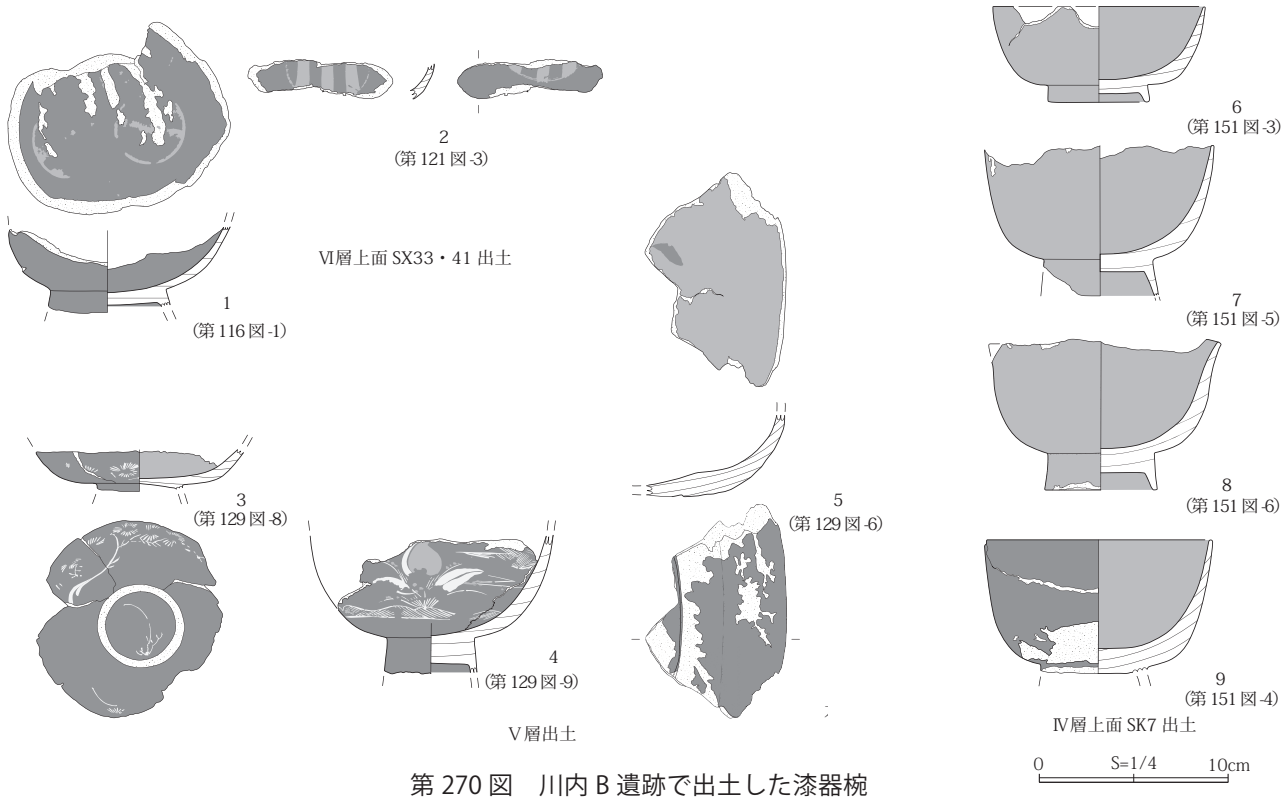
漆器は 15 点出土している。漆器椀は 10 点で、Ⅵ層上面 SX33 と SX41 から各 1 点、Ⅴ層堆積土から 4 点、Ⅳ層上面 SK7 から 4 点と SX10 から 1 点出土した。漆器椀は、その器形から、口縁径に対して体部が深いものと浅いもの、高台内の削りが深いものと浅いもの等に分類できる。

Ⅵ層上面検出遺構出土の 2 点（第 270 図 -1・2）は破片のため器形が判然としないが、1 は体部が深めであるタイプと思われる。2 点とも内面外面とも黒漆で、赤漆で伊達家の家紋である三引両文が描かれる。

Ⅴ層出土の 2 点（第 270 図 -3・4）は内面赤漆、外面黒漆地に赤漆と金彩で文様が描かれる。またⅤ層からは漆器の皿と思われる破片（第 270 図 -5）が出土している。内面赤漆、外面黒漆で、内面には黒漆で描かれた文様の一部が残っている。

Ⅳ層 SK7 から 4 点出土している（第 270 図 -6 ～ 9）。6 は体部が浅めで、7 ～ 9 は深めである。このうち 6 ～ 8 は内面外面とも赤漆で、飯椀と汁椀のセットで使用されていたものと考えられる。

漆製品はその他に、路線部Ⅰ区 SX3 から箸 1 点と用途不明品 1 点、迂回路部 SX40 からも用途不明品で部材の一部と思われるものが 1 点出土している。



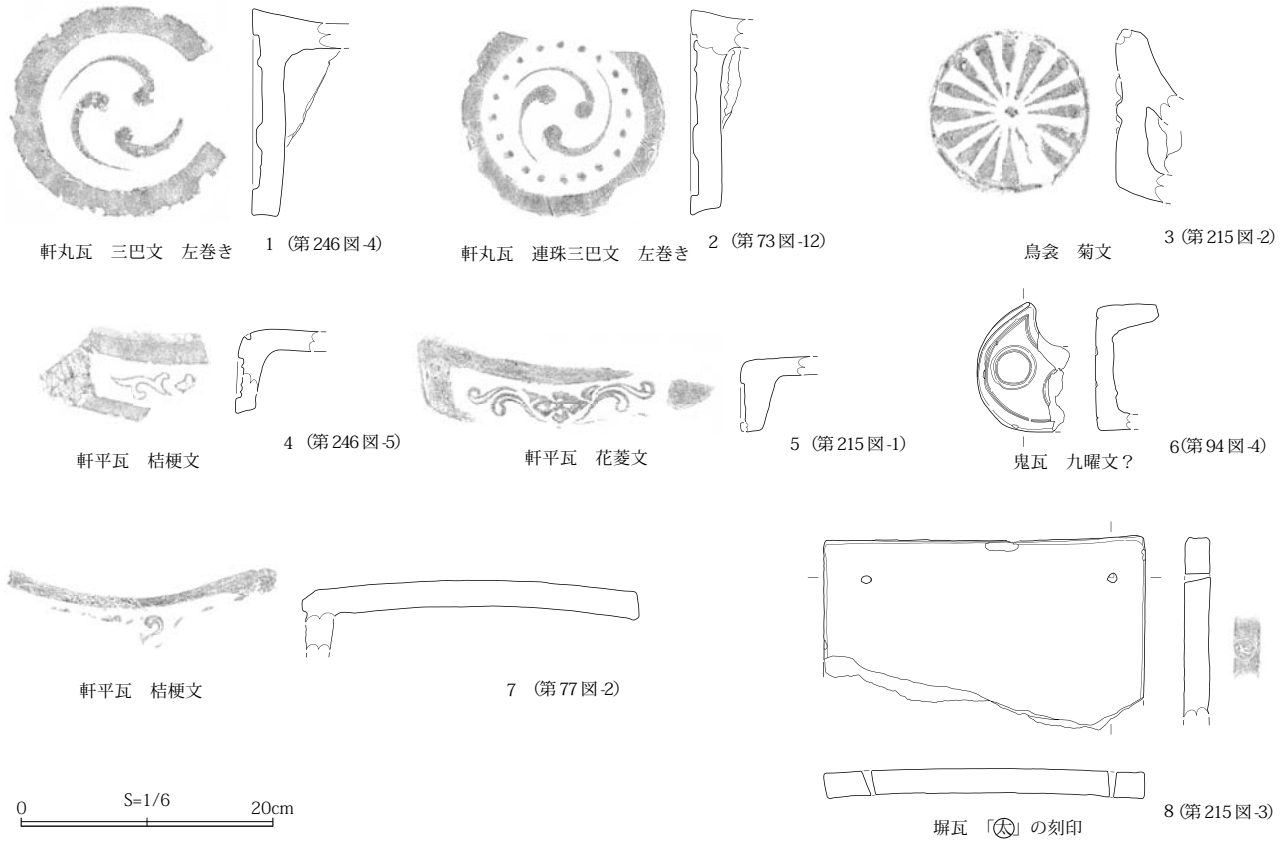
第 270 図　川内 B 遺跡で出土した漆器椀

7　瓦（第 271 図）

瓦は破片数で 1,901 点出土している。内訳は丸瓦 224 点、軒丸瓦 11 点、平瓦 333 点、軒平瓦 7 点、桟瓦 302 点、軒桟瓦 36 点、板塀瓦 237 点、棟瓦 30 点、熨斗瓦 18 点、鬼瓦 2 点、鳥衾 1 点、その他 700 点である。軒丸瓦には左巻きの三巴文（第 271 図 -1）と 20 個の連珠を巡らす連珠三巴文（第 271 図 -2）が見られる。軒平瓦は、桔梗文（第 271 図 -4）、花菱文（第 271 図 -5）等が見られ、唐草や飛雲が左右に展開する。その他、鬼瓦と鳥衾に、伊達家の家紋の一つである九曜文（第 271 図 -6）や菊文（第 271 図 -3）が見られる。九曜文は当地に 18 世紀後葉から幕末まで居住していた亘理家の家紋でもあり、関連性が窺がわれる。

その他板塀瓦で側面に「㊟」の刻印が見られるもの（第 271 図 -8）が 1 点確認された。

丸瓦・軒丸瓦、平瓦・軒平瓦等はⅤ層やⅥ層上面検出遺構から出土しているが、桟瓦はⅣ層以上の土層からのみ出土しており、陶製の瓦も見られる。



第 271 図　川内 B 遺跡出土瓦の瓦当文様

8　出土遺物のまとめ

以上、川内 B 遺跡の出土遺物について概観してきた。陶磁器は、17 世紀代から 19 世紀までの消費の動向が確認された。基本層Ⅶ層・Ⅵ層では数が少ないが、17 世紀代の肥前磁器と瀬戸・美濃産陶器、中国産磁器が出土している。基本層Ⅴ層及びⅤ層上面検出遺構からは、18 世紀前半の肥前陶磁器が出土陶磁器の半分以上を占め、その他に大堀相馬や小野相馬が出土している。

基本層Ⅳ層及びⅣ層上面検出遺構では、18 世紀後半から 19 世紀にかけての大堀相馬、小野相馬、堤や在地産の陶器が増加する。そして 19 世紀以降生産を開始した瀬戸・美濃産磁器製品も増加する傾向がある。

その他、金属製品や木製品、土製品、石製品等様々な遺物からも当時の人々の生活を垣間見ることができる。

第２節　検出遺構について

川内Ｂ遺跡では、368 基の遺構が検出された。Ⅲ層上面で近世末～近代の遺構が検出され、Ⅳ～Ⅶ層上面でおよそ 17 世紀後葉～ 19 世紀中葉にかけての遺構が検出された。ここでは、検出された主要な遺構について検討し、川内Ｂ遺跡の様相について概観してみたい。

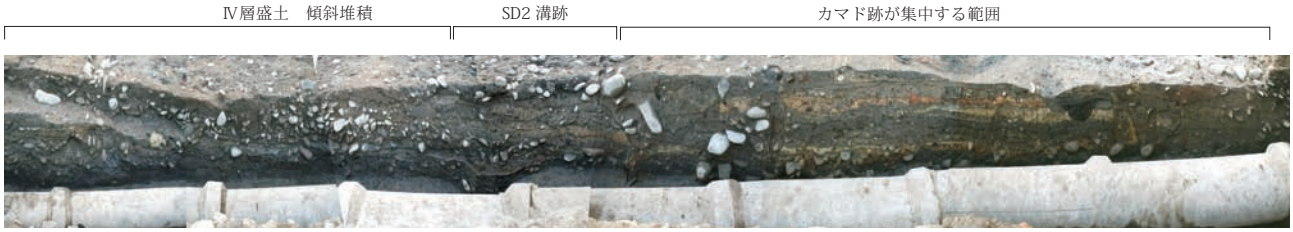
１　盛土及び土留め工

川内Ｂ遺跡の基本層は第４章で述べたとおり、Ⅰ～Ⅶ層に区分され、その堆積時期は、各層上面で検出された遺構や、出土遺物により、Ⅰ層が現代、Ⅱ層が近代、Ⅲ～Ⅵ層は近世、Ⅶ層は近世以前の自然堆積層として理解された。近世の層であるⅢ～Ⅵ層のうち、Ⅲ・Ⅳ層は、その堆積状況から、比較的短期間のうちに人為的に盛土された土層であると考えられる。（なお、Ⅱ層は明治期に陸軍第二師団が、Ⅰ層は GHQ 及び東北大学が盛土した土層である。）

Ⅲ層は、迂回路部東側において、南東方向へ傾斜した堆積として検出されたが、Ⅲ層中から、傾斜方向に直交するように、多数の礫がおよそ３条の列を成しているように検出された。これらの礫を土層断面（第 227 図）で観察すると、土層の分層線に沿って、礫が斜めに並んで検出されたが、これは、Ⅲ層を盛土をする際に、ある程度土を盛っては礫を据え、その上に土を盛っては礫を据えるといった工程を繰り返して整地したものと推測され、埋められた礫は、盛土を安定させる、土留めの機能を有するものと考えられる。

Ⅳ層においても、概ね北西から南東方向へ傾斜して堆積する土層は、礫が多量に含まれ、細かな単位に分層できる。これは、短期間で人為的に盛土されたものと理解される。Ⅳ層では、路線部Ⅰ区中央や迂回路部南西側において、下層であるⅤ層から杭が多数検出されているが、これらは、残存状況から、Ⅳ層から打ち込まれたものと考えられる。路線部Ⅰ区では、地形の傾斜方向に対して直交するように杭が列を成して検出されており（第 50 図）、これらの杭は、やはり盛土の際の土留めの性格を有するものと推測される。

Ⅳ層では円礫を多量に含む傾斜堆積の他に、迂回路部の北西側及び中央南側において、円礫が比較的少なく、薄い版築状を呈する土層の堆積が観察された。迂回路部北西側では、その上面で 11 基に及ぶカマド遺構が検出されている。また、迂回路部中央南側では大型の性格不明遺構 SX19 に削平され、その範囲は明確に捉えられなかったが、南壁土層断面及び撹乱（土管６）東壁面で、その一部が観察できる。これらの版築状の水平堆積は、迂回路部北西側については、その上面の様相から、建物の床（土間）面であると考えられ、盛土をする際に建物の範囲は、地盤強化のために、版築状に盛土したものと推測される。迂回路部中央南端付近については、Ⅳ層上面において SA1 柱列跡が検出されている。明確に建物跡と思われる遺構は検出されていないが、当該範囲においても建物があった可能性が考えられる。



左（南）側は礫が多く含まれた傾斜堆積に対して、右（北）側は礫が比較的少なく薄い焼土層、シルト層、シルトストーンの層が薄く水平に堆積する。

写真２　迂回部Ⅳ層土層断面（東から）

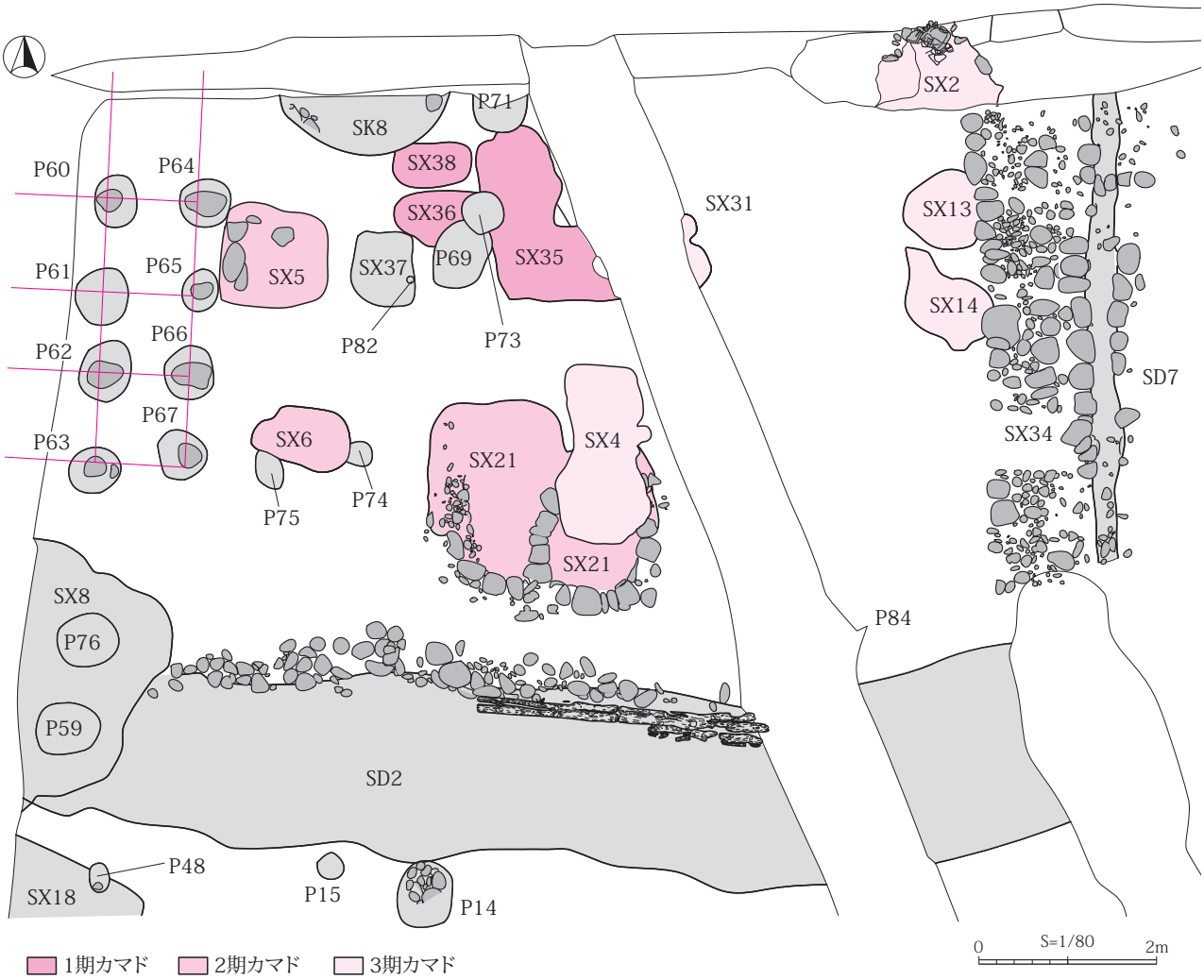
第 272 図　版築状の堆積が見られた範囲

2　建物跡（台所跡）

迂回路部北西側Ⅳ層上面において、11 基ものカマド跡と考えられる遺構が検出された。その南端は SD2 溝跡が東西に走り、東端は石列状を呈する SX34 性格不明遺構及び SD7 溝跡が南北に走る。また、西端には礎石列と考えられる SB1 建物跡の P60 ～ 67 が 1 間 3 間で並ぶ。Ⅳ層上面の帰属時期は 18 世紀後葉～ 19 世紀中葉と考えられ、これらの遺構は、当該時期の建物跡の一部で、カマド跡が検出されたことから台所跡と考えられる。検出されたカマド跡は先に述べた版築状の堆積の上面で築かれており、堆積層及び切り合い関係等から概ね 3 時期に区分できる。1 期に SX35、SX36、SX38、そして 2 期に SX5、SX6、SX21、SX31、3 期には SX2、SX4、SX13、SX14 が相当するものと考えられ、各遺構の出土遺物から 1 期は 18 世紀後葉～末葉、2 期は 19 世紀初頭～前葉、3 期は 19 世紀前葉～中葉と理解される。

1 期の SX35 と SX36、SX38 は新旧関係がはっきりしないが、SX36 と SX38 についてはその位置関係や主軸方向が同一であることから 2 連のカマドであった可能性が考えられる。また、SX35 も撹乱により削平されているが、東側にカマドが存在した可能性が考えられる。2 期のカマドについては、残存状態やレベルから SX21 が比較的新しいものと思われるが判然としない。3 期の SX2、SX4、SX13、SX14、SX31 についても新旧関係は判然としないが、SX13 と SX14 については、2 連のカマドであった可能性が考えられる。

カマド跡については、江戸遺跡での調査事例や、近世の絵図、現存する古民家等の民俗事例からも 2 ～ 5 連のカマドや、2 つ以上のカマドが同時期に存在する例が報告されており、その場合、日常的に使用するカマドとハレの日に使用するカマドが存在するという説がある（狩野 2004）。これは SX21 の東カマドが西カマドに比して使用頻度が高くないと推測されることや、SX13・SX14 や SX36・SX38 で、焼土の範囲が SX13 や SX38 の方が規模が小さく、使用頻度が低いと考えられること等からも肯定される。



第 273 図　迂回路部北西部台所跡遺構配置図

また、カマド掘り方の堆積土より寛永通宝や切釘・頭巻釘等の釘が多数出土している。これらは、カマドに対する祭祀行為に係るものではないかと推測されるが、今後の資料の蓄積を待って検討したい。

3　その他の建物跡

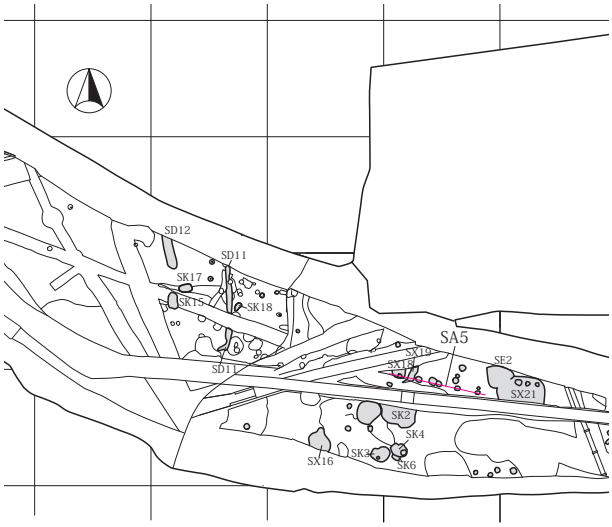
台所跡と同時期と考えられる遺構は、Ⅳ層上面で検出されている。路線部Ⅰ区 SA2、路線部Ⅱ区の SA1 ～ 3、迂回路部 SA1 等、柱列跡が 5 条検出されている。このうち路線部Ⅰ区 SA2 及び路線部Ⅱ区 SA1 は礎石を有する柱列跡であり、直角に屈折すること等から、建物内側の礎石列は確認できなかったが、礎石建物の外周の一部である可能性が考えられる。また、路線部Ⅱ区 SA3 も SA1 と併せて同一の建物であった可能性が推測される。路線部Ⅰ区 SA2 及び路線部Ⅱ区 SA1 と SA3 はその主軸方向がそれぞれ N-90° -W、N-87° -W とほぼ同一方向を示し、迂回路部 SB1 の主軸方向 N-4° -E と概ね直角を示す。

また、迂回路部 SB1 は調査区の西側・北側へ延びている可能性が推測され、路線部Ⅰ区の北側に建物が広がっていた可能性が考えられる。

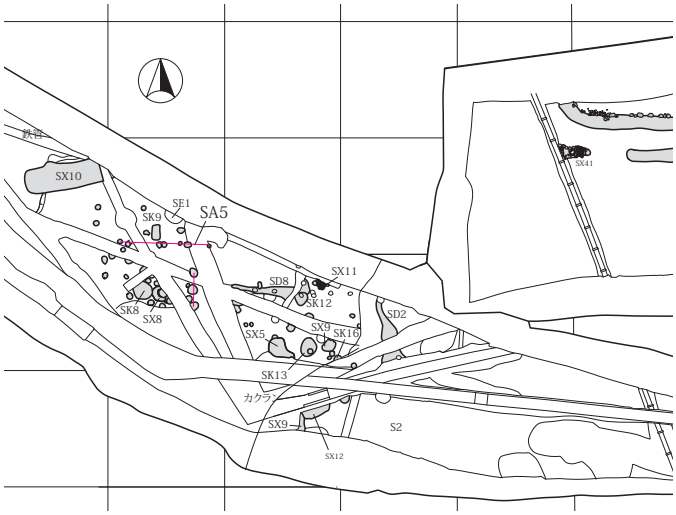
Ⅳ層以外では、明確に建物跡と考えられる遺構は検出されていないが、柱列跡は複数検出されている。最下層のⅦ層上面では、路線部Ⅱ区で SA5 柱列跡が 1 条検出されている。Ⅵ層上面では、路線部Ⅰ区で SA3 及び SA5 の 2 条の柱列跡が検出され、それぞれ柱穴で柱痕が確認されている。また、Ⅴ層では、路線部Ⅰ区 SA4 及び、路線部Ⅱ区 SA4 が検出されており、いずれも柱痕を有する柱穴を含み、掘立柱の構造物跡の一部と考えられる。また、迂回路部 SX30 では、径 10 ～ 11.9cm の柱根が出土しており、同様に構造物の一部と考えられる。先に述べたⅣ

層上面で検出された柱列跡は、迂回路部 SA1 を除いて、何れも、根固め石や、礎石が存在した痕跡が見られる。Ⅲ層上面では、SA1 柱列跡が検出されており、柱穴の１基に礎石が確認された。Ⅳ層が盛土された 18 世紀後葉以降、当遺跡では掘立柱構造から礎石構造へと替わっていった可能性が考えられる。

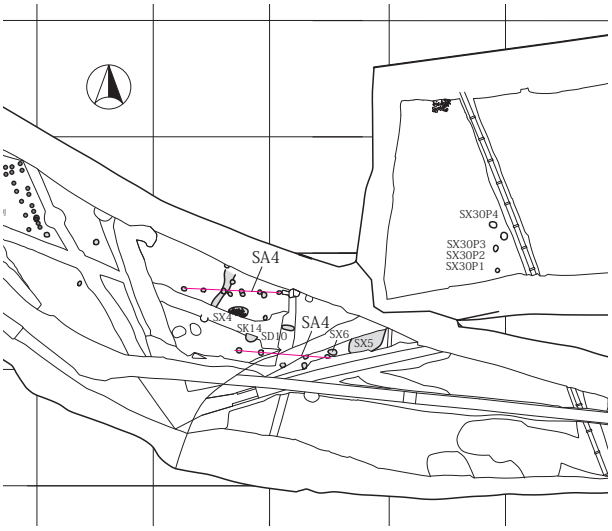
次に主軸方向を見てみたい。各柱列跡の主軸方向は、Ⅶ層上面の路線部Ⅱ区 SA5 が N-77°-W を示し、Ⅵ層からⅣ層上面で検出された柱列跡は、何れも N-86 ～ 88°-W または、これに直交する方向を示す。また、Ⅲ層上面の路線部Ⅰ区 SA1 は、N-24°-W と N-66°-E を示す。Ⅶ層上面とⅥ～Ⅳ層上面、Ⅲ層上面では柱列跡の主軸方向が変化しており、当該時期に土地の利用方法が変化した可能性が考えられる。



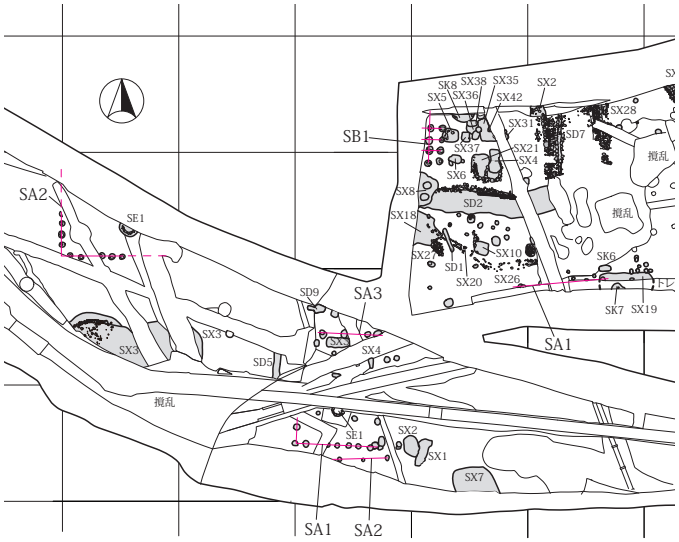
Ⅶ層上面



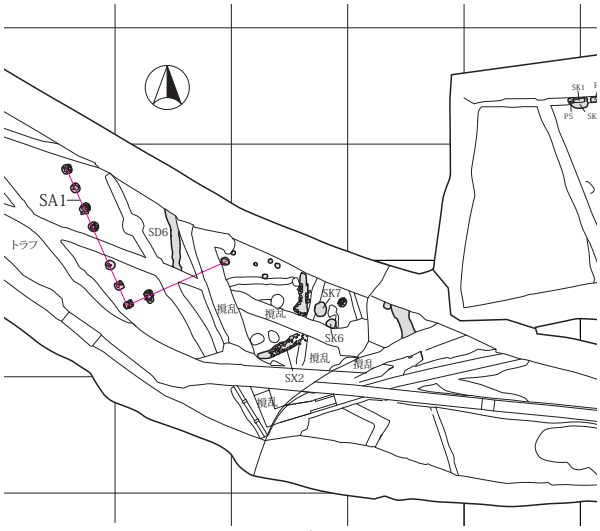
Ⅵ層上面



Ⅴ層上面



Ⅳ層上面



Ⅲ層上面

0　S=1/650　20m

第 274 図　各面で検出された柱列跡

4　区画施設

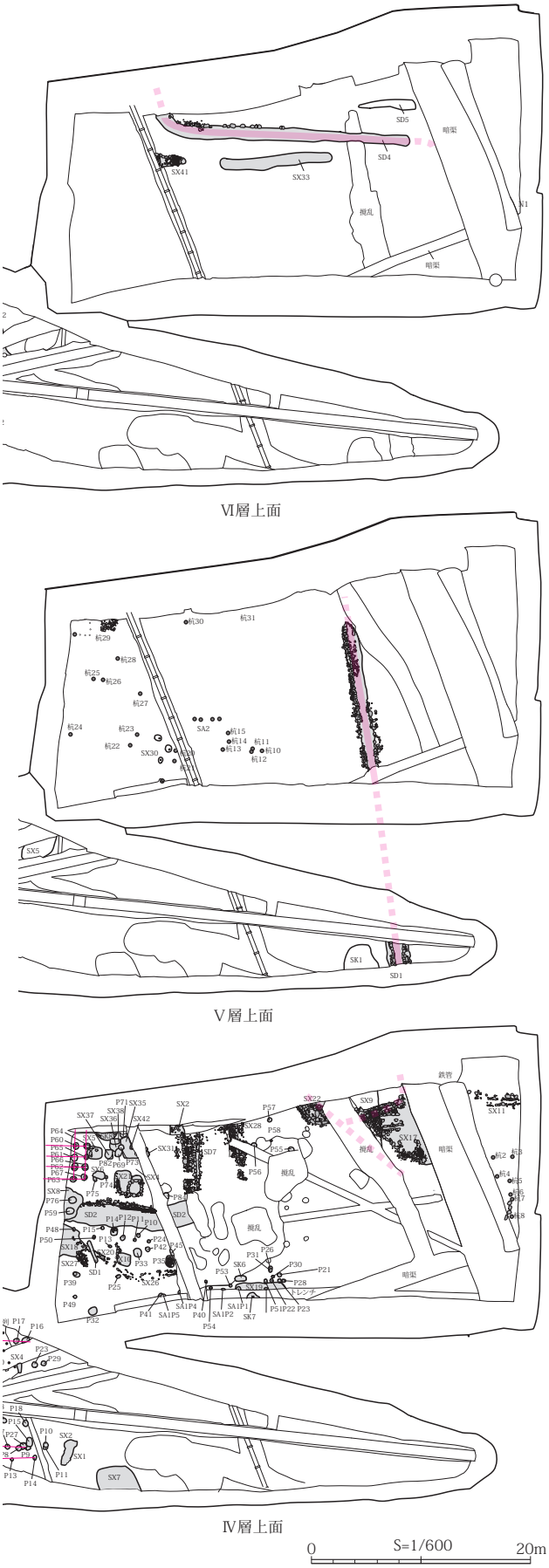
次に区画施設について検討してみたい。今回調査において区画施設と考えられる溝跡が、Ⅵ層及びⅤ層上面で検出されている。Ⅵ層上面では、迂回路部北側で東西に走る溝跡 SD4 であり、Ⅴ層上面では、やはり迂回路部東側で検出された溝跡 SD3 である。迂回路部 SD3 は南北に走り、南側の路線部Ⅰ区 SD1 に繋がる。それぞれの時期は、Ⅴ層上面で検出された迂回路部 SD3 及び路線部Ⅱ区 SD1 は、出土遺物から 18 世紀前葉～中葉に機能し、18 世紀後葉にはⅣ層を盛り土する際に埋められたものと考えられる。Ⅴ層上面で検出された SD4 については、時期を確定できる遺物の出土はないが、SD3 との重複関係から SD3 より古いことが確認されており、また、Ⅵ層出土遺物等より 17 世紀後葉～末葉と考えられる。

迂回路部 SD3 は路線部Ⅰ区 SD1 と繋がると検出長が、31.38m と規模が大きく、両壁に石組を有し、本遺構の位置を境に生活面の標高が変化する等から、屋敷地を区画する施設の一部と推測される。また SD4 も検出長 23.17m と比較的規模が大きく、同様な施設の一部と理解される。

17 世紀代では東西方向に走る区画が、18 世紀前葉～中葉にかけては南北方向に変化していることが理解される。

18 世紀後葉にⅣ層が盛土され、SD3 が埋められて以降は、区画施設に相当すると考えられる溝跡等の遺構は確認されなかった。しかしながら、Ⅳ層上面で検出された石組の溝状を呈する SX22 や、その東側で検出された、SX17 で検出された石組溝と北西から南東方向に走る石列等は、区画施設の一部であるか、あるいは区画に平行に配置された施設の可能性が考えられ、当該範囲での区画施設は度々、方向を違えて作り直されてきたものと考えられる。

また、Ⅲ層についても区画施設と思われる遺構は確認されなかった。



第 275 図　区画施設と思われる遺構の変遷

5　検出遺構のまとめ

今回調査で検出された遺構は、Ⅲ～Ⅶの基本層上面で検出され、基本層毎にⅠ～Ⅴ期の 5 期に区分される。また、各基本層出土遺物から 17 世紀代～ 19 世紀後葉の各時期に該当すると考えられる。以下に各期毎に概略を述べる。

〈Ⅰ期：Ⅶ層上面〉：17 世紀代以前

路線部Ⅰ区では溝状遺構及び土坑が、路線部Ⅱ区では、SE2 と隣接する SX21 が重複して検出され、その南西側に SA5 が北西方向に走る。そのほか土坑や性格不明遺構、ピット等が散在して検出された。

〈Ⅱ期：Ⅵ層上面〉：17 世紀後葉

Ⅵ層上面では、迂回路部北側で、北から屈曲して東西に走る SD4 や、SD4 に平行して東西に走る SD5、SX33 等、の遺構が検出された。SX33 の西側には木材で蓋をされた石組溝状の SX41 が東西に走る。路線部Ⅰ区及び路線部Ⅱ区では、多数の柱穴や土坑が検出され、柱列跡が 2 条約 90°方向を違えて検出された。遺構が広がる北西端には比較的規模の大きな溝状を呈する SX10 が検出され、遺構内の土留め状の石組裏込めから 17 世紀代のものと思われる岸窯産の甕が出土した。

〈Ⅲ期：Ⅴ層上面〉：18 世紀前半

Ⅴ層上面では、迂回路部東側で石組の溝跡 SD3 が南北に走り、路線部Ⅱ区 SD1 へ繋がる。迂回路部 SD3、路線部Ⅱ区 SD1 は、その規模と石組みから区画施設の一部と考えられ、その出土遺物から 18 世紀前半に機能し、18 世紀後葉にはⅣ層を盛土するに際して埋められたものと考えられる。路線部Ⅰ区、路線部Ⅱ区では東西に走る柱列跡が 2 条平行して検出され、迂回路部西側では柱根が多数検出された。当該時期の建物施設に伴うものであろうと推測されるが、復元には至らなかった。

〈Ⅳ期：Ⅳ層上面〉：18 世紀後葉～ 19 世紀中葉

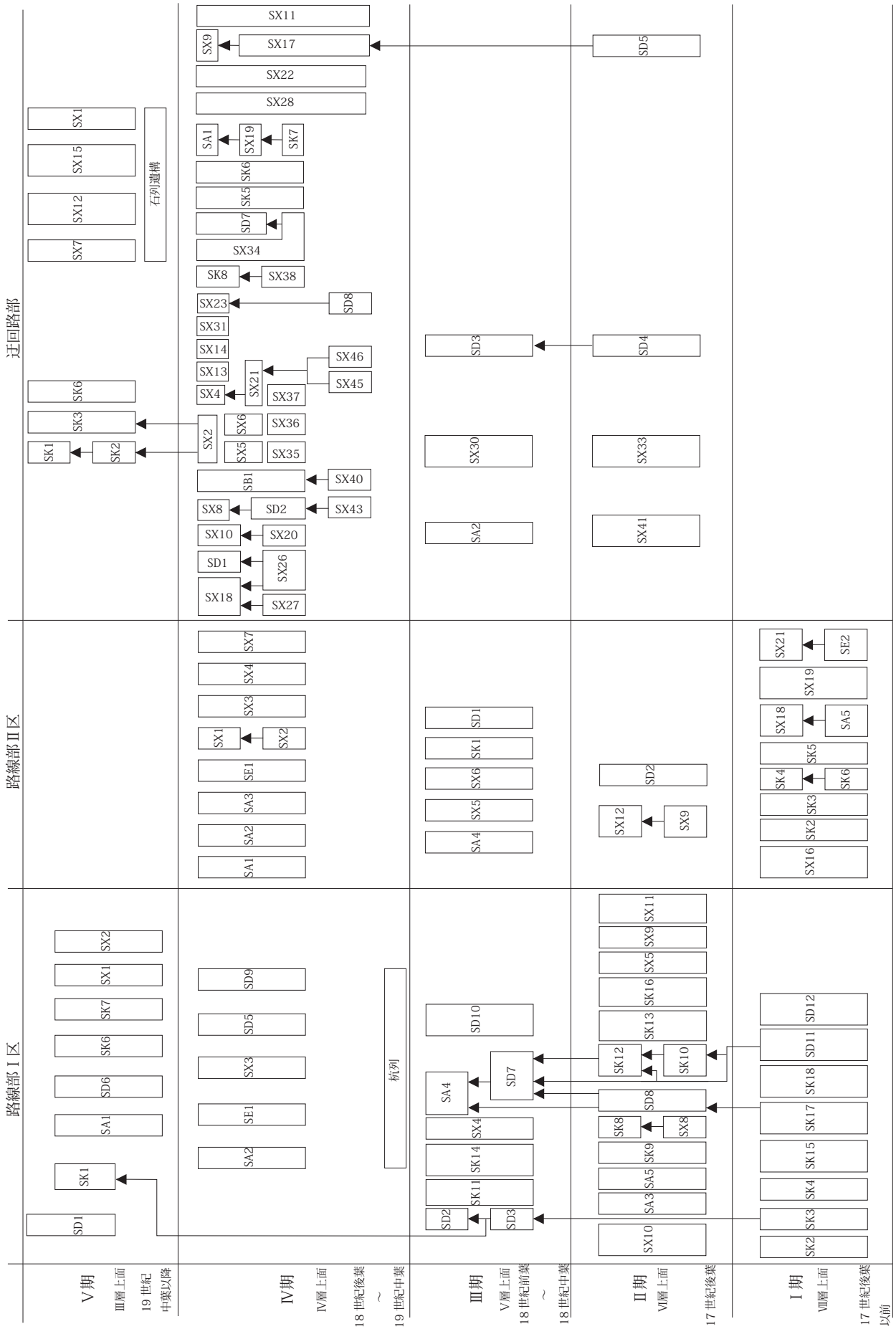
18 世紀後葉になってⅣ層が大規模に盛土されたものと思われる。盛土に際しては、杭を打ち込んで土留めとしたものと考えられ、路線部Ⅰ区Ⅴ層上面で、地面の傾斜に対して直交するように並ぶ杭列の痕跡が検出された。Ⅳ層中からは 17 世紀代～ 18 世紀後葉までの陶磁器が大量に出土した。迂回路部北西側と南端では、その周辺の盛土層と異なり、版築状の堆積が確認され、北西側版築層では、検出遺構がⅣ層上面とⅣ -2 層上面に分けられた。Ⅳ -2 層上面では、石敷状の SX40 や土坑状の SX43・SX45・SX46、SD8 等が検出された。Ⅳ層が盛土された後、上層の建物が建つ以前の遺構と考えられる。版築層上面では、建物跡と考えられる礎石の列 SB1 と 11 基ものカマド跡が検出され、その周りには、南端と東端を区画するように石組溝が走る。建物の範囲あるいは土間の部分には、周辺の盛土とは別な整地方法を選択した可能性が考えられる。

路線部Ⅰ区中央と路線部Ⅱ区で、礎石を伴う柱穴が L 字状に並ぶ柱列跡が検出され、路線部Ⅰ区南側で池跡と推測される SX3 が広がる。当該時期、路線部Ⅰ区の北側に建物が広がり、その南西側に庭園や池、井戸等の施設が展開していたものと推測される。東側では、Ⅴ層までのような区画施設は確認できなかったが、SX17、SX22 等のような石組の溝や石列状を呈する性格不明遺構が、区画施設の一部である可能性が考えられる。また、迂回路部東側は東へ向かって落ち込み、SX17 及び SX11 等池状の遺構が広がり、西側と様相を異にする。

〈Ⅴ期：Ⅲ層上面〉：19 世紀中葉以降

Ⅲ層は 19 世紀中葉以降に堆積したものと思われる。迂回路部東側では、盛土する際に円礫を規則的に埋めて土留めとしたものと推測される石列状の遺構が検出された。路線部Ⅰ区では、Ⅵ～Ⅳ層上面で検出された柱列跡と主軸方向を違えて、礎石を有する柱列跡 SA1 や石組溝 SD1 等の幕末明治期の遺構が検出された。

以上のように、当調査区は近世を通じて、仙台藩上級家臣の屋敷地として利用されてきたが、幕末とともに終焉を迎えて、明治以降は軍の施設として、現代は東北大学のキャンパスとして利用されている。



第 276 図　川内 B 遺跡検出遺構時期別変遷模式図

第８章　まとめ

1. 川内Ｂ遺跡は広瀬川右岸に形成された河岸段丘に立地している。標高は 44.9 ～ 47.0m である。
2. 本調査は仙台市高速鉄道地下鉄東西線建設に伴い、平成 20 年７月１日～平成 21 年２月 17 日に行われた。調査面積は 2,390㎡である
3. 調査区は、仙台城跡二の丸の北側に位置しており、近世を主として遺物・遺構が検出された。また、縄文時代の土器片等も少量出土している。
4. 今回の調査では、柱列跡 11 条、建物跡１基、溝跡 20 条、井戸跡３基、土坑 29 基、カマド跡 11 基、性格不明遺構 69 基、ピット 190 基、杭列跡１条、石列遺構１基で、総数 336 基の遺構が確認された。
5. 遺構の時期はおよそ 17 世紀～ 19 世紀後葉と見られ、その変遷は遺構の新旧関係や基本層及び出土遺物の時期から概ね５期に区分される。Ⅰ期は 17 世紀後葉以前、Ⅱ期は 17 世紀後葉、Ⅲ期は 18 世紀前葉～中葉、Ⅳ期は 18 世紀後葉～ 19 世紀中葉、Ⅴ期は 19 世紀中葉以降である。
6. 検出された主要な遺構の様相は以下のとおりである。

Ⅰ期：路線部Ⅰ区で溝が２条、路線部Ⅱ区で柱列跡と井戸跡、土坑状の性格不明遺構が検出された。

Ⅱ期：路線部Ⅰ区東側において柱列跡が２条と多数の土坑及び柱穴が検出された。Ⅰ区北側で規模の大きな溝状の性格不明遺構が検出され、17 世紀代の岸窯産の甕が出土した。迂回路部北側では東西に走る区画施設と考えられる溝跡等が検出されたほか、暗渠状の石組溝状を呈する遺構が検出された。

Ⅲ期：路線部Ⅰ区Ⅱ区において東西に走る柱列跡が２条検出され、迂回路部では、南北に走る石組の溝 SD3 が検出された。迂回路部 SD3 は路線部Ⅱ区東端で検出された SD1 につながり、屋敷地を区画する施設の一部と考えられる。17 世紀～ 18 世紀中葉の遺物が出土しており、18 世紀前葉～中葉に機能したものと考えられる。

Ⅳ期：18 世紀後葉にⅣ層が盛土され、路線部Ⅰ区で盛土に際する土留めと考えられる杭列が検出された。路線部Ⅰ区、Ⅱ区で礎石を伴うと思われる柱列跡が検出され、井戸跡や池状を呈する SX3 等が検出された。迂回路部では、北西側で礎石建物跡や、その東側にカマド跡が 11 基検出された。迂回路部東側では、池状を呈する SX11 や SX17 等の施設が検出された。

Ⅴ期：迂回路部東側でⅢ層を盛土する際の土留めと考えられる石列遺構が検出された。路線部Ⅰ区では中央で礎石を伴う柱列跡 SA1 がⅡ～Ⅳ期とは主軸方向を違えて検出され、当期に土地利用が変化したものと推測される。

7. 出土遺物の総数は 22,614 点である。遺物は縄文土器、瓦、陶器、磁器、土師質土器、瓦質土器、石製品、石器、木製品、金属製品、古銭、土製品等が見られた。
8. 出土した陶磁器は 17,797 点である。産地は磁器が肥前、瀬戸･美濃、切込、中国等、陶器は肥前（唐津を含む）、瀬戸・美濃、京焼、岸窯、丹波、大堀相馬、小野相馬、堤を確認した。在地産と見られる擂鉢等も多数確認された。時期別に見ると、18 世紀前半では、肥前産陶磁器が半分以上を占め、瀬戸・美濃産と大堀相馬産陶器がこれに続くが、18 世紀後葉～ 19 世紀中葉では、肥前産陶磁器が主体を占めながらも減少していき、大堀相馬産が増加していく。また 19 世紀後葉には瀬戸・美濃産磁器が次第にその割合を増加させていく。
9. 川内Ｂ遺跡は 17 ～ 19 世紀の遺構や遺物が検出され、遺物の年代や基本層等から５時期に区分される。区画施設と考えられる溝跡が検出され、時期によって方向が変化している。また、柱列跡や建物跡は、18 世紀後葉以降、掘立柱に加えて礎石建物が見られるようになった。18 世紀後葉～ 19 世紀中葉にかけては、台所跡と思われるカマド跡の集中する範囲が検出された。以上のことにより近世～明治初期にかけての当地での人々の生活の一端が把握された。

引用・参考文献

阿刀田令造　1936『仙台城下絵図の研究』斉藤報恩会博物館図書部研究報告 4

江戸遺跡研究会編　2001『図解 江戸考古学研究辞典』柏書房

大橋康二　1994『古伊万里の文様 初期肥前磁器を中心に』理工学社

大橋康二構成　2002『蕎麦猪口辞典』平凡社

角川書店　1994『宮城県姓氏家系大辞典』

九州近世陶磁学会　2000『九州陶磁の編年』

九州近世陶磁学会　2004『受容層の違いによる九州陶磁の様相』 第 14 回九州近世陶磁学会資料

小泉　弘　2001 「Ⅵ江戸の生活文化 2 喫茶・飲酒・喫煙 2　煙管」『図解　江戸考古学研究辞典』江戸遺跡調査会　柏書房

古建築研究会編　1993『宮城県の古建築－江戸・明治期の建造物－』宮城県文化財調査報告書第 151 集　宮城県文化財保護協会

坂田啓編　1995『私本仙台藩士辞典』創栄出版

佐賀県立九州陶磁文化館　2008『土の美　古唐津－肥前陶器のすべて－』

佐藤　巧　1979『近世武士住宅』叢文社

汐留地区遺跡調査会　1996『汐留遺跡』

新宿区内藤町遺跡調査会　1992『内藤町遺跡 - 放射 5 号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書 -』

芹沢長介記念　東北陶磁文化館　1987『東北の近世陶磁』

財団法人 瀬戸市文化振興財団　2006『江戸時代のやきもの－生産と流通－』記念講演会・シンポジウム資料集

財団法人 瀬戸市文化振興財団　2006『江戸時代のやきもの－生産と流通－』平成 18 年度財団法人瀬戸市文化振興財団
埋蔵文化財センター企画展図録

仙台市教育委員会　1985『仙台城三ノ丸跡』仙台市文化財調査報告書第 76 集

仙台市教育委員会　1986『柳生』仙台市文化財調査報告書第 95 集

仙台市教育委員会　1997『養種園遺跡』仙台市文化財調査報告書第 214 集

仙台市教育委員会　2002『仙台城跡 1 －平成 13 年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第 259 集

仙台市教育委員会　2003『仙台城跡 2 －平成 14 年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第 264 集

仙台市教育委員会　2004『仙台城跡 3 －平成 15 年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第 270 集

仙台市教育委員会　2004『仙台城跡 4 －平成 15 年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第 271 集

仙台市教育委員会　2005『仙台城本丸跡 1 次調査－石垣修復工事に伴う発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第 282 集

仙台市教育委員会　2005『仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査（1）概要報告書』仙台市文化財調査報告書第 289 集

仙台市教育委員会　2006『仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査（2）概要報告書』仙台市文化財調査報告書第 302 集

仙台市教育委員会　2007『仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査（3）概要報告書』仙台市文化財調査報告書第 316 集

仙台市教育委員会　2007『川内 A 遺跡－仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ－』仙台市文化財調査報告書第 316 集

仙台市教育委員会　2009『仙台城跡－仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ－』仙台市文化財調査報告書第 342 集

仙台市教育委員会　2010『仙台城跡 10 －平成 21 年度　調査報告書－仙台城本丸大広間跡調査成果の総括』
仙台市文化財調査報告書第 316 集

仙台市環境計画課編・松本秀明監修　2001『せんだい空中写真集～杜の都いま むかし』仙台市環境計画課

仙台市史編纂委員会　1975『仙台市史 8　文書・資料・古代～近世資料篇』

仙台市史編纂委員会　1975『仙台市史 9　文書・資料・近世～明治資料篇』

仙台市史編纂委員会　1975『仙台市史 10　年表・書目・索引篇』

仙台市史編さん委員会　1994『仙台市史 特別編 1 自然』

仙台市史編さん委員会　1995『仙台市史 特別編 2 考古資料』

仙台市史編さん委員会　2002『仙台市史 通史編 3 近世 1』

仙台市史編さん委員会　2003『仙台市史 通史編 4 近世 2』

仙台市史編さん委員会　2004『仙台市史 通史編 5 近世 3』

高倉淳ほか編　1994『絵図・地図で見る仙台第一輯』 今野印刷株式会社

高倉淳ほか編　1994『絵図・地図で見る仙台第二輯』 今野印刷株式会社

東京大学遺跡調査室　1990『東京大学本郷構内の遺跡 法学部 4 号館・文学部 3 号館建設地遺跡』
東京大学遺跡調査室発掘調査報告書 2

東京都埋蔵文化財センター　2003『港区宇和島藩伊達屋敷跡遺跡－政策研究大学院大学建設に伴う調査』
東京都埋蔵文化財調査報告　第 141 集

東京都埋蔵文化財センター　2006『尾張藩上屋敷跡遺跡ⅩⅡ　防衛庁新設建物建設工事に伴う調査』
東京都埋蔵文化財調査報告　第 180 集
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1993『東北大学埋蔵文化財調査年報 6』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1994『東北大学埋蔵文化財調査年報 7』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1997『東北大学埋蔵文化財調査年報 8』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1998『東北大学埋蔵文化財調査年報 9』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1998『東北大学埋蔵文化財調査年報 10』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2000『東北大学埋蔵文化財調査年報 11』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2000『東北大学埋蔵文化財調査年報 13』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2005『東北大学埋蔵文化財調査年報 18』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2006『東北大学埋蔵文化財調査年報 19』　第 1 分冊
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2007『東北大学埋蔵文化財調査年報 19』　第 3 分冊
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2008『東北大学埋蔵文化財調査年報 19』　第 4 分冊
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2009『東北大学埋蔵文化財調査年報 19』　第 2 分冊
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2010『東北大学埋蔵文化財調査年報 19』　第 5 分冊
東北大学埋蔵文化財調査室　2010『東北大学埋蔵文化財調査年報 24』
兵庫埋蔵銭調査会　1996『日本出土銭総覧』
土岐市美濃陶磁歴史館　2003『第 15 回　土岐市織部の日／特別展　織部の流通圏を探る　東日本』
長佐古真也　2001 「Ⅵ江戸の生活文化 8 生産と消費　焼継」『図解　江戸考古学研究辞典』江戸遺跡調査会　柏書房
根津美術館　2002『知られざる唐津　二彩手・単色釉・三島手』
福島市教育委員会　1998『岸窯跡－近世窯跡の調査－』
松本秀明・熊谷真樹　2010 「広瀬川中流部における完新世の川床高度変化に関する知見」東北地理学会・北海道地理学会共催
秋季学術大会発表要旨　『季刊地理学 Vol.63』
宮城県宮崎町教育委員会　1990『切込窯跡』宮崎町文化財調査報告書第 3 集
宮城県教育委員会　1994『上野館跡－近世茂庭氏居館跡発掘調査報告書－』宮崎町文化財調査報告書第 156 集
森本伊知郎　2009『近世陶磁器の考古学 - 出土遺物から見た生産と消費 -』椙山女子大学研究叢書 35　雄山閣

写　真　図　版

1.　路線部Ⅰ区北壁面１　（南西から）

2.　路線部Ⅰ区北壁面２　（南西から）

3.　路線部Ⅰ区北壁面３　（南西から）

4.　路線部Ⅰ区北壁面４　（南西から）

5.　路線部Ⅰ区北壁面５　（南西から）

6.　路線部Ⅰ区北壁面６　（南西から）

7.　路線部Ⅰ区北壁面７　（南西から）

8.　路線部Ⅰ区北壁面８　（南西から）

図版１　路線部Ⅰ区壁面（1）

1.　路線部Ⅰ区北壁面 9　（南西から）

2.　路線部Ⅰ区北壁面 10　（南西から）

3.　路線部Ⅰ区北壁面 11　（南西から）

4.　路線部Ⅰ区北壁面 12　（南西から）

5.　路線部Ⅰ区北壁面 13　（南西から）

6.　路線部Ⅰ区北壁面 14　（南西から）

7.　路線部Ⅰ区北壁面 15　（南西から）

8.　路線部Ⅰ区北壁面 16・Ⅱ区北壁面 1　（南西から）

図版 2　路線部Ⅰ区壁面（2）路線部Ⅱ区壁面（1）

1.　路線部 II 区北壁面 2　（南西から）

2.　路線部 II 区北壁面 3　（南西から）

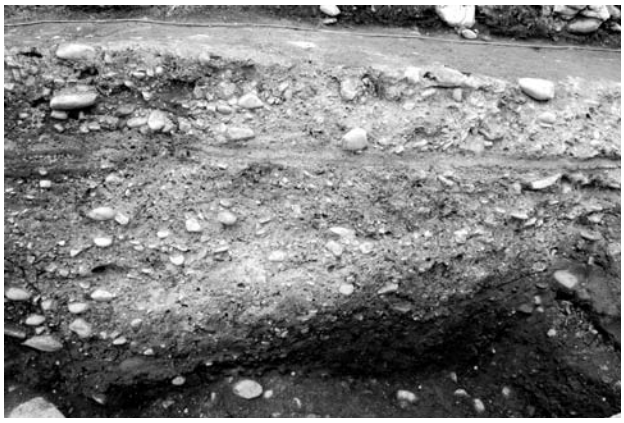
3.　路線部 I 区北壁面 4　（南西から）

4.　路線部 II 区北壁面 5　（南西から）

5.　路線部 I 区北壁面 6　（南西から）

6.　路線部 II 区北壁面 7　（南西から）

7.　路線部 I 区北壁面 8　（南西から）

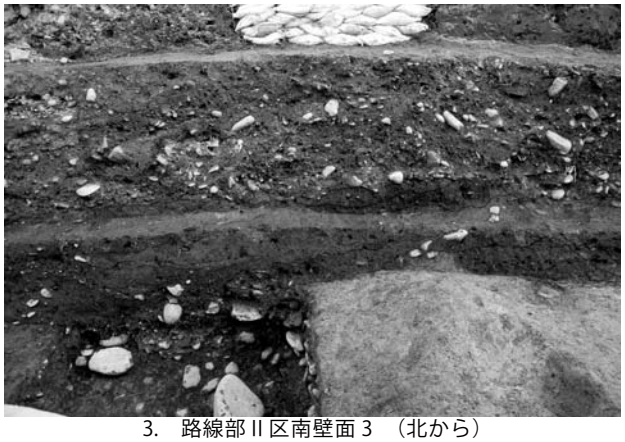


8.　路線部 II 区北壁面 9　（南西から）

図版 3　路線部 II 区壁面（2）

1.　路線部Ⅱ区南壁面 1　（北西から）

2.　路線部Ⅱ区南壁面 2　（北から）


3.　路線部Ⅱ区南壁面 3　（北から）

4.　路線部Ⅱ区南壁面 4　（北から）

5.　路線部Ⅱ区南壁面 5　（北から）

6.　路線部Ⅱ区南壁面 6　（北から）

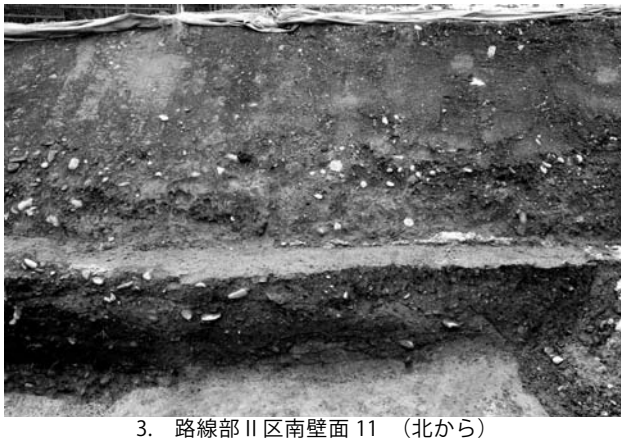
7.　路線部Ⅱ区南壁面 7　（北から）

8.　路線部Ⅱ区南壁面 8　（北から）

図版 4　路線部Ⅱ区壁面（3）

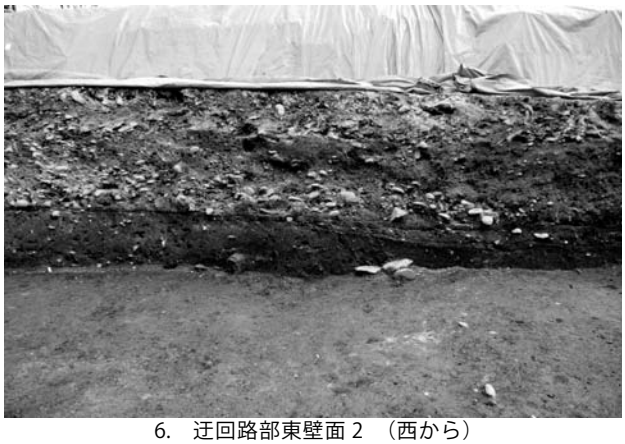
1.　路線部Ⅱ区南壁面 9　（北から）

2.　路線部Ⅱ区南壁面 10　（北から）


3.　路線部Ⅱ区南壁面 11　（北から）

4.　路線部Ⅱ区南壁面全景　（北西から）

5.　迂回路部東壁面 1　（西から）


6.　迂回路部東壁面 2　（西から）

7.　迂回路部東壁面 3　（西から）

8.　迂回路部東壁面 4　（西から）

図版 5　路線部Ⅱ区壁面（4）迂回路部壁面（1）

1.　迂回路部東壁面 5　（西から）

2.　迂回路部東壁面全景　（南西から）

3.　迂回路部西壁面 1　（東から）

4.　迂回路部西壁面 2　（東から）

5.　迂回路部西壁面 3　（東から）

6.　迂回路部西壁面 4　（東から）

7.　迂回路部西壁面 5　（東から）

8.　迂回路部西壁面 6　（東から）

図版 6　迂回路部壁面（2）

1.　迂回路部西壁面 8　（東から）

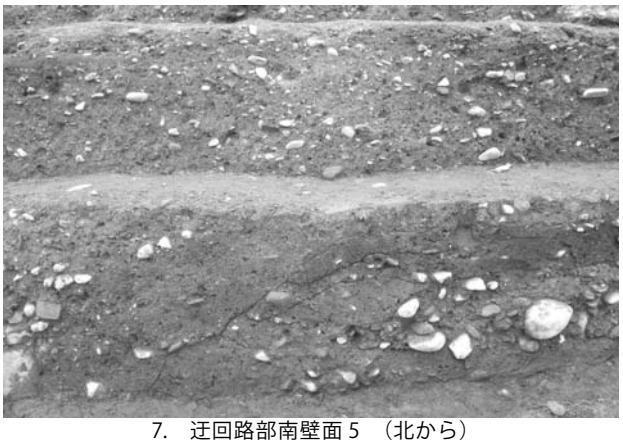
2.　迂回路部西壁全景　（東から）

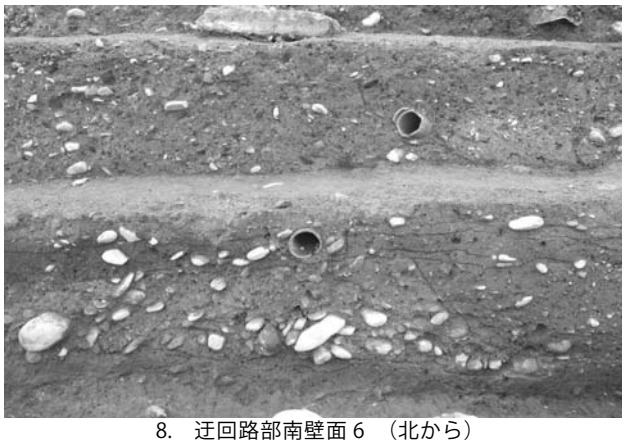
3.　迂回路部南壁面 1　（北から）

4.　迂回路部南壁面 2　（北から）

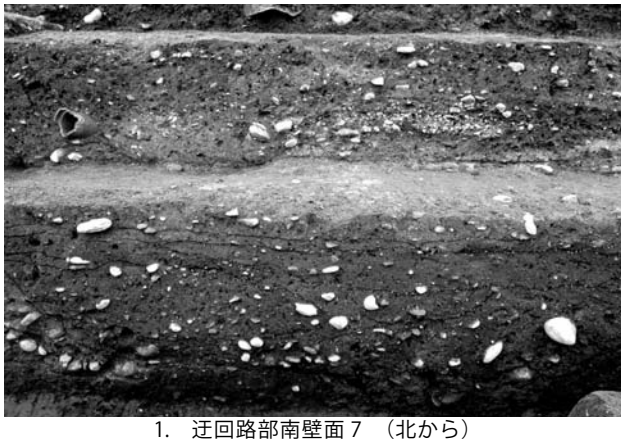
5.　迂回路部南壁面 3　（北東から）

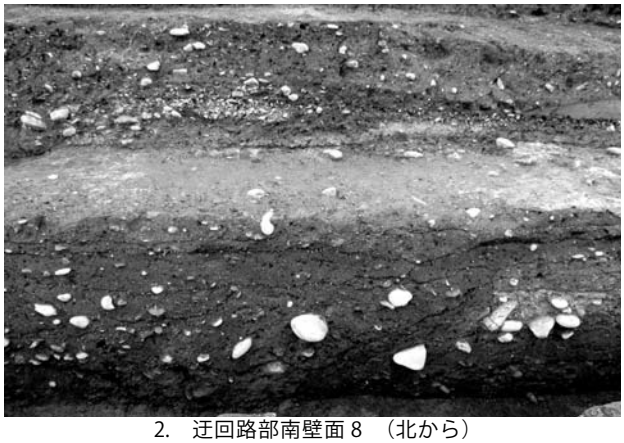
6.　迂回路部南壁面 4　（北から）

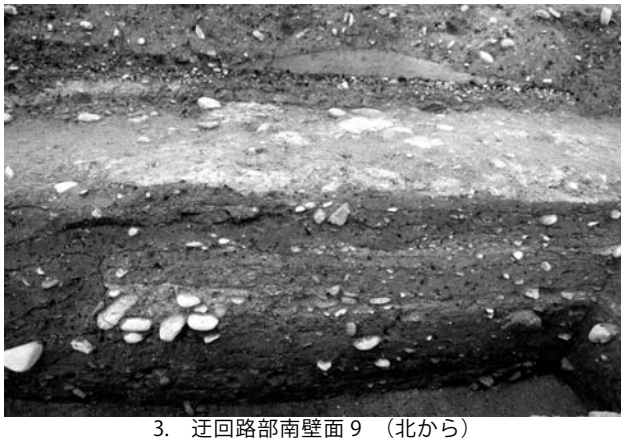

7.　迂回路部南壁面 5　（北から）


8.　迂回路部南壁面 6　（北から）

図版 7　迂回路部壁面（3）


1.　迂回路部南壁面 7　（北から）


2.　迂回路部南壁面 8　（北から）


3.　迂回路部南壁面 9　（北から）

4.　迂回路部南壁面 10　（北から）

5.　迂回路部南壁面 11　（北から）

6.　迂回路部南壁面 12　（北から）

7.　迂回路部南壁面 13　（北から）

8.　迂回路部南壁面 14　（北から）

図版 8　迂回路部壁面（4）

1.　迂回路部南壁面全景　（北東から）

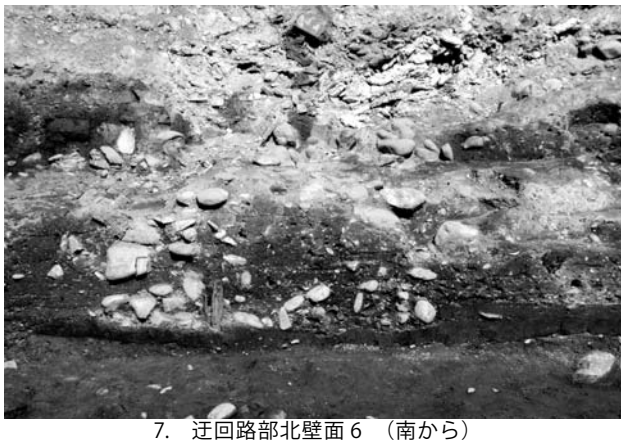
2.　迂回路部北壁面 1　（南から）

3.　迂回路部北壁面 2　（南から）

4.　迂回路部北壁面 3　（南から）

5.　迂回路部北壁面 4　（南から）

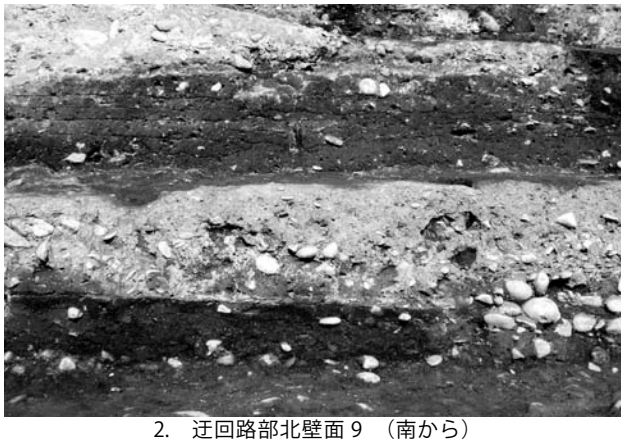
6.　迂回路部北壁面 5　（南から）

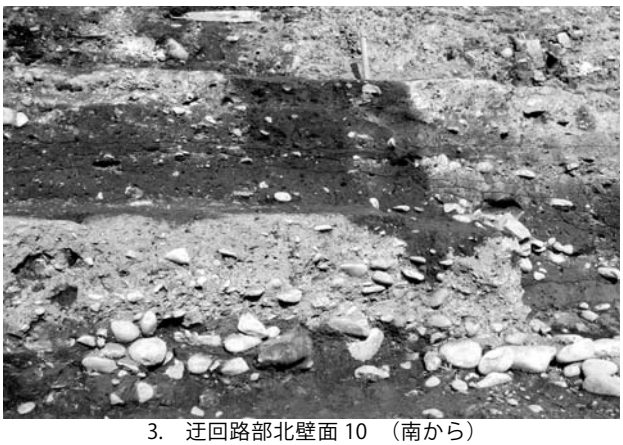

7.　迂回路部北壁面 6　（南から）

8.　迂回路部北壁面 7　（南から）

図版 9　迂回路部壁面（5）

1.　迂回路部北壁面 8　（南から）


2.　迂回路部北壁面 9　（南から）


3.　迂回路部北壁面 10　（南から）

4.　迂回路部北壁面 11　（南から）

5.　迂回路部北壁面 12　（南から）

6.　迂回路部北壁面 13　（南から）

7.　迂回路部北壁全景　（南東から）

8.　迂回路部北壁全景　（南西から）

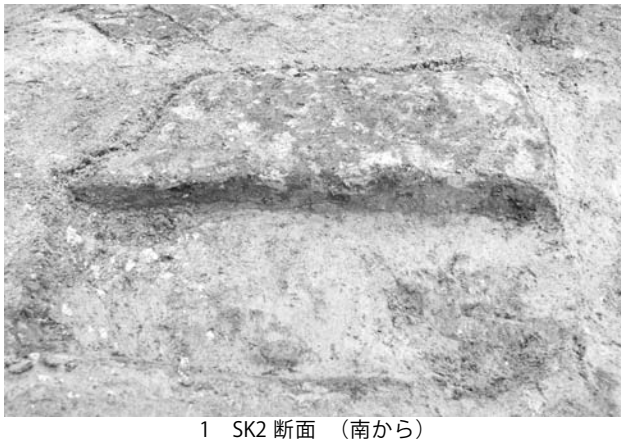
図版 10　迂回路部壁面（6）

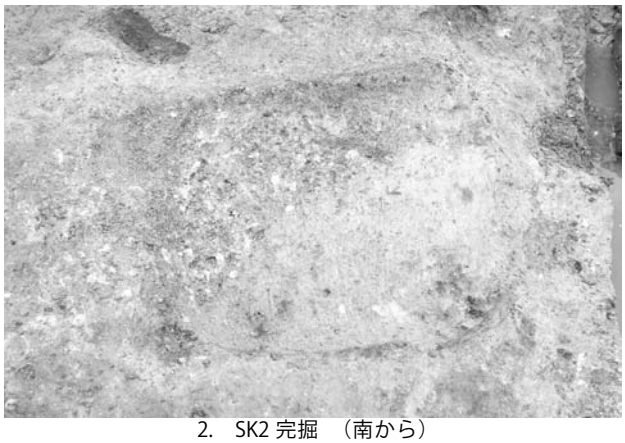
1.　調査区東側Ⅶ層上面遺構完掘　（北から）

2.　SD11 完掘　（南から）

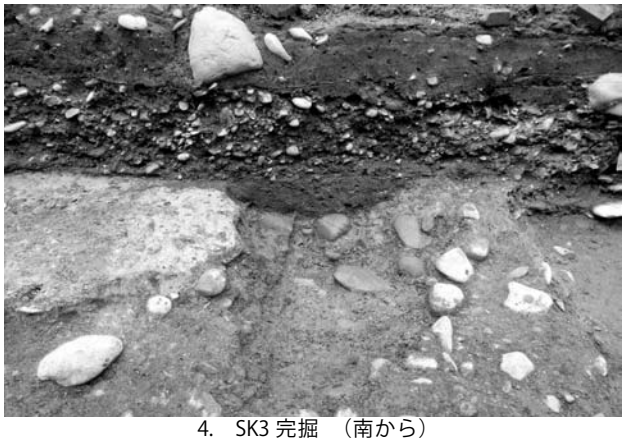
3.　SD12 断面　（南から）

図版 11　路線部Ⅰ区Ⅶ層（1）

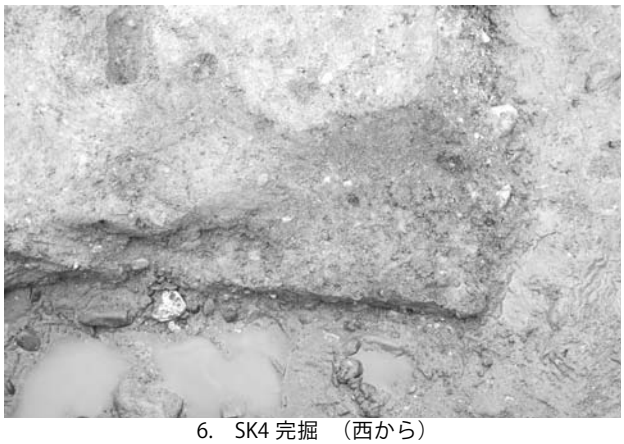

1　SK2 断面　（南から）


2.　SK2 完掘　（南から）

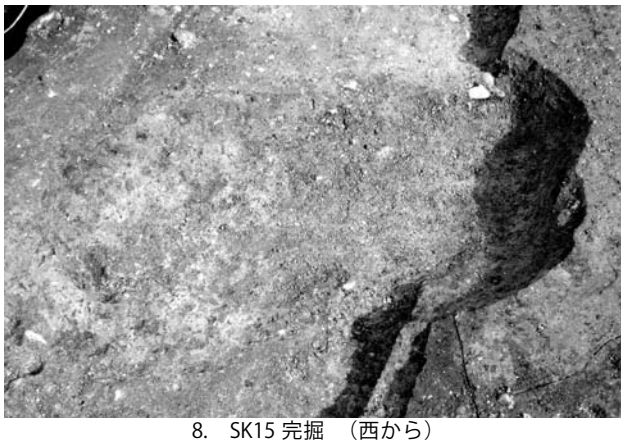
3.　SK3 断面　（南から）


4.　SK3 完掘　（南から）

5.　SK4 断面　（西から）

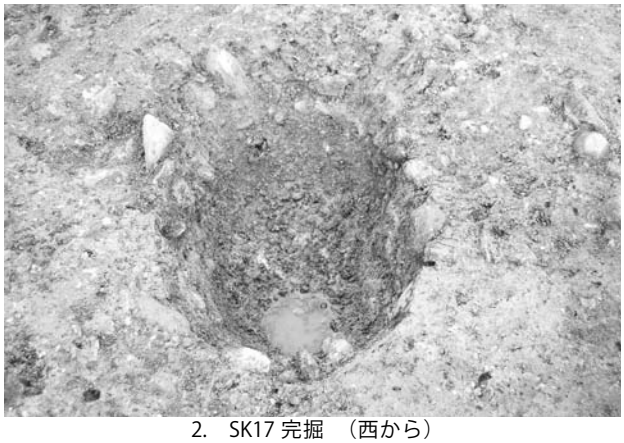

6.　SK4 完掘　（西から）

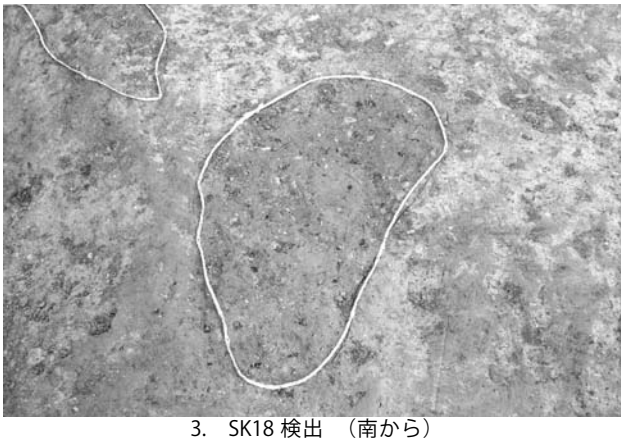
7.　SK15 断面　（西から）


8.　SK15 完掘　（西から）

図版 12　路線部Ⅰ区Ⅶ層（2）

1.　SK17 断面　（西から）


2.　SK17 完掘　（西から）


3.　SK18 検出　（南から）

4.　SK18 断面　（南西から）

5.　SA3 検出　（南から）

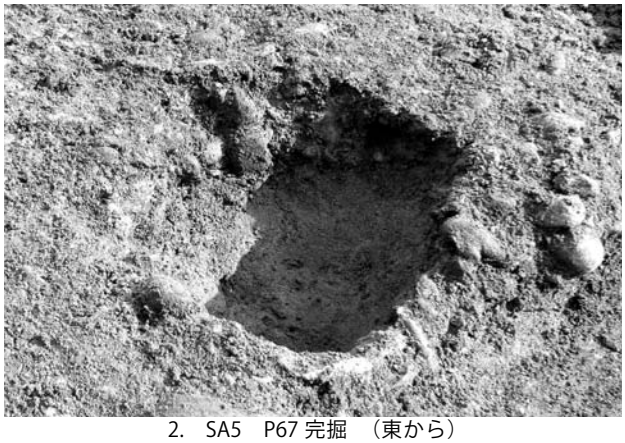
6.　SA3　P42 断面　（南西から）

7.　SA3　P43 断面　（東から）

8.　SA3　P44 断面　（南から）

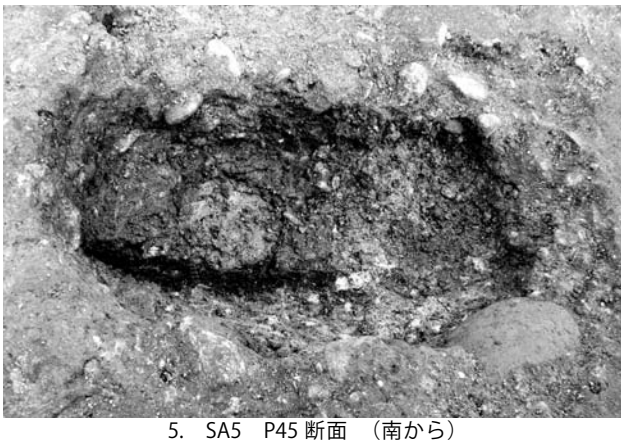
図版 13　路線部Ⅰ区Ⅶ層（3）Ⅵ層（1）

1.　SA5　P67 断面　（東から）


2.　SA5　P67 完掘　（東から）

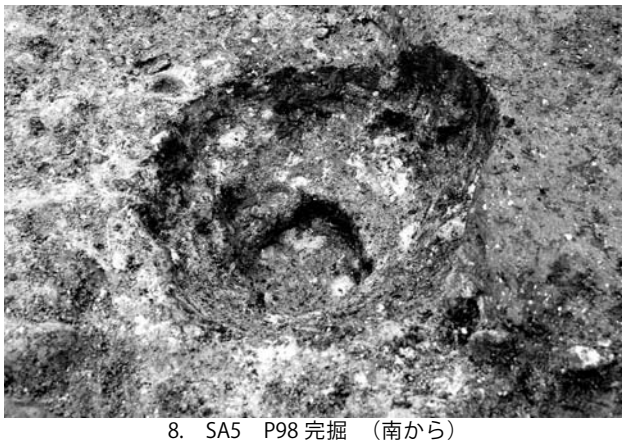
3.　SA5　P86 断面　（南西から）

4.　SA5　P86 完掘　（南西から）


5.　SA5　P45 断面　（南から）

6.　SA5　P45 完掘　（南から）

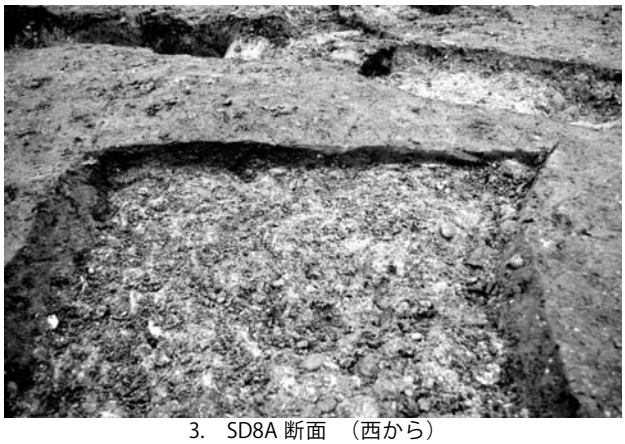
7.　SA5　P98 断面　（南から）


8.　SA5　P98 完掘　（南から）

図版 14　路線部Ⅰ区Ⅵ層（2）

1.　SD7・8・SK10 検出　（南東から）

2.　SD8 完掘　（西から）

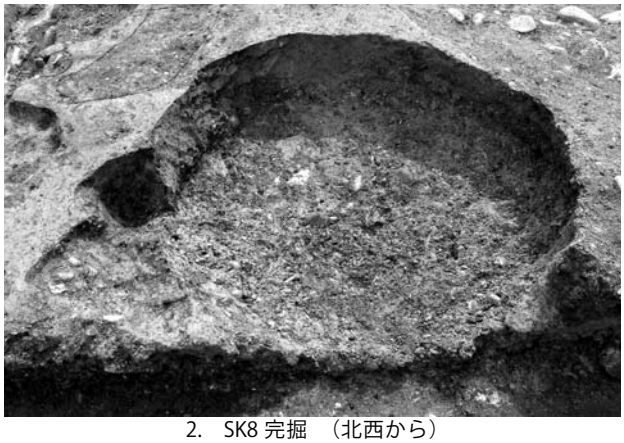


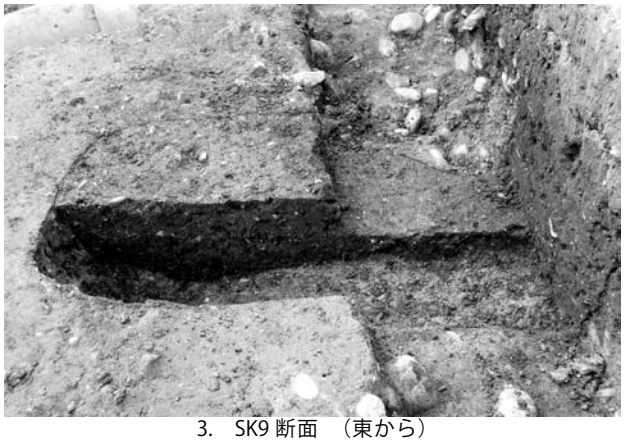
3.　SD8A 断面　（西から）

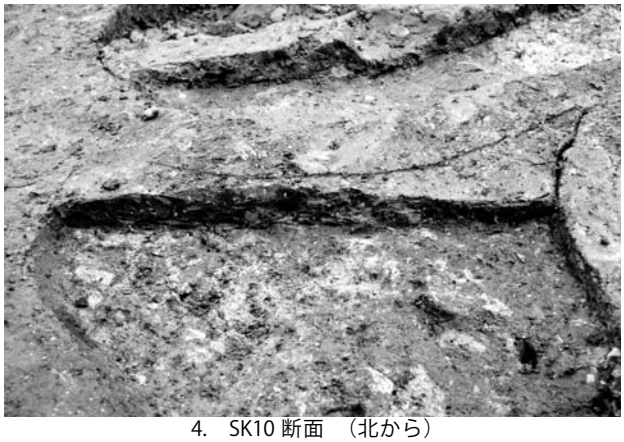
4.　SD8B 断面　（西から）

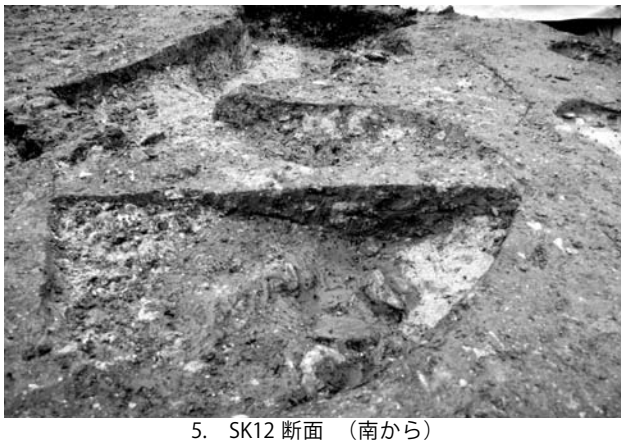
図版 15　路線部Ⅰ区Ⅵ層（3）

1.　SK8 断面　（北西から）


2.　SK8 完掘　（北西から）


3.　SK9 断面　（東から）


4.　SK10 断面　（北から）


5.　SK12 断面　（南から）

6.　SK10・12 完掘　（南から）

7.　SK13 断面　（東から）

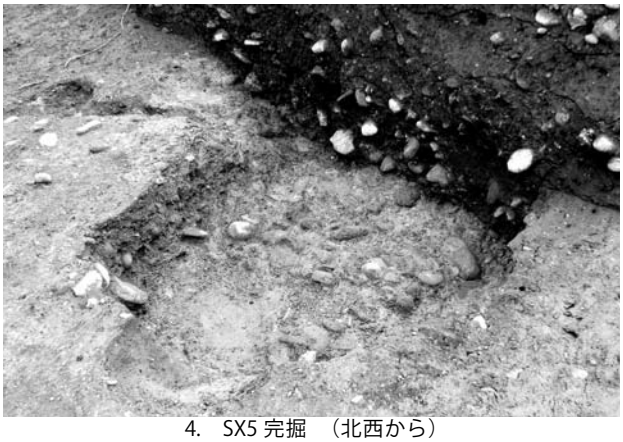
8.　SK13 完掘　（東から）

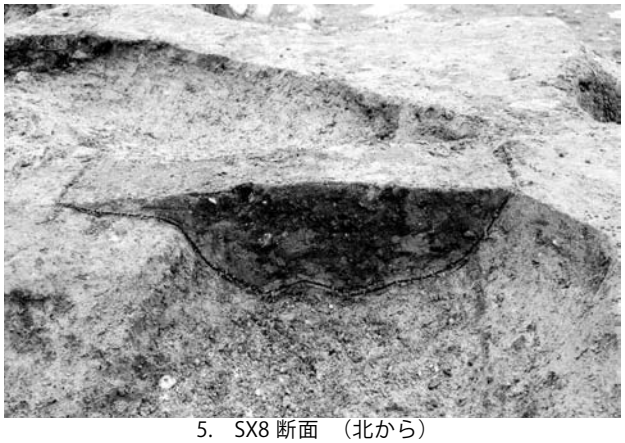
図版 16　路線部Ⅰ区Ⅵ層（4）

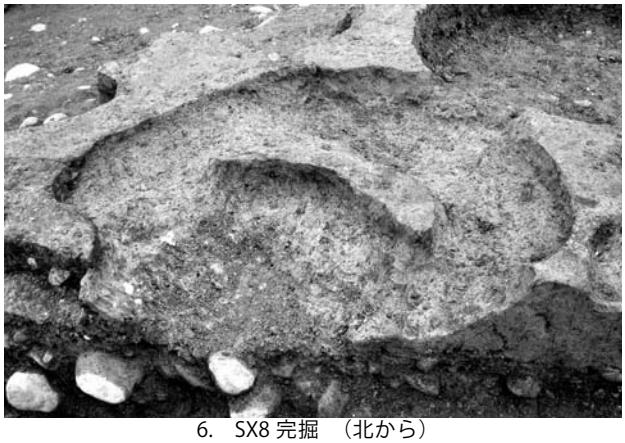
1.　SK16 断面　（北西から）

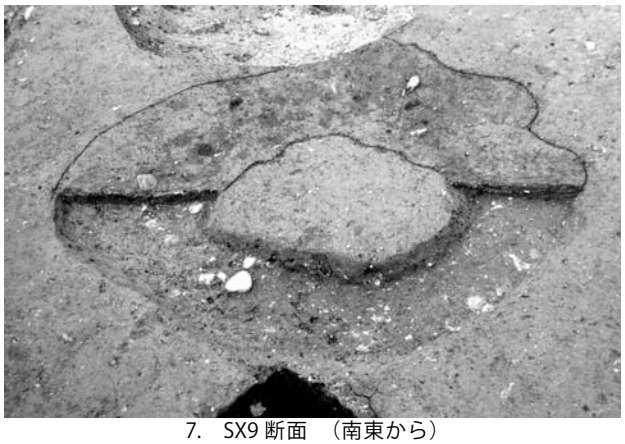
2.　SK16 完掘　（南東から）

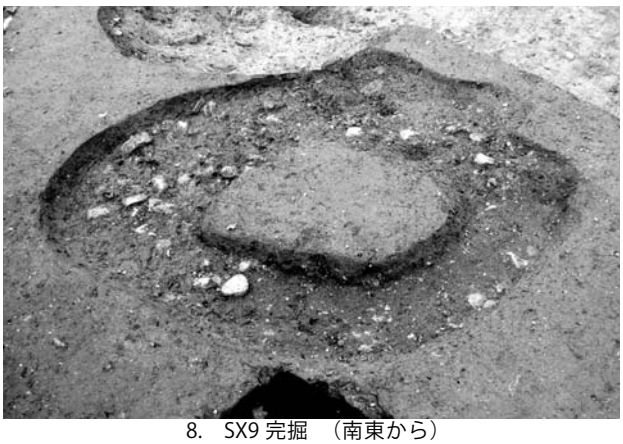
3.　SX5 樹木根　（北西から）


4.　SX5 完掘　（北西から）


5.　SX8 断面　（北から）

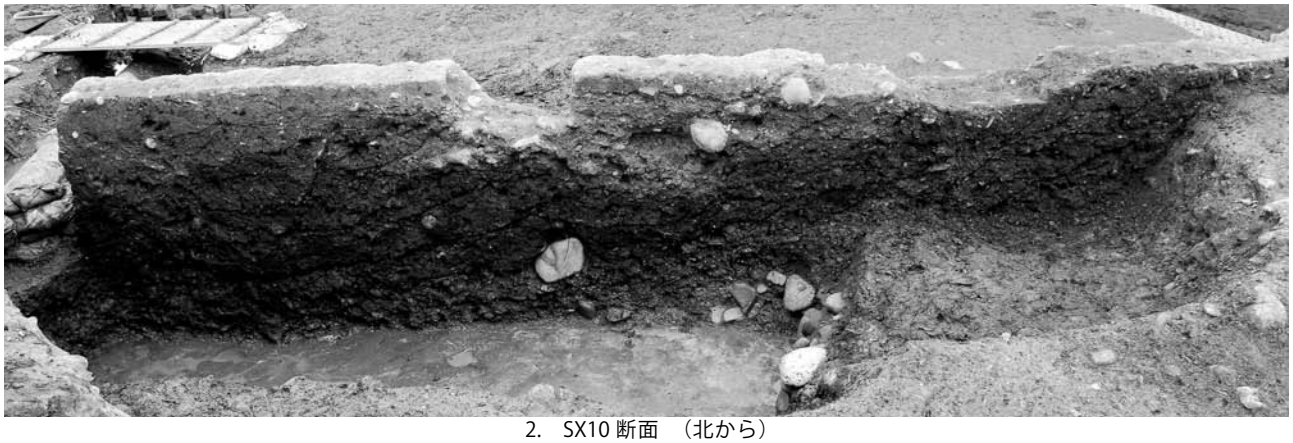

6.　SX8 完掘　（北から）


7.　SX9 断面　（南東から）


8.　SX9 完掘　（南東から）

図版 17　路線部Ⅰ区Ⅵ層（5）

1.　調査区中央Ⅵ層上面遺構完掘　（北東から）



2.　SX10 断面　（北から）

3.　SX10 テラス・土留め検出　（北東から）

図版 18　路線部Ⅰ区Ⅵ層（6）

1.　SX10 テラスと土留め　（東から）

2.　SX10 テラス部断面　（北から）

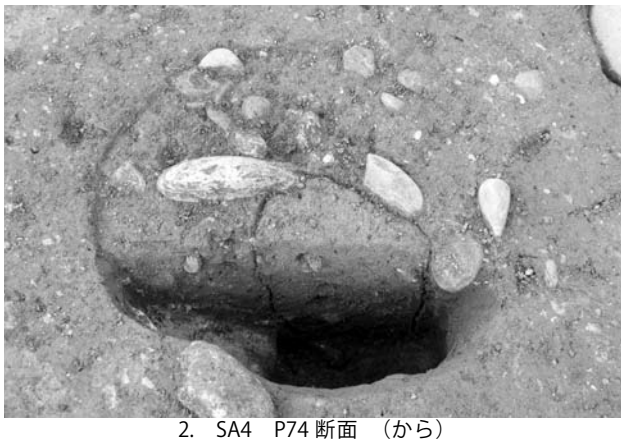
3.　SX10 完掘　（北西から）

4.　SX11 完掘　（南から）

5.　SX11 断面　（南西から）

図版 19　路線部Ⅰ区Ⅵ層（7）

1.　SA4 完掘　（東から）



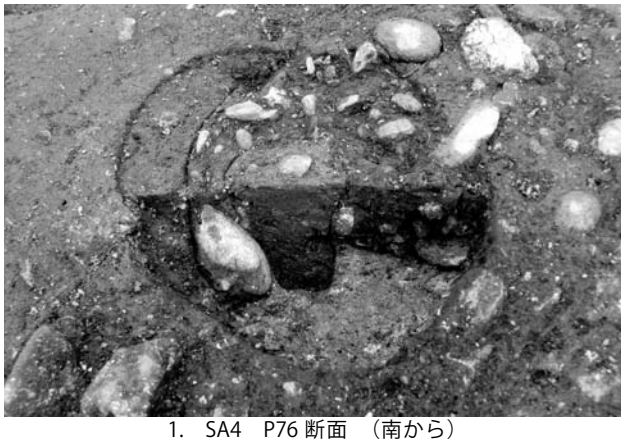
2.　SA4　P74 断面　（から）

3.　SA4　P74 完掘　（南東から）

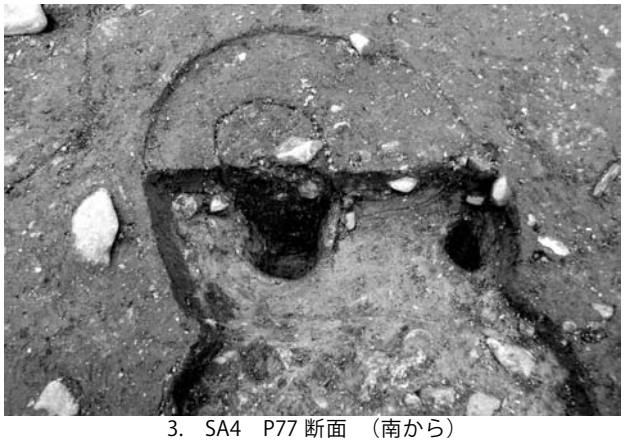
4.　SA4　P75 断面　（南東から）

5.　SA4　P75 完掘　（南東から）

図版 20　路線部Ⅰ区Ⅴ層（1）

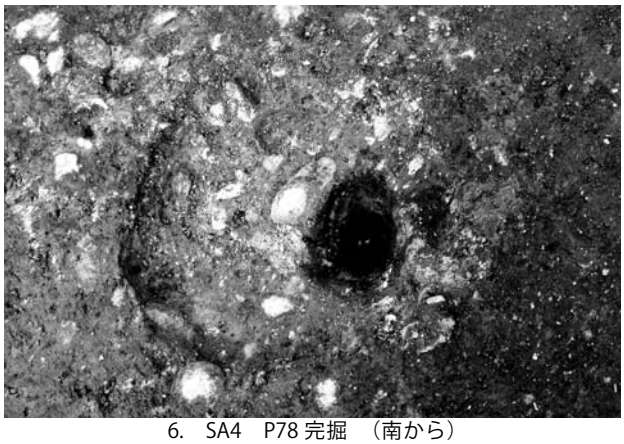

1.　SA4　P76 断面　（南から）

2.　SA4　P76 完掘　（南から）

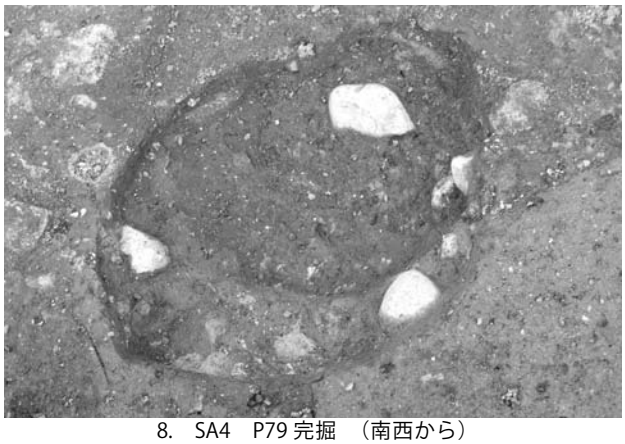

3.　SA4　P77 断面　（南から）

4.　SA4　P77 完掘　（南から）

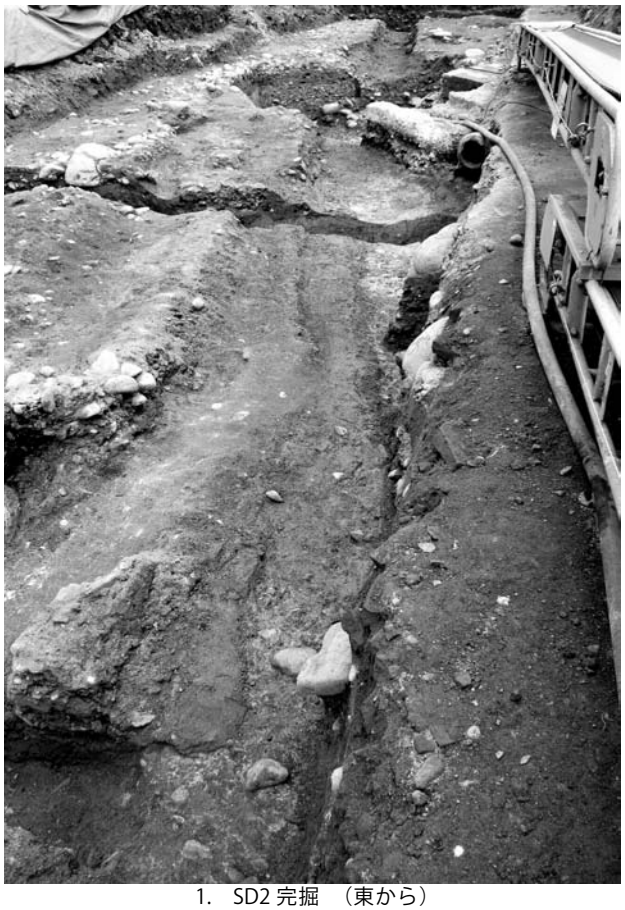
5.　SA4　P78 断面　（南から）


6.　SA4　P78 完掘　（南から）

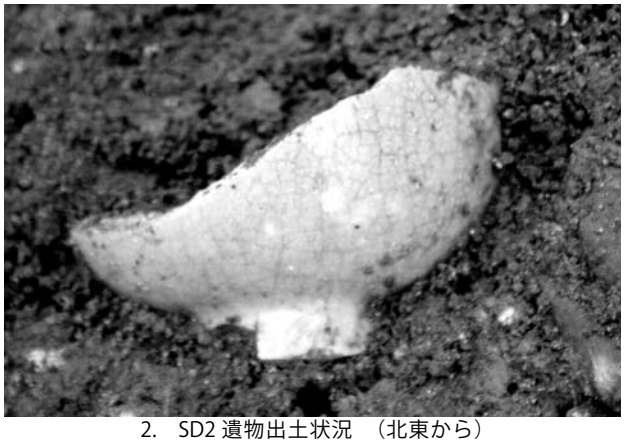
7.　SA4　P79 断面　（南から）


8.　SA4　P79 完掘　（南西から）

図版 21　路線部Ⅰ区Ⅴ層（2）



1.　SD2 完掘　（東から）



2.　SD2 遺物出土状況　（北東から）

3.　SD3 完掘　（東から）

4.　SD3 完掘　（南東から）

図版 22　路線部Ⅰ区Ⅴ層（3）

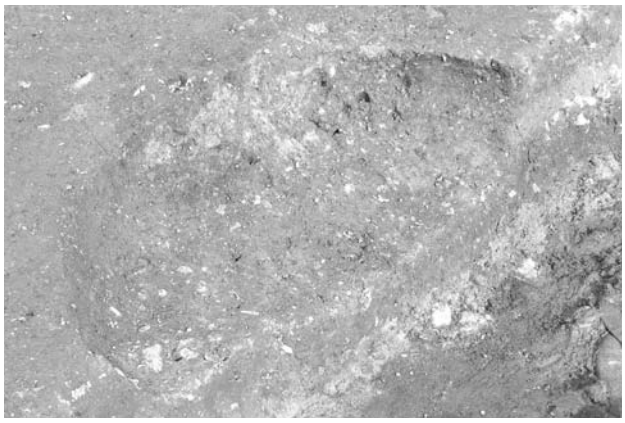
1.　SD7・8 検出　（南西から）

2.　SD7 完掘　（南西から）

3.　SD10 完掘　（西から）

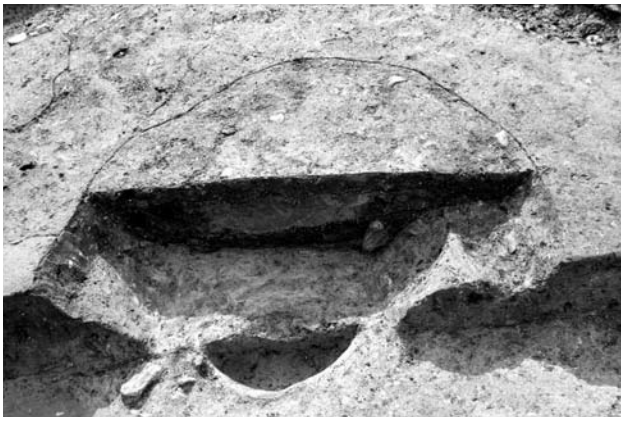
4.　SD10 東端完掘　（西から）

5.　SK11 断面　（南から）



6.　SK11 完掘　（南西から）

図版 23　路線部Ⅰ区Ⅴ層（4）



1.　SK14 断面　（北から）

2.　SK14 完掘　（北から）

3.　SX4 検出　（南から）

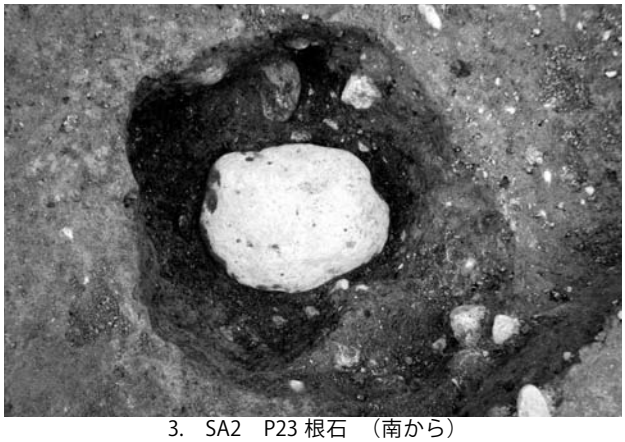
4.　SX4 完掘　（南から）

5.　杭列検出　（西から）

図版 24　路線部Ⅰ区Ⅴ層（5）

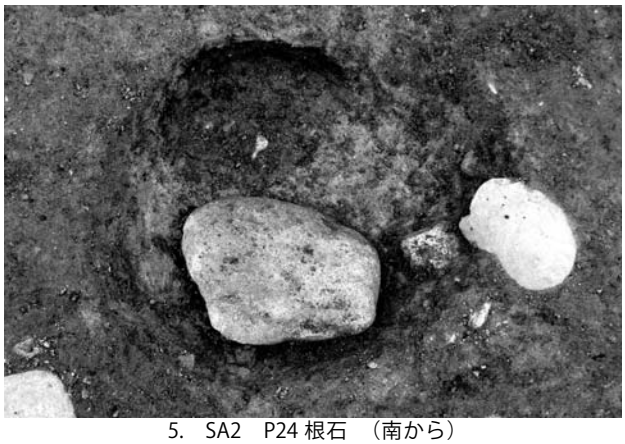
1.　SA2 検出　（南から）

2.　SA2　P23 断面　（南から）



3.　SA2　P23 根石　（南から）

4.　SA2　P24 断面　（南から）



5.　SA2　P24 根石　（南から）

6.　SA2　P25 断面　（南から）

7.　SA2　P25 根石　（南から）

図版 25　路線部Ⅰ区Ⅳ層（1）

1.　SA2　P26 断面　（南から）

2.　SA2　P26 根石　（南から）

3.　SA2　P27 断面　（南から）

4.　SA2　P27 根石　（南から）

5.　SA2　P28 断面　（北から）

6.　SA2　P28 根石　（北から）

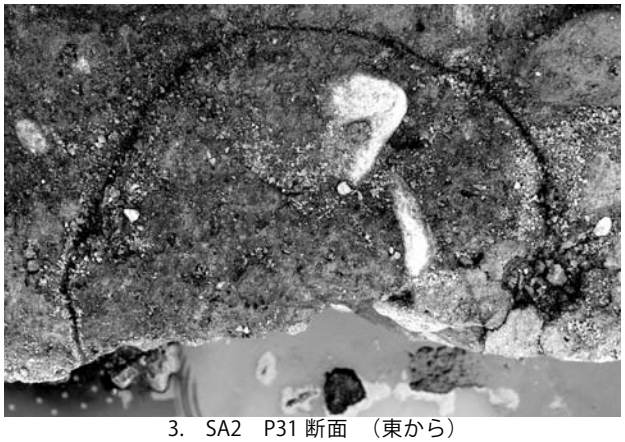
7.　SA2　P29 断面　（南から）

8.　SA2　P29 根石　（南から）

図版 26　路線部Ⅰ区Ⅳ層（2）

1.　SA2　P30 断面　（南から）

2.　SA2　P30 根石　（南から）



3.　SA2　P31 断面　（東から）

4.　SA2　P31 断面　（東から）

5.　SA2 完掘　（南から）

図版 27　路線部Ⅰ区Ⅳ層（3）